昭和36年8月1日発行（毎月1回1日発行・第13巻第8号）昭和24年2月3日第3種郵便物認可　昭和34年12月11日国鉄東局特別扱承認雑誌第692号

月刊キリスト

8

特集・戦争

なぜ戦争に反対するか　中川晶輝
グラビア　原爆で死んだ一少女の記録
わたしの戦争体験　田口重良・鷲山林蔵
随想　坂田祐・高橋虔・迫千代子

青年文庫シリーズ（新書判）

幸福

北森嘉蔵著　90円　〒10円

現代人の中には幸福を熱心に求めながら、現実にはそれを喪失して、絶望的な苦しみにさいなまれつつ生きている人々がいかに多いことであろう。著名な神学者であり、また文学にも精通している著者がキリストにある真の幸福とは何かと平明なことばで読者に語りかける。

結婚の倫理

深津文雄著　80円　〒10円

「性の肯定」「性における人格」「結婚の準備」「誓い」「思いやり」など具体的な問題にふれながらキリスト教の結婚観からその倫理を学ぼうとする青年男女向良書。

既刊

キリスト教と文学　笹淵友一著　80円　〒10円

自然科学と時代思潮　杉浦義勝著　80円　〒10円

音楽とプロテスタンティズム　津川主一著　80円　〒10円

職場に……

学校に……

コーラス・

グループに……

愛唱

讃美歌

百選

第11版・新書判・40円・〒10円

わが国で一般に広く愛唱されているさんびかを「讃美歌」「古今聖歌集」「リバイバル聖歌」中より100曲選んで曲と歌詞を載せ、それぞれに適切な解説を付し、各曲には略符もつけてある。

全ページ美麗カット入り。

発行

日本基督教協議会文書事業部

東京都中央区銀座4の2

振替東京 11679

発売

教文館

東京都中央区銀座4の2

振替東京 11357

聖書入門　北森嘉蔵著

キリスト教の経典としての聖書が、生きている人間にとって、持続する社会にとって、どのように関わっているのか。著者特有の文章で真理内容の手引きとして明解に展開される聖書についての論文集

新書判・176頁・200円・送料30円

救済の論理　北森嘉蔵著

神学とは福音の厳密な把握であるという著者が、新らしい形のキリスト教入門書として、その一貫した立場で説いた、独自の救済の論理。『聖書入門』とならんで、北森神学を形成する重要の一書。

新書判・140頁・160円・送料30円

内村鑑三聖書注解全集　第13回配本　最新刊！

第14巻　テモテ書・ヤコブ書・ペテロ書
ヨハネ書・ピレモン書・黙示録

編集・解説　山本泰次郎

B6判・302頁・380円・送料都内50円・地方90円

東京都中央区銀座4－2　**教文館**　振替口座 東京11357

信仰に生きる　わたしは今も戸をたたく……37
―原爆で死んだ一少女の記録―

聖句をめぐる座談会　生きるも主のため……(司会)石島三郎……50
―ロマ一四・七、八―

キリスト教のいろは　ここに神がいる……島村亀鶴……54

恋愛論　男と女……高木幹太……32

読者の証し　七転八倒の暗い道から……矢野進……46

人生相談室　若い教会員の悩み……(回答)気仙三一……48

現代のカルテ　レジャーブーム……伊藤義清……36

書評　小説・入門・随筆など……大倉幾代……45

生きる意味について　放蕩息子の運命……佐古純一郎……62

連載小説　夜警番の日記……椎名麟三……68

愛読者カードの集計……75

表紙・藤城清治　カット・山中春雄

巻頭随想
ケーベル先生のこと……坂田祐…5
明治二八年の奈良大会……高橋虔…6
いまわしい日の思い……迫千代子…6

伝道説教
神の投資信託……飯清…8

思いと祈り
パウロ・信仰と愛……シュラッター／井上良雄訳…12

特集・戦争
なぜ戦争に反対するか……中川晶輝…14
戦争前後の悪夢……田口重良…20
魂のさすらい……鷲山林蔵…24
―八月一五日をめぐる―
キリスト者平和の会……森岡巖…30
世界宗教者平和会議のこと……飯島宗享…58
〈社会を見る目〉
防衛法から攻撃法へ……松尾喜代司…60

聖書のさしえ（8）

辻　　成史

第１図　昇天図。ラブラの福音書（586）挿絵

キリスト教視聴覚センター推薦
視聴覚教育シリーズ

フランネルグラフの作り方・使い方

山田　稔・清水健至共著　<B6　130円>

フランネルグラフという教具の構成、作り方　特徴と用途　取り扱いの基本　管理　応用　資料　付録台本"帰ってきた息子"ほか2篇（フィギュア縮刷型紙つき）

えばなしの作り方・使い方

上田次郎著　<B6　110円>

えばなしとは　材料　構図のとり方　仕掛けの作り方　セットといわれもの　台本の作り方　聖書とえばなし　実演のやり方　会場と対象　マイクと照明　付録台本"たねまき""チビのこびつじ"

東京都渋谷区緑岡22　TEL.（401）4121～5

● 略称アバコ ●

財団法人 基督教視聴覚センター

N. CC 夏期学校副読本

絶賛発売中！

みあしのあと

C. M. シェルダン著　別府信男 編訳
表紙挿絵　上田次郎

シェルダンの名著"みあしのあと"は各国語に訳されている。もしキリストならば、この場合どうするだろうか？　と考えて行動したバージニア。全篇にみなぎる現実的なタッチは読者を不思議な世界へ導く。ドライで真摯な著者の眼は赤裸々な世の実態をえぐり、若いクリスチャンの態度を養わせる好書（中高生向）

A 5 版変形　定価200円　〒40

キリスト教伝道史

W・R・メトリンケ著

本書はキリスト教史を伝道という観点から解明したもので、キリストの福音が激しい嵐の中にも神の導きによって進展していく事実を力強く訴えている

B 6 版　定価一〇〇円　〒50

東京都渋谷区神山町11　ヨルダン社　振替東京 195934

福岡店～福岡市西新町西献内　京都店～京都市左京区北白川山の元町病院内

3

4

第2図　石棺彫刻(3世紀末)。これにはローマのカタコンベなどに見られる代表的初期図像、良き牧者・ヨナの物語・ダニエルと獅師・ノアの箱舟などがすべてみられる

第3図　石刑図。ラブラの福音書挿絵

第4図　聖遺物箱板絵（580～600頃）

2

キリスト教美術は、今日わたしたちが日常接している世俗の芸術とはまた違った特別な見方を要求する。その見方とは一口で言えば、「意味」の理解ということであろう。もちろん、すべての美術作品はそれぞれ主題の意味をになっている。リンゴの絵、人物像、そして抽象芸術でさえも抽象的形態（フォルム）と色彩という「もの」として、世俗の世界に対して意味をもっている。しかし、現代美術の鑑賞はもっぱら主題の意味を無視しようという方向に伸びてきた。だから、これはなにが画いてあるのだろう、という卒直な問は、現代美術の理解を求めるものにとってはタブーであった。しかし、キリスト教美術に接する際には、まさに、この「なにが」が問題とされなければならない。すべてのキリスト教美術は、教会の教義・礼拝・告白の象徴である。そして、それは窮極的にはわたしたち自身の信仰告白〝我信ず〟にかかっているのである。以下数回にわたって、このような立場から、あまりにも現代的な見方によって見失なわれようとする教会芸術の意味の〝ときあかし〟を試みたい。

第四図に挙げた板絵には五つの場面、復活・昇天・磔刑・降誕・洗礼が描かれている。この五つの場面は聖地イェルサレムにおいて編纂され、あらゆる教会芸術の基礎となった主題群（サイクル）である。この場面は福音書の物語とはもちろんのこと、礼拝・教義と深い関係をもっている。第3図はこれと同じシリヤ系の磔刑図である。テュニックをまとったキリスト、背後の山、槍を持つ兵士と海綿を差出す男、ふたりの泥棒、マリヤとヨハネ。これらのものは磔刑図に関する一つの約束として厳しく何百年も守り受け継がれてきた。第1図の昇天図にしても同様である。中央に立つ教会の象徴としてのマリヤ・左右に立つパウロ(！)とペテロ、上空にはマンドラ（大光背）にのり書物を手にするキリストが天使と黙示録の四つの活物に囲まれて昇天する。このようなシリヤ系の図像を、ローマのカタコンベや石棺彫刻の初期の図像（第2図）と比較するとその違いが明白で興味深い。

月刊 キリスト・8月号

巻頭随想

ケーベル先生のこと

坂田祐

六月一四日は、恩師ケーベル博士の命日である。先生は長い間、東京帝国大学（いまの東大）の外人教師として、もっぱら哲学の講義をなされた。一九一四年、任期満了して、故国ドイツに帰国するために、横浜に来られたが、そのとき、ちょうど世界大戦が勃発したので、帰れなくなり、そのままロシヤの領事館に滞在されることになった。ハウスガイスト（家の霊）の愛称をもって呼ばれた愛弟子、久保勉くんを友として、静かな生活をなされたが、晩年に病気にかかられ、一九二三年六月一四日、この領事館で、ついに、永眠なされたのである。

親しい弟子たちが集まって、相沢の火葬場でお骨にし、東京雑司ケ谷の墓地に葬ったのである。いま墓地の入口に、東京都はケーベル先生の生涯を簡単に記した立札を立てて、史蹟としている。

三三回忌から、毎年この命日に、先生から親しく教えを受けた弟子たちが集まって墓参をしてきた。このお墓参りに集まる門下生は、わたしの記憶にあるのは次のかたがたである。常に先生の側にいて最後までお世話した久保勉くんを筆頭に、安倍能成、石原謙の三氏は、いつも世話人となり、上野直昭、宮本和吉、伊藤吉之助、藤原正、高橋里美、高橋穣、小山豊隆、小山鞆絵、田中秀央（京都）、和辻哲郎の諸氏で、いずれも七十をこした老人たちである。いちばん年少の和辻博士が、最近永眠されたので、本年の集まりに見えないのは残念であった。

昨六月一四日は、三八回の命日で、お墓に集まったのは、久保、安倍、石原、高橋里美、高橋穣、藤原、上野、宮本の八氏と坂田であった。先生の葬儀のとき（いまから三八年前）墓前において、久保くんは、ドイツ語の聖書で、先生の愛誦の聖句、ルカ伝第二四章二九節を朗読したのを記憶しているので、われわれの墓参においても、毎回この聖句を朗読して黙禱するのが例である。この聖句朗読は、いつも不肖坂田に与えられた光栄ある奉仕であった。

ケーベル先生の続小品集に左の一文がある。

（ドイツ語原文より久保氏訳）

『我等と共に留れ、時夕に及びて、日も早や暮れんとす』――弟子たちがエマオへの途上に於て（ルカ伝福音書、最後の章、これは聖書の中でも最も心を動かす個所の一つである）夜を彼等の許に過さんことをイエスに願った時の是等の単純なる――最初は単なる願に過ぎずして、禱ではなかった所の――詞は私にとっては時の移ると共に漸く、禱となった。――これあらゆる祈禱の中で最も美しい又最も敬虔なる、さうしてそれなくしては私がもはや眠に就くを欲せざる禱である……。

一九一五年に、ケーベル先生は、わたしに次のような手紙をくださった。それはイザヤ書二ノ四の平和の予言が、いつ実現されるでしょうかとの、わたしの問に対するご返事であった。

「……この度の戦争は、実に一大惨事である。神の支配したもうこの世界に、かかる惨事の起るのは、我々をして、神の聖旨の奈辺にあるかを疑わしむるが、しかし何事も神のみ旨ならでは起らない、我々の頭の毛一本といえども、み旨ならでは落ちないことを知らなければならない。神はこの戦争の惨事をとおして我々の罪を罰したもうか、

街頭で訴える

戦後16年、いまだに苦しんでいる原爆被災者が数多くいる。去る6月24日、広島と長崎のこの人たちを救おうと、キリスト者平和の会のメンバーが、都内5ヵ所の盛り場で被災者救援街頭募金を行ない、昨年度をしのぐ成績をおさめた。

使徒パウロが日本舞踊に

去る6月28日夕、東京大手町の産経ホールに1,000人の観衆を集めて行なわれた〝キリスト文化と日本古典芸術祭〟で、とくに使徒パウロのローマ渡来1900年記念として発表された新作、長唄舞踊「ダマスコのパウロ」が注目を浴びた。写真は、パウロに扮する花柳寿輔とユダの妻花柳わかば。

か。戦争の生んだ悲劇だと言うだけですむだろうか。

今年も八月をむかえる。そして人びとは、夏になると、あのいまわしい日を思い浮かべる。仏教流で言うなら、今年は原爆一七回忌である。つい最近〝原爆一七回忌に捧ぐ〟というテーマで、原水禁広島母の会が小冊子を発行した。燃える梁の下敷の娘財布もつ手をあげこれを持って逃げよと母に呼ぶ

子と母がつなぐ手の指の離れざる二つの死骸水槽より出づ

あの日の惨酷きわまりない短歌は、何千何万あると言う。この小冊子に≪このようなことが人間の世にあってたまるものか。たまりません。……世界の平和は、広島に生き残った、わたしたちが訴えなければというやむにやまれぬ心持ちで、ひとりではどうにもならない。同じ心持ちの者が手を結ぶつもりで……≫原水禁母の会をつくったとある。

わたしは、その立場がことなっていようとも、平和を望まない者はないと思う。しかしそれが頭だけの理解になり、行動を通しての証しにならないのは、小冊子にある≪ひとりではどうにもならない≫ことに気がつかないか、また気がついても、連帯感にまでその問題をたかめないからではないだろうか。

平和をまもるということは、信仰・主義・主張をこえた具体的な問題であることに気づき、平和をまもるべく行動しているすべての人たちとの連帯の中に生きようとしないからではないだろうか。

イエスは〝人間を愛しぬいた人〟である。その人をわたしたちは道標として、毎日を生きている。すれば〝人間を愛しぬく〟という基本的な立場をわたしたちは持っているはずである。人間を愛するということ、それはすべての人との連帯の中に生きぬくことが、その態度であろう。にもかかわらず、わたしたちはともするとキリスト教という、また教会という垣のうちに自分自身をしまいこんでしまう。それがあたかも信仰的立場を堅持しているような姿をとって…

そうした教会というものは、一種の島聚落にちかい形を持ち、セクト主義におちいってしまう。その中で、人間は生気を失い、創造の芽をふみにじられ、小さなワク組の中にとじこめられて、そのワク組に似せて思考の形式をつくりあげている。これでほんとうの人間の解放ができるだろうか。とかく、自分だけよければよいといった人間のエゴイスティックなあり方から解放されて、人間がほんとうの意味で愛しあえること、これが人間解放である。このためには、教会が旧来のワクをのりこえて、すべての人たちとの連帯の中にはいり、そこで生きぬく体制を持つことがたいせつであろう。

原水禁運動が政治的偏向だと批判し、第二原水協をつくる動きがある。しかしわたしたちが、ほんとうに原水禁を願うならば、平和を願う体制を分裂させ弱めるのでなく、原水禁運動の中にいる人たちとの連帯の中で、ほんとうに人間を愛する立場から、信仰・主義・主張を越えて、平和を願うすべての人たちと手を組み、その内部で批判をしあい、ささえあってこの運動をすすめていくことが、わたしたちの立場であろう。

権力に依存する政治が力を持てば持つほど、それに対して、平和を願う人たちがその力強い歩をすすめていく。わたしたちも、その歩みに足なみをそろえて、平和のために前進したい。これは、八月をむかえてのわたしだけがもつ感慨であろうか。

われらの旗小さけれど子らかたまりて平和行進の核ひとつつくる

――歌集「小さき旗」より――

（婦人新聞社長）

又は、人間の道徳の敗頽を救い改善されるためか、又は消え失せんとする信仰を保たせるための必要な救であるかも知れない。イザヤの平和の予言は、いつかは、実現されると信ずる。たとえ、この地上で実現されなくとも事物がこの世より、より高い状態にはいったときに、必ず実現されるのであろう。これは私の信仰で、私の慰めである……」

これは大哲学者、ケーベル先生のきわめて単純なる福音的信仰である。

わたしは、きのう先生の墓参で、この私信を朗読するよう先輩から命ぜられたので、はじめに、イザヤ書二ノ四を読んで黙禱し、ついでこの英文の手紙を朗読した。

わたしが東京帝大で、ケーベル先生の教えを受けるに至ったのは一高時代に、ドイツ語の岩元先生に、ケーベル先生のことを教えられ、大学にいったら、何をおいても、先生の講義をきくようにとすすめられたからであった。

（一九六一年六月十五日）

（関東学院院長）

明治二八年の奈良大会

高橋虔

明治二八年一〇月、奈良の菊水楼で開かれた旧組合教会の奈良大会は第二の花岡山ともいうべき集まりで、日本の伝道史においても長く記憶せらるべき事件の一つである。その年の四月に日清戦争が終結し、日本全国はようやく国粋主義の波が押し寄せてきた時代でいわゆる新神学の思想も進歩的な伝道者の間に広がってきた。教会も宣教師に代わって日本人が主体性をとるようになったが、早くも一種のマンネリズムに陥って、教勢もあまりふるわぬということになったようである。この教勢不振をいかにするかという主題で、まず第一日の懇談会が開かれた。次に渡瀬常吉牧師の報告書によって当時の諸先輩の意見を紹介しよう。小崎弘道氏「教界不振の原因は少ないが、その最も大いなるものは、各個人の中に明白に主キリスト・イエスわが内にあってともに働きたもうという意識が少ないためである。次に教職間の友情が温くないことである」。二宮邦二郎氏「教会には共同の精神が欠けている。だいたい、だれにも異論のない点を掲げて、共同一致の運動を起すべきである」。渡瀬常吉氏「時代には時代の精神があるから、それを正しく認識し、それとともに働くべきである。時代の精神とはその時代の風潮ではなく、活ける真の精神のことである」。古木寅三郎氏「いたずらに新奇に走ることをやめ、自己の経験に基づける、福音の真理を主張し、宣伝せねばならぬ」。三宅荒毅氏「流行の哲学を追うことをやめ――基督教新聞や六合雑誌もそれに陥っている――主イエスの活ける福音を説かねばならぬ」。森田久万人氏（同志社神学部長）「自分は教職ではないが、哲学は必ずしも宗教を不振に導くということはない。活ける宗教は各個人の全体を養うものである」。岡部太郎氏「口先きだけの説教で、実生活は不謙遜、偽善に走る伝道者がある」。竹内甚吉氏「神学上の十分な解釈も必要である」。

（同志社大学教授）

いまわしい日の思い

迫　千代子

きょうも広島の川は静かに流れている。本川も、猿喰川も、元安川も……。夏の陽光をギラギラと輝かせながら。あの日の朝も、このように平和であったにちがいない。それが一瞬にして、あの惨事を生み、二〇数万の生命をうばった。これ以上の罪悪があったろう

た。

戦前派の「親のもの」式考え方と、戦後派の「おれのもの」式行き方は、家庭だけではなく、学校でも、職場でも、社会のあらゆる場所で衝突し続けてきました。そして「いまどきの若い者」と「頭の古くさい老人」とは、自分たちこそ正しいと主張して、平行線をたどり続けて協調点は見つからぬほどでした。

ところで、この二つはどちらが正しいのですか。聖書はこの両方に向かって、二つながら誤まっていると、「ノー」を宣告します。

聖書は、わたしたちの生命も財産も、からだも才能も、みんな一神のもの」であって、「親のもの」でも「おれのもの」でもないと教えるのです。わたしたち自身の所有だと考えているものもいっさいが、引用した聖句マタイ福音書二五章一四節に記されているように、『ある人が……その僕どもを呼んで、自分の財産を預けるようなもので』あって、すべては「神よりの預かりもの」だと言われるのです。

神さまが人生の旅に出るひとりひとりに、自分の財産を委託された、いわば神からの投資信託のようなものだというわけです。

しかし、それにしては神さまの預け方は少々不公平だと思われます。あの人はすばらしい才能をもっているのに、この人はただの凡人に過ぎません。ある人は健康でかぜ一つひいたことがないというのに、他の人は生まれつき病身でいつも床に臥せっています。彼は富を享受しているのに、わたしはこんなに貧しい日々をあえぎながら生きなければなりません。

しばしばわたしたちは神さまの不公平さに不満でたまらなくなります。ある者には五タラント、他の者には二タラント、しかしわたしにはたった一タラントしか預けられない。人間は無差別で平等だと言いながら、神さまのなさり方はあまりに差別があり過ぎると、不平が出ます。

これは人間はひとりひとり異なっているということなのです。神さまが創造された人間は、機械で大量生産された工業規格品のような物品ではないのです。精根こめた手造りの民芸品のように、人は皆違ったものを託せられています。神さまは決して人間を十把一からげには扱われない。個人の価値を尊重して、取換え可能な部品、そうです、自動車のパーツのようなものとしてではなく、たった一つの、かけがえのない人格として、交わりにいれられるのです。人生の不平等とも見えるこのタラントの相違は、このような人間性の尊厳さを示すものなのです。

それにしても、一タラントとは一千弗あまりで、四〇万円ほどの金額ですから、たった一タラントなどと不平を言うどころか、神さまはずいぶん多額のものをわたしたちに預けられたわけです。人間の側から見れば不公平のようですが、神さまは実に多くのものを、それぞれの人に、最善の形で信託されているのです。

したがってわたしたちは人生の不平等の中に、神の愛による配慮ある公平を見出し、感謝をもって日々を過そうと努めるべきなのです。

しかも、神さまはその財産を、わたしたち、ひとりひとりに信託される際に、しちめんどうな指示を与えないで、わたしたちの自由な管理に任されました。わたしたちを自由な存在として創造された神は、その所有を人間に信託するに当たり、わたしたちの自由意志に一任されたのです。

自由であるというのは、責任があるということです。軍隊のように、万事上官の命令のままに行動する社会では、個人の自由などは存在していない、全く不自由な世界です。しかし、そこでは個人の責任が問われることがありません。命令違反には処罰がありますが、その内容は問わず、命令に忠実でありさえ

伝道説教

神の投資信託

飯清

天国は、ある人が旅に出るとき、その僕どもを呼んで、自分の財産を預けるようなものである——

（マタイ福音書二五・一四以下）

「どうしてこのごろの子供たちは、こんなに親の言うことをきかないのでしょう」と、寄ると直ぐおかあさんたちは愚痴をこぼします。「昔は親の命令には素直に従ったものでしたのに」と嘆くのです。そうでした、親の命令や、天皇の命令は、内容のいかんを問わず、絶対服従が強制されていました。

封建的道徳のもとでは、子供のからだも才能も親のものと考えられ、人々の心も体も天皇のものとして、献げ尽すことが要求されました。ですから子供の結婚も仕事も親がすべてとりきめたり、家業を継ぐべく生まれた時から定められていましたし、戦争になれば身命を投げ捨てて、天皇のために死ぬことこそ最高の徳でした。ナニワ節の主題にも、父親が酒とばくちで作った不義理の借金を、娘が遊廓に身売りして女郎になるのは、親孝行なことだとほめられ、聞き手の涙をしぼるわけです。これを一言でいえば、戦前はいっさいが「天皇のもの」「親のもの」というわけでした。

これに対して、戦後派を特徴ずけるものは独立自存でしょう。親からも、天皇からも、解放された全く自由な生き方で、あらゆる権力や権威に反対することこそ善にして、なすべきことだと考えられました。まず「アプレ」と呼ばれました。そして石原慎太郎の小説とともに「太陽族」がはなばなしく登場してきました。

彼らは合ことばのように、「おれのからだも財産もおれのものだ。親のものでも、だれのものでもない、いのちはおれ自身のものだ」と主張していました。けんかをして殺されても、だれも悲しむ必要はないとうそぶき、わたしのからだをだれに上げようとわたしの勝手よと、手軽に肉体関係を結びました。「カミナリ族」が衝突して死んでも、また「ビート族」が乱痴気騒ぎに明け暮れても、皆「わたしのもの」をわたしが好きなようにするだけで、だれからも干渉も文句もつけられるはずはないというのが、自律自存、そして自己中心の彼らの道徳基準でし

さて、この清算期にあたって提出した決算諸表の帳尻が赤字ではなくて、五タラントの元金からもう五タラントもの利潤があったときに、神さまははっきりと喜びをおもてにあらわしてほめてくださるのです。『良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人といっしょに喜んでくれ』

よく考えてみると変わったほめ方です。わたしたちの世界では、忠実に勤勉に働いたことに対するほめ方は、ボーナスと慰労の休暇です。ボーナスの原語はラテン語のボヌスで「良きもの、真実なもの」を意味しますが、神はすべての良きものをわたしたちに与えたもうのですが、慰労休暇がついていません。それとは正反対です。もう一度聖書を見てみましょう。『あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう』

そうです。小さな任務でも勤勉に努めて、すばらしい発展と大きな利潤を得たのだから、もっと大きな仕事をさせてあげよう。もっと忙しい職務につけることにしようと、神さまが言われるのです。慰労休暇を期待していたところが、二倍の残業になったというわけです。「働けど働けど我が暮しらくにならざり…」どころか、働けば働くほど重荷が増してくるというのですから、これは無茶です。

しかし、これは当然なのです。仕事が増えるのは、先に申上げたように、神さまがより多くの財産を信託されるということなのですから、言うなれば信用の増加です。どうかするとわたしたちは「忙しい」ことに愚痴をこぼしがちです。しかし、この仕事の多さは、信託委託会社としてのわたしたちの信用が増大して、神さまがより多くのものを預けてくださった、より多くのタラントを託してくださったことの現われなのですから、感謝と喜びをもってあたるべきなのです。

内村先生は「忙しいという字は、リッシンペン（心）と亡ぼすから成っている」と言って、忙しいことを弁解の辞とするのを戒められたということです。休暇や休息を喜ぶのではなくて、働くことや仕事の多いことを感謝しながら、その中に神さまの信頼の大きさをおぼえて、充実を感じるのがわたしたちの生き方です。

このマタイの福音書の中には、天国に関するたとえ話がたくさん記されています。一三章にあるように、天国とは畑に種をまく農民の仕事のようなものだとか、パン種を粉にまぜてまぜあわせる台所仕事とか、真珠探しの商人の仕事とか、網をうって魚をとる漁夫の仕事のようなものだと、皆な日常の仕事をもってたとえが語られています。二〇章などを見ると、天国とはぶどう園に日雇い労働者、ニコヨンを雇いに行くようなものだと言われます。

キリストが示された神の国とは、極楽で蓮の上に坐って眠るともなく起きるともなく、なにもしないで、しごく楽な日々を送ることではなく、働くこと——そうです、自分の楽のためでなく、他人や周囲の楽のために働く。それがはたらくということなのですが——日々勤勉に神の信託に答えて働く人々の間に建設されていくものなのです。

どうか神さまから信託されたわたしたちのからだや才能や生命を、神さまの信頼にふさわしく責任をもって管理運用し、大いに所得倍増をはかって神さまにほめていただけるような日々を送るように努力しようじゃありませんか。

（霊南坂教会牧師）

すれば、責任はすべて上官のもので、部下は無罪放免のはずです。ですから、自由が与えられているということは、責任をとらなければならないということなのです。このことを逆に言えば、自分の行動に責任もとれない人は、自由を与えられる資格がないということになります。

しばしばこの点が誤解されてきました。

ある人々は、神さまがわたしたちに信託された生命や、才能に対する責任ある管理権を放棄してしまいました。この管理権を親や上官や他人にゆだねてしまい、自由意志を放棄して、不自由な生涯をその安易さのゆえに選びました。

他の人々は、信託財産であることを忘れて、自分だけのもののように、自由を放任と混同してしまいました。ここでも管理責任は放棄されて、責任をもった自由の代わりに、無責任な放任の中で、遊んでいました。

これらの人々は二種類とも、責任をもって神の信託財産を預からず、タラントを地を掘って埋めたか、地上に投げ捨てて置いたのです。まことに悪い怠惰な僕でした。

ところで、このたとえ話はここで終ってはおりません。

神さまは決して所有を、すなわち、生命や才能や、時間や財産を、預け放しにはなさいませんでした。『だいぶ時がたってから……主人が帰ってきて、彼らと計算をしはじめた』と書いてあります。神さまは人間をひとりひとり呼び出して、預けたものの清算を求められます。預けて置いた生命や才能を、どのように用いたか、貸借対照表や損益表を提出して、いっさいを明らかにせよと言われます。

現代社会では、銀行預金でも、投資信託でも同じことですが、「預かった」ことは三つの義務を負うたことです。すなわち第一に、預かったものは必ず返さねばなりません。第二に、預金に対しては利息を払わねばなりません。第三に、元本自身が減らないよう、注意して責任ある管理運用をしなければなりません。

神さまから預かっているからだでも才能でも同じことです。これをたいせつに管理運用して、傷つけたり、減損したりせぬよう注意すべきです。それだけでなく、訓練整備して健康を増進し才能を磨くべきです。しかも神さまの要求があったときには、ただちに神さまに返し、いっさいを神さまのために用いることができるように、召命に対しては常に応答の用意をしていなければなりません。

「身体髪膚これを父母に受く」だからたいせつにするのではなくて、神さまよりの信託財産だからこそ健康に留意するのです。食事にせよ、睡眠にせよ、神から託されたものを忠実に管理するために必要なことを怠ってはなりません。

「寄辺なき世の唯一の頼りは我なり」だから自分を切磋琢磨するのではなくて、神さまの召しにいつでも答えることができるようにと願いながら、学問にせよ職業にせよ、神さまの喜ばれるように用いたいと努めるのです。

ただむずかしいのは、決算期があらかじめ定まってないことです。すぐ前の部分に（マタイ二四・五〇）『僕の主人は思いがけない日、気がつかない時にかえって来て…』と記されてありますが、神が清算を求められるのがいつでもよいようにと、『目をさまして』いつも備えていなければなりません。

信仰というのは、日曜日の朝だけ教会に行くことではなくて、毎日のことなのです。たいせつなのは、日曜日の生き方いかんの問題ではなくて、むしろ月曜日の生き方なのです。月曜日から土曜日までのウィーク・デーを、日曜日に礼拝に集まって神さまの前に出たときと同じ気持ちをもって、神さまの清算要求（これを神の審判と聖書は教えるのですが）を、常に意識しながら生きて行くことこそ、いっさいを神に信託されたことを知る者、信仰者の生活です。

御父よ。あなたの奥義は、わたしの生活に対しても臨んでいます。それは、あなたの恵みの奥義です。どうかわたしの思いを守ってくださいまして、あなたの奥義を冒すことがないようにしてください。どうかわたしの中に潔い心を創ってくださいまして、あなたが与えたまいますものに感謝し、それをみこころのままに忠実に用いるようにしてください。アーメン。

信仰と愛

されど霊の汝らに服するを喜ぶな。汝らの名の天に録されたるを喜べ。（ルカ伝一〇・二〇）

イエスは、彼がその弟子たちの中に植えたもうた植物が傷つけられるのを、用心深く守りたもう。彼が弟子たちに与えたもうた最大のものは、苦しむ者を癒し捕われた者を解放する愛であった。助けるためには、愛は力を必要とするので、イエスは悪魔的なものに打ち勝つ力と勝利を与えたもうた。愛は、彼がわれわれに与えたもう最大のものであるから、愛は、われわれに最も強い最も潔らかな喜びを与える。われわれが人を助けることができて、救い主イエスの力がわれわれの奉仕によって示された場合、明るく豊かにわれわれの心の中を流れる喜びと、くらべることのできるような喜びは、ないのである。しかし、一つの植物が貴重なものであればあるほど、害虫によるその損傷は、苦痛である。また、それを損傷から守ることは、いよいよ必要なのである。われわれの目が、与えられた力に向かって注がれ、自分が獲得した成果を楽しむとき、われわれの愛の中にも利己的な欲望が忍び入り勝ちである。われわれは、自分自身に引き返して、自分自身に対する満足が目を覚ます。一たとえ世界に悪魔が満ちていても……」と、昂然と叫ぶ勝利者の力の自覚が目を覚ます。

イエスは、その弟子たちに力を与えた愛の喜びを非難したまわない。ただ、彼は、この愛の喜びより上に、信仰の喜びを置くことによって、愛の喜びを守りたもうのである。「汝らの名の天に録され」ているということ――それを知ることは、われわれに信仰の喜びを与える。自分が他の人々にとってどのように重要な存在か、彼らになにを与えることができるか――そのようなことにわれわれの目が注がれているときに、信仰が現われて、愛より上に立つ。そのとき、他の人々の姿は再びまったく消え、すべての達成されたものも見えなくなる。そして、再びわれわれの前には、自分自身の救いを問う問いが現われる。そして、われわれの名を生命の書に録したもう神の自由に与える愛をわれわれに示し、そのことによって、この問いに答えたもうイエスの答えが現われる。われわれの名が重要性と価値と不滅性を得るのは、われわれの愛が生み出すものによってではなくて、神の恵みがわれわれの信仰に与えたもうものによってである。われわれの愛がどのような力を示すときにも、信仰だけがわれわれの義であり、いつまでもわれわれの義である。

御父よ、あなたの恵みによって、わたしは業を行ないます。しかし、それはあなたのみ業でなくてはなりません。もしわたしがそれを自分自身の業にしますなら、それは破滅してしまいます。あなたのみことばとみ霊の力によって、どうかわたしを、わたしのすべての存在と仕事から解放してください。わたしの罪から解放し、あなたに仕えるわたしの業からも解放してください。あなたの恵みに信頼して、あなたのみ名を讃美するために。自分の名を讃美しませんために。アーメン。

〈思いと祈り〉

パウロ

シュラッター
井上良雄訳

人よろしく、われらをキリストの役者また神の奥義をつかさどる家司のごとく思うべし。さて家司に求むべきは、忠実ならんことなり。

（コリント前書四・一、二）

われわれの愚かな考え方によれば、パウロは独創的人物であり、さらには天才である。実際パウロは、それまで人が語ったことのないことを語る人物であり、しばしば新しいものを創り出す創始者であった。それは、みことばをまだそれを知らぬ土地へもたらすという彼の使命の結果であった。未開拓の土地に教会を建てるのであるから、彼は多くの新しいものを考え出し、実行しなくてはならなかった。

しかし、パウロは、自分の活動をそのように見られることを拒絶した。彼は、自分をただ家司として見ている。そして、家司というものは、新しい財産を獲得するものではなくて、託せられたものを富ますものである。彼が管理しなくてはならない財産の種類や範囲は、自分ではどうすることもできないものである。それゆえ、パウロにとっては、忠実であるという義務よりほかのものはないのである。

このようなものが、われわれすべての者にとっての神の定めである。獲得するということより以前に、受けるということがあるのであって、われわれを神聖な義務で拘束する目標は、この受けるということからわれわれに与えられるのである。あなたは、自分が受けたものを破壊してはならない。もちろん、時は動き、歴史はとどまってはおらず、ひとりひとりの人間の歴史も同様である。われわれは自分の理性を更新することによってだけ、新しい状態に達し、また神のみこころを行なうのである。きのう正しかったものが、きょうも正しいということはない。しかし、キリスト教のあらゆる新しい歩みにとっての不変の前提は、自分に与えられたものを破壊せずに真に所有するということである。そして、与えられたものを所有するのは、ただそれを富ますときにだけである。所有している人、その人には与えられる。もし、わたしが、自分に与えられたものを軽視し無効なものにしているならば、新しい賜物を受けることはできないのである。

パウロが、そのように忠実であるという義務だけを承認した場合に彼の眼前には、イエスの栄光があった。イエスがもたらしたもうたものは、使徒やキリスト者による補充や修正を必要としない。パウロはイエスを信じていたから、イエスよりも以上のものだというようなことを主張する独創的人物になろうなどとは、夢にも考えなかった。彼は、神のみこころを行なわねばならぬ者であったから、そのような妄想のいまわしさを痛感した。神のみこころを行なわねばならぬという事実が、彼を神の奥義の前に立たせた。この神の奥義の中へ、それを自由にできる者であるかのように足を踏み入れるというようなことは、不可能であったのである。それゆえ、彼は、イエスが獲得してくださったものを忠実に管理するという目標以外のものを、自分自身に対しても、あらゆるキリスト者に対しても、示しはしなかったのである。

年九月に「教団新報」誌上で次のように訴えている。「今は国民総武装の時である。我々一億国民はみな悠久の大義に生き私利私欲を捨ててひたすら国難に殉ずることを求められている。この国難に殉ずる所にこそ福音への〝立証〟があり、〝殉教〟がある。我々キリスト教信徒は何をちゅうちょすることもない。前線に召された者は、いさぎよく大君の御盾となって国難に殉ずべし。之即殉教である。…キリストの福音を信ずる我が徒は此際殉国のうちに殉教の意義を見出し国家の危機転回のために力を致したいものである」と。

いまでこそ狂気の沙汰としか思えぬこのような発言が、当時は少しも不思議ではなかったのだ。「鬼畜米英我らの敵だ、進め一億火の玉だ」といったようなスローガンの下に、全国民の思想と行動とが戦争一色にぬりつぶされ、しばりつけられているときに、「平和」などということを口にするのは、それこそ狂気の沙汰であり、非国民的であった。さればこそ「平生社会指導の任にあたる」キリスト教界のおエラ方は、率先して外、「大東亜共栄圏」のキリスト者に対しては「世界に冠絶せる万邦無比なるわが国体」を宣伝し、内、教団サン下の信徒に対しては「殉国即殉教」という珍妙なお題目を説教せねばならなかったのであろう。そして聖日には礼拝に先立って必ず皇居遙拝が強行され、講壇からは、愛の説教のかわりに敵米英撃滅が説かれ、とりなしの祈りのかわりに、戦勝祈願が行なわれ、聖なる神へ捧げられるはずの献金は、サタンの使である軍用機献納のために流用されたのである。もちろん、戦時中の教会のすべてが、キリスト者のことごとくが、このような醜怪な時局便乗ぶりを示したわけではない。なかには信仰の良心に従って、「血を流すまでに抵抗」し、「反戦即殉教」の実をあげた例もいくつかはある。しかし、それはあたかも暁天の星のごとくに微々たる存在であった。キリスト教界の大勢はどうとして戦争協力の道を歩んだ。少なくとも、日基教団は、はっきりした指導的立場に立って戦争を肯定し、支持し、福音の名においてこれを正当化してきたのである。

わたしがこのようなことをいまここに事新しく書き出したのは、なにも興味本位の暴露趣味からでは決してない。平和の時代に平和を説くことはやさしい。しかし戦争の時代に平和を生きることは容易なことではない。それは「ラクダが針の穴を通る」ほどに困難であることを言いたかったからである。それだけにまた、いまの平和なうちに、光あるうちに平和の問題と真剣に取組んでおかねばならぬことを強調したかったからである。

戦時中の教団の指導者はもちろん、りっぱなかたがたであった。多くの人々をキリストに導いた福音の使徒であった。だがこの尊敬すべき福音の使徒が一転、恐るべきサタンの使徒と化して、多くの信徒を憎悪と殺人へと導くに至ったのはいったいなぜであろうか。それは実に、戦争そのもののもつ悪魔性の強大さのゆえではなかろうか。戦争は天使をも悪魔に変え得る力をもっている。われわれが現在どのように信仰深くあるとしても、平和愛好者であるとしても、油断はならない。決して他人事ではないのである。戦争の悪魔性は福音の名において自らを正当化する。その昔、サタンが聖句を用いてイエスを誘惑したように、聖書のあるいは、神学の衣を装ってキリスト者をたぶらかす。わたしはいまここで、当時の教界指導者たちがどのような聖書解釈や神学論をもって戦争を正当化したかを論述する紙面をもたないが、いずれにしても、こんにちの平和時における冷静な批判にはとうていたえ得ない性質のものであった。たと

なぜ戦争に反対するか

中川晶輝

「キリスト者としてなぜ戦争に反対するか」――実にくだらぬ題である。「キリスト者が戦争に反対するのは当然だ。〝なぜ〟もへったくれもあるものか！」――と読者諸君は考えるにちがいない。にもかかわらず、あえてこの命題を掲げて論ぜねばならぬ日本のキリスト教界の実情に問題がある。つまり戦争に反対しないキリスト者、いな、さらに積極的に戦争を肯定し、これを正当化するキリスト者が、昔もいまも決して少なくないという事実を、われわれは遺憾ながら認めないわけにはいかないのである。したがってわたしのこれからの論述は「キリスト者としてなぜ戦争に反対しないか、なぜ戦争を肯定し、支持してきたか」というこれらの人々の弁明に対する反論として展開されていくことになろう。

「そもそも我が日本帝国は万世一系の天皇これを統治し給い、国民は皇室を宗家と仰ぎ天皇は国民を顧みること親の子に於けるが如き慈愛を以てし給い、国民は忠孝一本の高遠なる道徳に生き、この国柄を遠き祖先より末々の子孫に伝えつつある一大家族国家である……」、読者はこれを戦時中文部大臣あたりが行なった訓辞の一節ぐらいに見ておられるかもしれない。だがこの文章はさらに次のように続いている。「この事実は諸君が既に大東亜戦争下、皇軍将士の世界を驚倒せしむる勇猛果敢な働きを見て、その背後にひそむ神秘的な力として感付いておられる所であろうが……、全世界をまことに指導し救済し得るものは世界に冠絶せる万邦無比なる我が日本の国体であるという事実を諸君は信仰によって判断しつつ我等に信頼せられんことを」と。驚くべし！　これはキリスト者の書いた文章である。しかもただのキリスト者ではない。れっきとした「日本基督教団」より「大東亜共栄圏にあるキリスト教徒に送る書簡」なのである。日本基督教団はこの書簡を綴ったと同じ年の昭和一九

を第一とせねばなりません」と。これが「教会防衛」の精神であろう。この発言は言外に、「教会防衛」が空襲や爆撃に対してなされたばかりでなく、政府の圧力に対してもなされたことを語り、「自分たちが身をもって政府との間に緩衝地帯の役割をつとめたからこそ、各個教会は礼拝を守りつづけることができたのだぞ」と告げようとしているのではあるまいか。たしかに戦時中のあの悪魔的な国家権力のもとで、「敵性宗教」として弾圧解散の危険にさらされながら教会を守り抜くために、教団の指導者たちが払った労苦はおそらく筆舌に尽しがたいものであったにちがいない。そしてこの人たちの努力のおかげでとにもかくにも「礼拝、日曜学校、祈禱会を一度も休まず実現できたこと」は感謝すべきであろう。しかし、このような「教会防衛」のために教界指導者たちが政府に対して支払った高価な代償が「殉国即殉教の精神」であり「宗教報国の誠」であり、「戦勝祈願」であり、「軍用機献納」であり、「醜敵米英撃滅の誓い」であってもなお「感謝すべきこと」なのであろうか。たしかに「どんな事情のもとにおいても教会の使命たる福音宣教を第一とせねばならぬ」のはいうまでもない。しかし、宣教さるべき福音の内容は、あくまで「純粋」であり「ほんもの」でなければならない。単に形式的に礼拝が保たれ、祈禱会が休まずに行なわれているというだけで、福音宣教がなされているとは言い得ない。もしも礼拝で「米英撃滅」が説かれ、祈禱会で戦勝祈願――すなわちひとりでも多くの敵国人が殺傷されることを願う祈り――がなされるならば、それはもはや福音ではなくして「禍音」であり悪魔のメッセージである。キリスト者平和の会に属するある指導者がこのことを回想して、マタイによる福音書一六章二五節の「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだすであろう」を引き「この聖句は単に個人に関して述べられているばかりでなく、個人の集団である教会に対しても述べられていると理解すべきではなかろうか。戦時中の教会は自分の生命を救おうとして、実はほんとうの生命を失ってしまったのではなかろうか」と語っておられたことを印象深く思いおこす。教会が自己防衛のために飲んだつもりの薬が、実は教会を自殺に追い込む毒薬であった。教会は国家権力による弾圧をまたずして、すでに骨抜きとなり、生ける屍と化してしまっていた。もしも教会があのとき、寸毫の妥協も許さずに平和の福音を高く掲げ、反戦の主張を貫ぬき通すことによって弾圧を受け、解散させられ、殉教の死を遂げていたならば、戦後における教会は良心的な人々のたましいを、もっと力強くとらえることができたのではなかろうか。こんにちの伝道上の最大の障害が、戦時中の教会の背信であることは心ある人々のひとしく認めているところである。わたしは戦時中、こうした教会の中で生きて来た者のひとりとして、教会防衛論的弁解を自分自身に対しても、また他人に対しても、絶対に容認することができない。

第二の「二重倫理」の主張はルッターの「死に至るまで福音的であると同時に死に至るまで祖国的であれ」という発想とおのずから結びついているように思われる。第一の主張では時局便乗は「教会防衛のためのやむを得ざる必要悪」として容認されていた。つまり正しい目的のためには、手段の悪もやむを得ないという消極的な考え方である。これに対し「二重倫理」はもっと積極的な主張を含んでいる。つまり国家目的に奉仕することはそれ自体が善であり、その内容がたとえ福音に反することであっても、なんら良心に恥じる

えば、マタイによる福音書一〇章三四節「地上に平和をもたらすために、わたしが来たと思うな。平和ではなく、つるぎを投げ込むために来たのである」や、あるいは、ルカによる福音書二二章三六節「しかし今は財布のあるものはそれを持って行け。……また、つるぎのない者は自分の上着を売ってそれを買うがよい」などが引合いに出され、全く福音の闘いと地上の戦争とを、霊の剣とこの世の武器とを混同した謬論がもてあそばれていたのである。問題は、なぜこのような幼稚きわまる迷論が、大手を振ってまかり通ったかということである。わたしは当時のエライ先生がたが本気でこのような聖書釈義を採用しておられたとは思えない。おそらく国家の至上命令によって、強制された思想と行動とを自他ともに正当化するために、苦しまぎれに創り出した詭弁であろう。そして疑うことを知らない「善良な」信徒たちは、エライ先生がたの教えをうのみにすることによって、安心して国家の至上命令たる戦争目的遂行のために献身することができたのであろう。

国家の至上命令。それは戦時中においては文字通りオールマイティであった。それは信仰の良心にすら優先した。「国家は最高の道徳」であった。否、国家は「神」であった。この神の前に全国民が、大部分のキリスト者までもが平伏した。(「天皇とキリストとどちらがえらいか?」という意地の悪い質問に対し、冷汗をかきながら巧みに言いのがれをする者かあっても、「キリストのほうがえらい」と厳然と言い切るキリスト者はほとんどいなかった。)したがって国家の命令たる「戦争目的遂行」は最高善であり、絶対であった。この最高善たる戦争目的遂行にプラスする信仰は、正しい信仰であり、いささかでもこの目的を阻害する信仰は誤った信仰として、同じキリスト者から指弾された。したがってまた、信仰の良心に照らしてみてあやまっていると思われる聖書解釈でも、それが戦争を正当化し、戦争目的にプラスとなるものであるかぎり、正しいとされたわけである。そして、ほとんどのキリスト者が、このようにして「聖書的信仰」の確信に立ち、大まじめになって敵を憎み、敵を殺していったのである。実に戦争の悪魔性は強大であった。この強大なる悪魔性の前に、信仰の純粋性を保ちつづけ、戦争反対を叫ぶことは、まことに「ラクダが針の穴を通る」ほどに困難なことであった。

こんにち、冷静な心をもって回顧反省してみるとき、戦時中の日本キリスト教界の大勢が、時局に対してとった態度が神に対する背反であり、福音への裏切りであったことを、だれしも認めざるを得ないであろう。しかしながらいまなお、当時の教界指導者の、また個々の信徒の、こうした時局便乗の態度を是認しようとする考え方が一部に存在している。その第一は「教団が積極的に戦争協力の姿勢を政府に対して示したのは、〝教会防衛〟の必要上やむを得なかった」とする現実的な主張であり、第二は「われわれはキリスト者としてキリストの教えに従うべきであるが、同時に日本人として国家の命令に従わねばならぬ」とする原理的、神学的な「二重倫理」の主張である。

第一の主張では一教会防衛」ということか一錦のお旗」となっている。ある教団の指導者は、戦時中を回顧して次のように語っている。「戦時を反省して感謝することはあの激しい空襲や爆撃の中において朝夕の礼拝、日曜学校、祈禱会を一度も休まずに実現できたことです。どんな事情のもとにおいても、教会の使命たる福音宣教

をつけたいと思う。

「わたしはなぜキリスト者として戦争に反対するか？」それは「人間が尊重されないから」という、実に単純素朴な理由からにすぎない。しかし、このことはわたしにとって、決定的に重要な意味をもつ。なぜなら、それは、福音の真理にかかわることがらだからである。人間はただ人間であるというだけの理由で、絶対的に尊重されねばならない。なぜなら彼のためにこそ、主キリストは十字架上にその尊いあがないの血潮を流したもうたからである。だから人間ひとりひとりは、この世のいかなる権力もおかすことのできない、尊厳な価値をもっているのである。しかるに戦争は、人間の生命を「鴻毛の軽きに比する」ことを強要する。戦争は人間を「一銭五厘」の召集令状一枚で死地に追いやる。戦争は人間を「人間資源」として弾丸の代用にする。これらはすべて人間の尊厳に対する挑戦である。さらに戦争は殺人を固有の目的としている。殺人こそは人間の尊厳性の全面的否定にほかならない。実に戦争は人間の尊厳性を完全かつ徹底的に否定する。そして、このことはとりもなおさず、この人間のために流されたキリストの十字架の血潮を否定し、これに挑戦することである。それは福音そのものに対する徹底的な反逆を意味する。われわれは、福音の名のゆえに、徹底的に戦争を憎み、これを否定せねばならぬと思う。

ところでわれわれは、戦争が人間の尊厳に対する全面的否定であると同時に、戦争準備もまた人間の尊厳に対する部分的否定であることを知らねばならない。こんにちの日本の現実は戦争準備状態である。政治、経済、産業のいっさいが軍事中心に動いている。大砲がバターに優先し、社会保障ははるかに後方へ押しやられて、「貧乏人は麦を食い、わせられ、労働者、農民は低賃金と過重労働下にあえぎ、結核患者は治療費が払えずに血を吐きながら死んでいく。このような事実はまことに「主の兄弟であるこれらの最も小さい者のひとり」に対する残虐行為にほかならない。かかる「貧しい者を踏みつけ、また国の乏しい者を滅ぼす者（アモス書八・四）」の人間の尊厳に対する挑戦は、たとえ部分的であってもわたしは、福音の名において、これを断じて許すことはできない。ゆえにわたしは戦争に反対すると同時に、いまの日本戦争準備態勢に弾圧反対する。

こうして現在の戦争準備態勢に反対し、人間の尊厳への部分的挑戦に反対して闘ってこそ将来の戦争を、人間の尊厳の全面的破壊を防止することができよう。戦争が始まってからでは手遅れである。さきにものべたように、戦争は平時の平和論者を、一瞬にして戦争賛美者へ変貌せしめる魔力をもっている。われわれは、戦争のもつ悪魔性の強大さを決してあなどってはならない。また、かりに、わたし個人が戦争の悪魔性に打勝って、最後まで節を全うし得たとしても、それが現実に客観的にどれほどの意味があろう。あるいはわたしがそのような英雄であったことが確認される以前に、地球そのものが、核爆発で消滅してしまっているかもしれない。重要なことは、わたしが英雄とならずにすむように、いまの平和を保ち続けることである。いな、こんにちの戦争準備状態が解消されて、搾取なき、真に人間が人間として平等に尊重される、正しい平和な日本をつくるために力を尽すことである。光は暗い、だがそれはいまだ完全に消え去ってはいない。われわれはこのほの暗き平和の灯が消え去らぬいまのうちに、働かねばならぬ。闘わねばならぬ。わたしはこのような平和のためにこそ死にたい。なぜなら、それはわたしにとって「福音のために死ぬ」ことにほかならぬから。

（白十字会村山サナトリウム医師）

必要がないというのである。戦時中、ある無教会の指導者が「わたしは福音のためには死ねるが、平和運動のためには死ねない」といった。こんにちでも「キリスト者の本務は福音の宣教であって、平和運動や政治問題などに関係するのは邪道である」との声をしばしば聞く。これはたしかに宗教と政治との低劣な結びつきをいましめることばとして、一面の真理を含んでいる。ところが皮肉なことには、このように政教分離を強く主張したキリスト者の多くが、戦時中もっとも積極的な形で、時の政治に迎合していったのである。元来、彼らは宗教と政治、教会と俗世、を厳しく区別して全く異質的なもの、別世界のものと考え、宗教の世界は信仰の倫理が支配し、世俗の世界はこの世の倫理が支配するという、倫理の二重構造性を主張する。したがって、キリスト者として「福音に忠実であれ」という「信仰の倫理」に従うことと、日本人として「日本の戦争目的に忠実であれ」という「この世の倫理」に従うこととの間に、なんの矛盾も感じないですむのである。こうした「二重倫理の神学」がマタイによる福音書二二章二一節の「カイザルのものは、カイザルに、神のものは神に」の聖句を曲解させ、またルターの「死に至るまで福音的、死に至るまで祖国的」の命題を安易に受取らしめ、彼らをして非常な熱意と積極性をもって、国家目的に奉仕せしめるに至ったのであろう。だがこのような二重倫理の神学は、果して聖書的と言えるであろうか。イエスの「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に」との発言は、われわれに二重の倫理を教えたものなのであろうか。パリサイ人はイエスに、明らかにカイザルの肖像の印してある貨幣を示して、カイザルへの納税の可否を問うた。これに対しイエスは彼らの質問を全く無視し、彼らの念頭には無かった「神の支配」という問題をあらたに提出してせまりたもうたのである。イエスはカイザルの肖像の背後に神の肖像を認め、この貨幣が窮極的には神に属するものであることを主張したもうた。「カイザルのものをカイザルにかえす」という此世的、政治的行動の背後に「神のものを神にかえす」という宗教的、信仰的決断がさえになっていなくてはいけない、逆に言えば「神のものを神にかえす」という信仰なしに「カイザルのものをカイザルにかえす」というこの世の生活はあり得ない、ということを教えたもうたものであると思う。すなわち、神の支配はこの世の生活のいっさいに及ぶという「一重の倫理」である。これは「教会の主は世界の主」という第二回世界教会会議の宣言とも一致する。したがって、基督者がこの世のいかなる問題に対処するに当っても、それが福音とかかわりなしにはあり得ない。キリスト者の平和運動は、福音に迫られ、押し出されたやむにやまれぬ決断であり行動である。したがって、福音のさし示す倫理に反して、戦争が行なわれ、殺戮がなされている場合、それに抗議して死ぬことは「福音のために死ぬ」ことにほかならない。具体的に「平和のために死ねない」者がどうして原理的に「福音のために死ぬ」ことができようか。このような「二重の倫理」の主張をもって戦争を肯定し、戦争への協力を正当化しようとする態度は、たとえそれがどのようにすぐれた信仰の先輩の主張であるとしても、わたしは絶対にこれを容認することはできない。

以上わたしは「キリスト者としてなぜ戦争を肯定し、これに協力してきたか」という弁明に対する反論を述べることによって、わたしの反戦の主張を間接的に論証してきたつもりであるが、最後にわたし自身の主張を直接的に述べることによって、本稿の主題に結論

話の筋の中に、神さまの前では、どんなことがあってもうそ偽りを言ってはなりません、うそも方便とよくいわれるが、これもまちがいですというところがあった。ところがこのことばじりを口実に、これは戦争の際の戦略を毒するもので、反戦論を児童に鼓吹する意図から出たものだとし、それにありもせぬことを捏造して、軍関係の人々にふれまわる在郷軍人がいて、閉口したことがあった。幸い、求道者に憲兵曹長がいたので、彼のとりなしで、ことなきを得た。

2 東京巣鴨時代

昭和一三年四月平壌教会を辞し、五月上旬、野口末彦牧師の後任として、いまの巣鴨ときわ教会の前身日本組合巣鴨基督教会に赴任した。

この教会は、昭和一六年日本基督教団の成立とともに日本基督教団巣鴨五丁目教会と改名し、さらに終戦後巣鴨ときわ教会と改称されて今日に至っている。わたしは、この教会に赴任して三ヵ月もたたない八月五日の午後三時に、召集令状を受けとった。その令状には、その翌日の夕、大阪府堺の輜重連隊に入隊するよう指定してあった。あまりの急に全く泡を食ってしまった。令状が原籍地に送られ、さらに東京に回送されたので、入手が遅れてしまったのである。

当時わたしは、輜重兵万年伍長として予備役にあったため、予期せぬことでもなかったが、かくも早く最悪の事態に直面しようとは思わなかった。家内や教会員の驚きはひとしおであった。電話や至急電報で知らされた会員は、一大事とかけつけて来た。大急ぎで出征準備を完了し、町会の人々の形式的な歓送会に出席し、令状を手にしてわずか四時間目に、妻子にゆっくり別れを告げるいとまもなく、出征の第一歩を踏み出したのであった。東京駅ではかけつけてくれた岩村清四郎牧師はじめ、多くの教友や教会員たちに、あるいははげまされ、あるいは慰められて、東京をあとに赤だすきの旅路についた。手を振る人人の姿が見えなくなったとき、はじめて一種の興奮からさめてわれに帰った。列車のきしる音に刺激されて、複雑な感情がこもごもこみあげてきた。いよいよ東京も今生の別れかと思いめぐらしては「わが行く道いついかになるべきかはつゆ知らねど主はみ心なしたまわん」の四九四番の讃美歌が口づさまれてくるとともに、「主よみこころのままになさせたまえ」と、くりかえし真剣に祈らずにはいられなかった。かくて翌日斬髪し、指定の地に時間かつかつに到着した。そこではまず軍医から身体検査を受けることになった。「貴様は遅いではないか、なにぼやぼやしていたのか」との軍医の一喝にはめんくらったが、「おまえは職業はなにか」「はい牧師であります」と答えると「プロテスタントかカトリックか」と追いかぶせるように尋ねるので「プロテスタントであります」と言うと彼は急にやさしくなって「経理室に行って旅費をもらって帰れ。貴様は肥満症だ」とにやにやしながら言うのだった。このときやれやれ助かったと思った。しかし、内心の解放の喜びをそのままあらわすわけにもゆかないので、いかにも残念そうに「はい、残念ですが帰らしてもらいます」と静かに答えて、さっそく経理室に行き東京往復の旅費をもらい、連隊をあとにした。このときのうれしさは生涯忘れえない。察するに、この軍医はクリスチャンか、さなくば少なくともキリスト教に好意をもつ人であったにちがいない。すべては神のくしき御摂理にほかならない。結局わたしは、出征劇を演じたにすぎなかった。東京に帰ったとき町会の人々に対しては少々気まりが悪か

戦争前後の悪夢

田口重良

1　満州事変勃発当時の平壌時代

わたしは昭和二年四月から一三年四月末まで足かけ一二年、日本組合平壌基督教会の主管者として平壌で過した。軍国主義日本の植民地だった当時の平壌では、キリスト教会は軍部や警察からは白眼視された。満州事変の勃発とともに、彼らの疑惑の目は、一段と深められた。ある日曜礼拝に『理想と現実の矛盾』と題する看板を出したところ、さっそく特高刑事が尋ねて来た。理想と現実の矛盾とはいったいどういうことかと真顔になって根掘り葉掘り尋ねるのに驚いたことがある。また当時組合教会では、毎年総会が、東京・京都・神戸のいずれかの都市で順番に開かれていた。わたしは、この機会を北鮮から内地に旅行する唯一の楽しみとした。もちろん多少やぶ入り気分も手伝っていた。しかし、この旅行で不愉快でたまらぬことは、半島通過の列車内や、玄海渡船の乗り降りに特高刑事から、しつこく尋問を受けることであった。当時わたしは、頭髪を過剰に長くしていたうえに、部厚い真黒な口ひげをはやしていたので、とくにあやしまれたのかもしれない。しかしこのおかげで、あるときは船員から「末広博士ではありませんか」とま違えられたり平壌駅である紳士から「藤原知事さんと違いますか」と呼びとめられて苦笑したこともあった。とかくうるさい特高の尋問に対するレジストと、わたしのいたずら心も手伝って、あるとき東京から平壌への帰途、表紙の赤い書籍を二、三買いこんで下関から乗船した。釜山で下船準備をしていると、案の定、つめたい底びかりのする目つきをした背広姿の特高が近づいて来た。「もしもし、あなたはどこから来ましたか。」「どこに行くのですか。」「なにか書物でももっていませんか。」と矢つぎ早にたたみかけてきた。わたしは「会議に出席するため東京に旅行し、平壌に帰るところです。書物は二、三の赤いのをもっているだけです」と答えると、彼は急に得意の緊張を顔にみなぎらせながら、さっそく、わたしのトランクを手でかきまわし、書物をとり出しバラバラとめくっていたが、「赤い書物とはこれのことですか」とさすがにいっぱい食わされたと悟ったのか苦笑しながら立ち去って行った。このときの痛快さはいまも忘れることができない。また、日支事変が勃発した昭和一二年の夏の夕、平壌放送局から依頼されて童話を放送したことがあった。その童

五十がらみのごま塩の頭をした男であった。はじめて兄からこの男に紹介されたとき、案外もの腰の低いやわらかなことばづかいをする人物で、これが鬼〇〇と人から蛇蝎視されているがめつい男とは、どうしても考えられなかった。しかしことひとたび貸借関係といった利害の問題になると、態度が一変した。わたしどもの借りたへやも高い家賃を主張して譲らなかった。「お気にめさないなら他の人にゆずりますから」と言われては、住宅難の際、彼の言いなりになるよりほかなかった。このへやは、冬は日当りが悪くて寒く、夏は天井が低く、おまけにコンクリートのバルコニーがへやと平行してあるため、太陽の照りかえしでうだるように暑かった。そこで夏の夜はバルコニーにかやを吊り、そこに寝たものだ。雨になりそうになると、かやをたたみ、へやに逃げ帰った。また、朝、通行人からバルコニーにゆらぐかやを見られないように、暗いうちに起きた。おかげで当時午前四時に起きる習慣ができてしまった。しかし晴れ渡った夜、かやの網目ごしに天空にまたたく星を見上げながら、眠の国に旅立つ気持ち良さは、いまでも忘れがたい。このころ家内は、この町の食糧公団の事務員に採用されるとともに、わたしは母校の嘱託講師と、この町から三里ばかり離れた笠田町の高等女学校長がクラスメイトであったのを幸い、ここをも兼任することになったので、三人の子供を通学させながら、どうにか生活してゆけるようになった。いなか町では、野菜はともかく魚や肉が乏しく、おまけに暗から暗に流れるので、動物質の蛋白や脂肪が不足した。そこでわたしは粉河町の南五町ばかりの所を東西に流れている紀の川で、川魚を手づかみにすることをやりだした。夏はもちろんだが、秋冬の寒い季節にも湧き水が本流と交わっている地点を探し、魚が比較的あたたかい所に集まる習性を利用して、岩穴や草むらから魚をつかみあげては乏しい夕べの食卓を賑わすことができた。芸は身を助けるというが、幼少年時代水を友として成長したわたしが、魚つかみのこつを習得していたおかげで、この非常時に大いに役立った。ある冬の日、湧き水が本流に接する岸の岩穴に手を入れたとき、それがなにか大魚の巣であることを直感した。取り逃さないよう慎重なる上に慎重のかまえをもって、左右の穴から両手をさし入れたところ、大なまずをとり押えた。このときのスリルは万点であった。パリパリッーとはねる四百匁もする大なまずを、首尾よく陸地にほうりあげることができた。ただ水から出ると寒さが身にしみこみ、家につくまでふるえがとまらなかった。よくも心臓の鼓動がとまらなかったことだと、当時を思い出してはぞっとする。料理されたなまずの肉は、大皿二枚にいっぱいあった。黄色くあぶらぎった肉は、炭火の上でピューピーパァパァと燃え上がった。物資が欠乏のどん底にあった当時のこの夕のなまずのごちそうは、十数年後の今日でも、子供たちにも忘れがたいとみえて「おとうさんが命がけでつかまえて来たあのふとったなまずほどうまかったものはないね」と、ときどき語りあっている。

主が十字架につけられたのち、ペテロやヨハネらが一時落胆してガリラヤの昔にかえったが、復活のキリストに再び召されるに至り捲土重来漁人の道に邁進したように、疎開して紀の川の川漁夫になっていたわたしが、再び伝道牧舎に復帰して、主の御用にあたることができるようになったことは、神の恵と教友の祈りのたまものである。わたしの今日の牧会のこつは、戦争前後の苦難の経験、とくに魚の手づかみの秘訣に負うところが多い。

（玉川平安教会牧師）

ったが、家内や教会員は、全く夢かとばかり喜んでくれた。

いよいよ日支事変も国民の不拡大の期待と努力を裏切って、ただ拡大の一途をたどり、ついに昭和一六年の一二月八日、太平洋戦争に突入してしまった。来るところまで来てしまったのである。一億一心のスローガンのもと、国民生活のいっさいは、あげて戦争のために結集せしめられた。衣食住の欠乏はもちろん、国民も個人も最低の生活に追いこまれた。一例を申せば、申しわけ程度の野菜の配給ではどうにもならず、わたしは、生まれてはじめて野草の中で食用に供し得るものは食うことにした。ヨメナ、タンポポ、アカザ、ギシギシ、イタドリなどは野菜がわりに食したものである。

無反省に突進して戦線の延び切ったわが陸海空軍は、最新科学兵器と物量にものいわす連合軍のために、到るところで敗惨の憂き目に遭遇し、ついに軍部といえども敗戦の現実をカムフラージュすることができなくなってきた。将兵は到る所で玉砕した。あまつさえ東京はじめ主要都市に対する空襲は、夜を日についではげしくなってきた。そしてわたしは、二〇年四月の山手地域一帯の大空襲で罹災し、会堂も牧師館もまたたくまに烏有に帰してしまった。最初会堂を守りつづけたが、地獄の業火のように燃え狂う火焔にはどうすることもできず、大塚駅近くに噴き出していた水道管の水を全身にあび通しながら、不安の一夜をあかした。見渡すかぎり焼野ガ原と化した道なき道をもとめて、黒こげに化した屍を所々にながめながら、会堂の焼跡にたどりつき茫然と立っていたとき、妻と三人の子供（長男は中学二年、次男は一年、三男は小学五年）も、わたしのゆくえを案じつつ、申しあわせたように、焼跡に帰って来たのである。「おとうさんは生きている」「おまえたちも無事であったのか。よかったよかった」と、お互に九死に一生を得た恵をよろこびあったのである。これも神のみ守りにほかならなかった。しかし家財道具はもちろん、緊急立退きで遅ればせながら疎開した荷物も、巣鴨駅構内で積み重ねられたまま焼失してしまったので、わたしども五人は、文字通り裸一貫無一物となってしまった。歯を食いしばってでも会堂の焼跡にがんばり教会の復興をはかりたいと、仮に小石川の林町に間借りして努力したが、食い盛りの三人の男の子をかかえてはどうすることもできなかった。教会の近隣に住んでいた会員たちも、同じく罹災して、郷里に疎開してしまったため、相談する相手もなくなってしまった。結局五人が生きるためには、わたしの郷里和歌山に行くよりほかはなかった。父は、昭和九年死去したため、母ひとりが郷家に起居していたが、兄の家族がすでに台湾より引き揚げており、妹の家族も和歌山市で罹災して、困窮の生活をしていたので、ここも安住の地ではなかった。予言者ですら故郷で尊ばれないと言われているのだから、罹災して郷里に帰っては、だれひとり喜んで迎えてくれるものはなかった。二口母の家に泊っただけで、中学時代の母校の地、粉河町を再起の拠点とさだめた。母から最少限度の夜具や炊事具をもらいうけ、また兄の世話で粉河町本町に二階の一室を借りて、ここに東京からの罹災家族としての生活をはじめることになった。

3　粉河町に疎開中の思い出

この町は、昔から「会うな語るな粉河の人に、会えば五厘の損がいく」といわれてきた町である。とくにわたしが間借りすることになった家主は、この町の代表的な勘定高い、ころんでもただでは起きないといわれている

わたしの説教をメモしておられた。また来てくれればよいが」。だがわたしは、軍人の端くれだったから、彼がだれであるか、見抜いていた。「先生、あの人は憲兵ですよ」と言おうとしたことばを、のどまで出しかけて、やめてしまった。先生のうれしそうなお顔を見たら、とても言えない。わたしは心の中でつぶやいた。「あの人が、ほんとうに求道者であってくれますように。でも工員服は着ていたが、どう見ても軍人だし、しきりにメモしていたあの用紙は、たしかに軍隊のものだし、あの馴れた速記の技術では……」。幸い先生の説教に反軍思想が含まれていなかったので、先生は呼び出しを受けなかった。

西村先生、こんなことがあったのを覚えておいでですか。あの憲兵さん、あなたは熱心に速記した、あのときの説教によって、ともかく一度は福音に接したのだから、それを記憶していて、戦後、どこかの教会で、こんどは自分の救いのために説教をメモするような人になっていないかしらん。あの日から、西村先生はきっと何回もあなたのために祈られたにちがいない。その祈りが聞かれていたならば、なんとすばらしいことだろう。そうしたら、わたしがあのとき、こざかしい発言で先生の祈りを妨げなかったことが、思わぬ実りを得ることになるのだが。

死生観

そのころ、サイパン島はすでに米軍の手に陥ちていた。わたしの分隊の教官であった山本壮吉少佐は、キスカ島から帰還されたかただったが、当時の日本軍において、はじめての全面的撤退（退却）作戦を指揮した人であっただけに、サイパン陥落と同時に、この戦争はどうしても勝つことができないという判断をし、ことあるごとにわたしたちに死生観の確立を強調された。わたしもわたしなりにキリスト教信仰に基づいた死生観を保持し、死に臨んであわてることのないよう努力したものだった。だが当時のわたしの信仰は、国家のために生命を捨てるという、いわゆる軍人精神のわくの中で、いかに純粋に生命を捧げうるかということ以外には、その課題を持ってはいなかった。

急を告げる戦況

一九年六月にサイパンが陥ち、日本全土が次々にB29の爆撃にさらされる運命になり、欧州の戦況も日増しにドイツ軍が不利になってきた。一〇月一九日にわたしはこんな日記を書いた。

夕食後人影ナキ練兵場ニ出デ世界ノ大局ヲ思イツツ空想ニ陥ル

ソ連ハ愈々バルカンノ手ヲ強メ、米英ハ西部戦線ニ大兵力ヲ注グ、ドイツハ両戦線ヲ持チコタエ得ズ。ココニ於テ世界ノ大局ハ一大転換ヲナスベキナリ。即チソ連ノ野望ハ何カ、ゲルマン民族ノ滅亡ニハアラズ。彼ラハ、古ヨリ南海ヲ欲シナガラ果サザリキ。果然バルカンノ占領ニヨリ永年ノ宿望ハ達セラレルナリ。然シテコレニ最モ反対スルハ英国ナラン、ソ連ノバルカン進出ニヨリ、地中海ヨリ印度ニ通ズル英国ノ生命線ハ侵サルレバナリ。必然的ニ英ソ開戦ノ必要ニセマラレン。ココニ於テ独ソ両国ハ日本ヲ仲介ニ講和ノ途ヲ開カン。コレ両国ノ欲スルトコロナリ。サラバドイツハ西部戦線ニテ、ソ連ハバルカン及ビイラン、イラクニ於テ共同ノ敵英米ト戦フナリ。コレハ日独両国ガソ連ノ南海（地中海及ビイラン湾）進出ヲ認メルコトニナルモ、現戦局ヨリ止ムヲ得ズ、コレニヨリ世界ノ戦局ハ大イニ変化ス。コノ時期ハ今年ノ暮、ナイシ来年ノ春ナランカ

当時一九才のわたしがこんな世界政策を空想したのであった。これをいま読みかえし、数年前のスエズ動乱と、比較するとおもしろいが、この空想は文字通り空想に終ってやがてドイツは降服した。そしてわれわれの卒業も早められたのである。

魂のさすらい

—8月15日をめぐる—

鷲山林蔵

東舞鶴教会

「左向けェひだり！」「皇居遙拝、最敬礼！」「なおれ」「皇軍の武運長久を祈り、黙禱！」「黙禱やめ」

この一連の号令がなんであるか、戦前派、戦中派の人々には、ある意味でなつかしくもあろう。遙拝、皇軍、武運長久。青年諸君で意味のわからぬ人は年長者に聞いてみるのも八月一五日という日を迎えて無意味なことでないかもしれない。これは国民儀礼と称するものだが、なんでわたしがこんなことばでこの一文を始めたか、首をかしげる人もいるだろう。

驚くなかれ、教会礼拝ですら、それが日本人の集会であるかぎり、この国民儀礼を行なわずに開会することは許されなかったのだ。

わたしは昭和一八、九年ごろ、海軍の軍服を着、短剣を腰にして、東舞鶴教会に、月に一度とは言えないが、しばしば礼拝に出席した。軍港都市で鎮守府、海軍機関学校、海兵団、海軍工廠がすべてであった東舞鶴市にある教会では、牧師とその夫人とお嬢さんだけで、聖日礼拝を守ることが多かった。たまたまわたしが行けば大歓迎をされるし、ときたま中年の婦人とわたしと、牧師家族以外のものが二名礼拝に出席して、喜びあったこともある。

当時こんなエピソードもあった。ある聖日その教会に、ひとりの求道者があらわれたのである。三〇才ぐらいの工員服を着た男だった。礼拝の直前にていねいなあいさつをしてはいって来た。牧師の号令で型通りに国民儀礼をすましたあと、お嬢さんのきれいなオルガンの奏楽で礼拝は進められた。（たしか、なほ子さんといって、終戦後上野の音楽学校に学び、一時東洋英和の小学部で教鞭をとられた。わたしが二五、六年ごろ同校に尋ねたら、すでに退職、結婚されたとのことだった。）会衆は夫人と、わたしと、その青年だけだった。司会と説教をされている西村直牧師（先日、本誌に対談を載せられた西村関一牧師ではなく、風貌も正反対で、見るからに善良、素朴でやさしい先生。いまでも同教会でがんばっておられる）は、いつになく、はりきった調子で、名説教をされ、時間もふだんより長かったようだ。それもそのはず、この日はほんとうに珍しく求道者を迎えたのだもの。その青年は礼拝が終ると、先生にひととていねいにあいさつして立ち去った。人を疑うことを知らぬ先生はニコニコ顔で見送ったのち、おっしゃった。「きょうは求道者が来たね。とても熱心な人で、いっしょうけんめい

たそうである。

八月一五日

やがて八月一五日がきた。実はその前々日潜水学校で訓練中の中尉、少尉たち約百名が、大竹から五キロほど広島寄りの玖波という町の山中に、宿所と教室を疎開させたのである。潜水艦部隊が海に潜らず山に登ったわけである。あの日午前中は勉強をしてすごした。正午すぎ、指導教官の森山大尉が憤然とした顔つきで教室にはいってきた。軍刀をガチャッとつえにして

「わが国は無条件降服した」

わたしは全身から血の引くようなあのショックをいまも忘れない。なんたることぞ、降服、しかも無条件降服、そんなことばは、わが国の軍隊用語にはないはずである。

「いま玉音の放送があった、だが降服したのは政府であって、軍令部は停戦命令を出していない。軍は降服しない」

こう言って教官は立ち去った。

潜水艦部隊が山に登るほどの異状なことをしていても、負けるということは露も考えたことのないわたしたち、死ぬ準備はできていても降服の準備は全然していなかったわたしたち、この日は全く呆然自失、軍刀を引き抜いてその澄んだ光沢に見入るのがせいいっぱいだった。その夜酒が一升ずつ配られた。わたしは一升びんをラッパ飲みで飲みほした。わたしの生涯におけるたった一度のやけ酒である。

だが翌日からわたしたちは猛烈に忙しくなった。大尉、少佐級の人は隣りの岩国航空隊の飛行機を利用して、東京に、九州に飛び、戦争継続の運動をはじめた。戦闘準備は解かず、米軍機が飛来したら高角砲は応戦するなどの交渉をし、横須賀では事実、米軍機を射落としもした。同時に、なんとかして天皇に迫って、もう一度新政府を立てて降服取消をさせようと運動もしたが、この運動はほんの二、三日で失敗した。われわれ少、中尉らは多分全国の軍部が同じことをしているだろうとの想像のもとに、付近の住民を個別訪問し、「政府は降服したが、軍は降服せず、軍に協力せよ」と呼びかけた。ポスターを辻々にはり、軍歌を歌って町をデモ行進し、気勢をあげたが、住民は、こわがるばかりであった。これが、暴動になるのを恐れたのであろう。二、三日後、呉鎮守府長官がわざわざわれわれの所に来、青年将校全員を集めて、「天皇の命令に従え」と諄々と説いてくれた。最後に「わかった者手を挙げよ」と言われたとき、たったひとり以外は、だれも手を挙げなかった。これが、無条件降服に対するわれわれ青年将校の唯一の抵抗であったのだ。たがこのひとり、名は知らぬが、たしかに勇気の必要な行動であったと、いまでも尊敬している。

徴用工の解散、応召員、予備士官の除隊がどんどん進み、数日後には、われわれがいくら抵抗を試みようとしても、どの道もみなふさがれてしまった。一週間も経たないうちにわたし自身、敗戦という現実の中にすなおにたたずんでいたのである。そしてこの間、わたしはキリストの名を呼ぶことすら忘れていたのだった。

復員輸送時代

虚脱状態がしばらく続いたのち、われわれ正規の士官に課せられた仕事は、戦争の残務整理であった。そして復員収容部が開かれ復員輸送もはじめられた。

一一月三〇日に海軍省が帝国海軍の名残を惜しみつつ、その看板をおろし、第二復員省となってわたしも復員官に任ぜられたころ、自宅に帰ってゆく同僚も出はじめたが、わたしはどうしても帰る気が起こらず、むしろ日本の国土から離れてゆきたい気分であった。

ある日大竹の町を歩いていた。小学生がふたりボール投げをしていた。ひとりが受けとりそこねて、そのボロ布を固くまるめて作ったボールが、コロコロとわたしの近くにころ

死ぬということ

このころからわたしの精神には、大きな矛盾が生じはじめた。戦争の実際をある程度知ってくると、この戦争は、決して勝てっこない、とはっきりわかってくる。それでいて、日本が負けるであろうとは、全く考えていなかったのである。これはたしかに矛盾している。それではいったいなにを考えていたのだろう。確実なことが一つだけあった。日本がまだ存在するうちに（負ける以前にと言ったらうそになる。負けることは計画にはいっていないのだから）自分が死ぬにちがいないということである。いつ死ぬか、それは問題ではない。わたしが死んだのち日本はどうなるか、国民はどうなるか、そんなことはどうでもよい。敵の艦船を一隻でも沈めてから死ねばよいのだ。あとはなにも考えることができなかった。また、しなかった。ひところ、あんなにわれわれの血を沸かせた「悠久の大義に生きる」ということばも勝利の可能性の消失とともに思い出すこともしなくなった。あの戦争末期に、多くの青年たちが、勝利の希望が全くないままで、特攻隊に参加したが、同じような精神状態の人も多かったろう。わたし自身は本土決戦要員であったため、死ななかっただけなのである。

こんな心理状態を証明する一つの事件があった。横須賀の海軍航海学校で、潜水艦乗組のための訓練を受けていた当時である。二〇年五月三〇日であった。機関学校生徒時代、同室に寝起きしていた先輩の藤木大尉が特殊潜航艇の事故でポックリ亡くなられた。ほんの昨夜は愉快に談笑したのである。事故の報告に接したわたしは、「ああ藤木さんが死なれたか」と思っただけで、それ以上、なんの感動もないのである。そのときは自分で自分の心を疑ったほどだ。あの人が死んで、なんの哀惜の念も起こらぬとは。あすはわが身のことである。これなら自分が死ぬのも平気かもしれぬ、と。まして敵を殺すことなど罪意識が起ころうはずもない。戦争とはほんとうにおそろしいものだ。感受性の最も強いはずの二〇代の青年を、ここまで徹底的に「軍人ニヒリズム」に落としてしまう。こういう青年将校が、最前線で多くの部下を指揮するのである。

原子爆弾

広島に原子爆弾が落とされたあの八月六日の朝、わたしは広島県大竹にある海軍潜水学校の実験室で急速充電の実験中であった。これは潜水艦には必須の作業だが、かなり危険度の高い作業である。非常に緊張しながら大電流を蓄電池に流し込んでいると、窓のほうでピカーッと閃光がひらめいた。とたんにわたしは「しまった」と思った。電流を上げすぎてヒューズが飛んだのだと思ったのである。あわてて電流計を見たが異状なし、オヤッと首をかしげた数秒のち、ドーンと腹にひびくような響きがした。原子爆弾のことをピカドンというのはこのためである。わたしたちはスイッチを切って戸外に出た。広島市の上空に、あの有名な「きのこ雲」が浮かんでいる。広島と大竹の間は約二五キロの距離がある。ギラギラする青空に浮かぶ不気味な雲はゆっくりひろがってゆく。ガスタンクが爆発したのだろうかと思った。そのとき、同僚の村田少尉が「オイ、あれは原子爆弾だぞ、きっと」と叫んだ。「まさか、原子爆弾なんかできてるものか」とわたしは反論した。アメリカのこの秘密兵器の成功の情報を、ついに探知できなかった日本の軍部の中で、あれは原子爆弾だ、とイの一番に指摘した人は、ひょっとするとこの村田駿少尉かもしれない。彼はいま海上自衛隊で活躍している。

まもなく全身やけどした人々が、舟で続々と大竹の海軍病院に運ばれて来た。まさに修羅場である。その日大竹の町からは、全世帯から一名ずつ動労動員で広島に出かけていたため、町内のほとんど全家庭が被害者を出し

出てみた。満天のみごとな星空である。海上でみると空気が澄んでいるから実に星の数が多く、光も見事である。この宇宙の大きさに比べれば、地球なんか、一粒のちりでしかない。その地球の上でも、ひとりの人間の生命なんか、ちりのそのまたちりでしかない。事実、この船から海に飛び込んだら、ポチャンという小さな音を出すだけで、この世から全く存在を無くするのである。人が死ぬことを「亡くなる（無くなる）」とはよく言ったものだ。こんな小さな人間が、こんな小さな地球の上で、猫のひたいほどの土地を奪い合って血みどろの戦争をするなんて、と思った瞬間、排気筒から流れでる機関室の轟音に気がついて現実の世界にもどって来た。いかに小さな存在であろうとも、われわれは生きてゆかねばならぬ。だからこうして太平洋を休みなく往復して、人を輸送しているのだ。わたしはその夜、人間の生命の尊さをしみじみと味わったのである。人間はどうしてもこの生命の尊厳を、みんなで守り通してゆかねばならない、と決意もした。

ペテロの涙

戦後第一回の総選挙のニュースも海上で聞いた。共産党が三十余名も当選したという。いったい共産主義とはなんだろう。自分たちもやがて日本の新しい社会の一員にならねばならないが、それまでに社会のことを勉強しておこう、という相談が若い士官の中で発議された。艦内にはその指導者がいるはずがない。そこで呉に入港した際に、東大の経済学部を卒業して、海軍の経理士官になっていた某氏を招いて、共産主義の講義をしてもらうことになった。その人の名も、講義の内容も忘れてしまった。彼が戦争中に仲間で印刷したというガリ版刷りの共産党宣言を読みながら話しをした。そのときである。彼は突然この中にクリスチャンはいますか、と聞くのである。わたしはハッとした。「共産主義の勉強をするためにはキリスト教のことを最初に述べねばならない。わたしはクリスチャンではないから、キリスト教についてもし誤ったことを言ったら訂正してもらいたい。もしクリスチャンがいたら手を上げてくれ」彼のこういうことばにわたしは脳天をガツンとなぐられた思いだった。ああ自分はクリスチャンだったのだ。手を上げようか上げまいか、胸はドキドキしてきた。もう共産主義の講演も耳にはいらない。どうしても手を上げる勇気のない自分がいま裁き人の前に立っている。もし手を上げたなら、「なんだ貴様はクリスチャンか」と嘲笑されるにちがいない。そうだ自分はクリスチャンらしい生活は一かけらもしていない。聖書はかつては行李の中にあったはずだが、いま艦内に持っているかどうかも、確かでない。祈りも忘れていた。酒の飲みっぷりがよいと先輩に言われて得意になったり、生活のどの部分を拾ってみても、自分がクリスチャンだと名乗れば、キリストの名が笑いものにされることはたしかであった。なんといっても終戦の前後から、自分がクリスチャンであることを完全に忘れていたことは、なんといっても言いのがれることのできぬ大失敗であった。どうしても手を上げることのできぬ自分を見つめて、カヤバの中庭で主を知らないと言い切ってから、はげしく泣いたペテロのことを思い出した。その日わたしはほんとうに久しぶりに、というよりも、受洗後五年も経ってから生まれてはじめてといったほうがよいか、自分の罪深い姿のままで、なんの気どりもない、いかなる虚栄も全く意味をなさない、砕かれた魂に立ち帰って自分の私室のようにしていた機関科事務室の中で祈ったのだった。イエスのたとえにあるあの放蕩息子が、あの日はじめて心から「おとうさん」と呼べたように。

まもなくわたしは艦をおり二〇年一二月三一日の夕刻、北海道の両親のもとに帰り、五年ぶりに家で正月を迎えたのだった。同時にわたしの教会生活もふたたびはじまったのである。

（日本橋教会牧師）

がって来た。なにげなくそれを拾って子供に投げてやった。「アッ、あのおじさん、いい人だよ」、とむこうがわにいた子が言った。とたんにわたしの目から涙が出てきてしまった。新聞を見ても、ラジオを聞いても、映画を見ても必ず職業軍人の悪口が出てくる時代である。それからというものは、町の中で、自分に対する非難の視線を感ずるごとに、この子供のことばを思い出した。「職業軍人だからといって、そんなににらまないでくれよ。おれだってホントはいい人なんだから」。こうつぶやいたのも、わたしなりに、戦争に対する罪責感を感じていたためだろうか。

そして一二月下旬に、わずかに生き残った巡洋艦鹿島に乗り組んで南方に同胞を迎えにゆく仕事についた。ちょうど一年間ニューギニヤ、ラバウル、シンガポール、サイゴン等等と、日本との間を行き来したが、わたしの人間形成にとって、実に貴重な一年だった。この間、いろいろな事件にぶつかり、さまざまのことを考え、そしてよく書いたのだが、今日ひとりのキリスト者として、また牧師として立っているわたしに、直接結びつくようなことを二つ三つ述べてみよう。

シンガポールの引き揚げ者

引き揚げ者にもいろいろあった。いちばんみじめだったのはニューギニヤからの兵隊、極度の栄養失調で、艦のラッタルも四つんばいにならねばのぼれない。いっぽうサイゴンでは終戦後も豊富な食糧を持っていて、血色もよく帝国軍人のプライドも残っている。むしろこういう人の方が日本に帰ってからあらゆる面で困惑するだろうと思った。シンガポールから一般人と軍人とがまじって乗船したときのことである。二千名近い乗艦者のうち婦人が四百名もいただろうか。そして驚いたことに、婦人のうち相当数の人が妊娠しているのである。中には臨月の者もいて、航海中に出産をし、艦長が名づけ親になるというエピソードもあった。軍医官から聞いた話しだが、ほとんどの妊婦は、自分の胎児の父親の名を知らなかったり、知っていても言えないというのである。事情はこうである。戦後英国がシンガポールの支配権を回復し、日本人は収容所に入れられた。男子の収容所と女子の収容所とはもちろん別々なのだが、実は両棟の間にはやや広い草原があるだけで、柵はなかった。戦後一ヵ年前後もその収容所にいて、食事は与えられ、これといった仕事もない。管理する者の立場に立てば、いつなんどき、鬱積されたエネルギーが爆発して暴動が起こるかわからない。適度に発散させておくにかぎる。わたしの想像にすぎないが、こんな所に、柵を設けなかった理由があるのではあるまいか。風紀が乱れてもそれは当人の責任なのである。草原は自制心に勝てなかった男女の公然の密会所となった。あの婦人たち、また母の胎内にいたまま帰国した子供たち、戦争の深い傷あとを、宿命的に背負いながら、いまもこの国のどこかで生きているのだ。この責任はいったいだれにあるのだろうか。その母にのみ負わせてよいのだろうか。

生命のはかなさ、尊さ

一日千秋の思いで待ちこがれた引き揚げ船に乗ったばかりに発狂し、太平洋を北上する途中で、海の中に飛び込んでしまう同胞もいた。昼であると、乗組員の救助作業で助かる率も多いが、夜だと、たいがい絶望である。「人が落ちた」というしらせとともに艦は停止し、あるいは付近を巡回し、投光器で海面をさがす。助けを求める声を出しているかもしれないので、艦内の全機械を止め、全乗艦者が、会話をやめ足音もしのばせ、デッキ上で耳をすませてさがしてみる。夜は無情である。一時間ほどさがしたのち、弔意を表わす意味で汽笛を長くならし、現場を二、三回、回って、再び針路を北にする。

そんな事件があってしばらくしてからである。真夜の機関科当直をすませて、上甲板に

平和を守る

「平和に関する訴え」は、さらにこう言っております。

「第二次大戦に際して、われわれキリスト者がおかした過ちは、平和の福音を単にながめるのみで、そのために身をもって戦わなかったところにあり、われわれはこれを深く悔いるものである。」

太平洋戦争におけるキリスト者の戦争責任をになって、平和の福音のために、身をもって戦おうとするとき、キリスト者の平和運動は、一つの政治的・社会的行動となってゆかねばなりません。それは、平和を侵そうとする権力や支配にたいする「平和を守る」戦いですが、そのためには当然、政治的・社会的な目標設定、運動の効果をあげるための組織、それを支え・導く神学が必要となります。

キリスト者平和の会が最初にかかげた目標は、全面講和・中立・平和憲法擁護・再軍備反対でありましたが、それはさらに発展し、幅を広げて、あるいは原水爆禁止を主張し、広島・長崎における原爆被爆者救援活動に挺身し、全面的軍備撤廃を唱え、新安保反対デモを組織し、中国との交わりを回復する運動を起こしてキリスト者による中国教会問安謝罪使節団に代表を送り、あるいは東京において、世界キリスト者平和会議を主催し、プラハ・キリスト教平和会議に代表を派遣するなど、より積極的・建設的な政治行動を組織的におしすすめてゆくようになりました。

さらに忘れてならないことですが、政治行動としての平和運動が、より有効な効果をねらうためには、より幅広い組織のつながりを必要とします。そういう要請にうながされて、キリスト者平和の会が加わっていった横のつながりとしては、キリスト教平和運動協議会、世界宗教者平和会議、さらに憲法擁護国民連合、原水爆禁止日本協議会などがあげられます。また、信教の自由を守るキリスト者の会や、日中キリスト教交流懇談会との協力も、必要となってくるでしょう。

キリスト者平和の会はしかし、現実の厳密な社会科学的分析の上に立った、遠い将来への見通しや計画行動のプログラムは持っていません。そこに、キリスト者平和の会の限界性もあるわけですが、しかしキリスト者平和の会の特質はやはり、以上にあげたような行動と発言を、現実の状況の「今・ここで」において、そのつど、そのつどの新しい決断として選び取ってゆくという予言者的実存にあるのではないかと思います。

恐るな、小さき群れよ

もちろん、キリスト者平和の会は、会員わずか千名にも満たない、ほんとうの「小さき群れ」にすぎません。日本の教会の多くの人は、この会の存在と価値を認めません。教会のなかには、あいかわらず、政治的無関心や教会に対立を招くことを恐れて政治問題には無色透明中立主義を守ろうとする態度が、予想以上に根強くはびこっています。それどころか、教会を支配する政治的ムードは、依然として保守的・反共的です。

しかしわたしたちは、キリストが人間の形をとってこの世に来られたのは、人間と世界の救いのためであったということ、そのキリストを主とする教会は、この世のためにある時にはじめてほんとうの教会となることが許されるということ、そして今日、この世のためにあるとは、世界の平和のためにあることだということを、福音によって示されているものとして、戦争の危機になげこまれている世界のまっただなかで、平和を造り出し・平和を守るための教会的・政治的決断をあえてする責任を、おわなければなりません。そのとき、この「小さき群れ」にも、教会の使命をになうことのできる豊かな生命と創造力と戦うことのできる勇気と、厳しい困難と挫折にもかかわらず最後の勝利を信ずることのできる確かな望みとが、与えられるのです。

（「福音と世界」編集長）

キリスト者平和の会

森岡巖

「われわれは、政治的・社会的領域においても主イエス・キリストの支配があらわになるように決断し行動することが、キリスト者の責任であると信ずる。

われわれはこの責任にもとづいて世界の緊張を緩和し、社会矛盾を解決することに努力する。

われわれは現在の状況において、平和かつ民主的な現行の日本国憲法を擁護する。」

これは、「キリスト者平和の会」という、キリスト者の平和運動の団体が掲げる綱領です。ここには、一九五一年二月の発足いらい世界と日本が戦争と平和の間をゆれ動いてゆくなかで、終始一貫して「平和の主」を信じ、「平和の福音」をあかしするために奉仕しつづけてきたキリスト者の「小さき群れ」の、信仰・思想・実践の現実と目標が、浮き彫りにされています。

平和を造り出す

キリスト者平和の会が一九五一年二月に発表した「平和に関する訴え」には、こう言っております。

「平和の福音は、世のあらゆる平和論と質的に区別される神よりの賜物であると共に、しかもわれわれに対して、現実に平和たらしむる者として歩むことを命じている。……キリスト者としてのわれわれの……立場は、あくまでも福音の宣教に支えられ裏づけられねばならない。福音の宣教こそ平和のための最後の拠所である。」

「平和の福音」によって導かれ、またそれの宣教という課題と、使命をになうべき主体は、なによりもまず教会であります。そういう意味において、キリスト者の平和運動は、教会から切り離されたところで行なわれることは許されません。それは、教会から出て、教会に帰ってゆくべきものです。逆にまたキリスト者の平和運動は、教会が宣べ伝える福音が真に「平和の福音」であるかどうか、それが「平和を造り出す」ほんとうの力を発揮しているかどうかを、教会に向かって問いかけます。また、「平和の主」であり・世界の主であるキリストを信ずる信仰を、告白し・あかしする教会として、教会が形づくられてゆくように、祈りつつ奉仕をします。

さらに、わたしたちが現実に生きている国家や社会のありさまが、「イエスは世界の主である」という事実を否定するような動きを示す場合には、それにたいして「否」と言うことが、教会のキリスト証言の一部だと信じて行動します。

要するに、キリスト者の平和運動は、そういう意味での「教会形成」と「信仰告白」にあずかることが、「平和を造り出す」ことであると信じ、それをおし進めるために、教会に奉仕する信仰の実践です。キリスト者平和の会が、日本の教会にたいする課題としてになってきたのもこれでありました。

に対して誇りと使命を持たねばならぬ〈独自性存在〉であることを象徴するものだとわたしは思います。

だが、はたしてわれわれは、真にあの指紋によって象徴されている、自己の責任性と独自性を自覚した、人間らしい人間として生きているでしょうか？　むしろ、自分の限界を受けいれることのできない、いつもいらいらした人間として暮しているのではないでしょうか？

2　自己受容の問題

ここでそのような人間の姿を、漱石の『行人』から見てみたいと思います。『行人』の主人公は長野一郎という、たいへん頭の切れ味のいい大学教授なのですが、彼は自己というものを真に受容することのできぬ焦燥感にかられている人物です。彼のことを気づかった弟の二郎が、Hさんという一郎の同僚の大学教授に頼んで、頭を休める目的のために旅に連れ出してもらいますが、そのHさんから一郎のことを記した長い手紙が旅さきから二郎の所にまいります。『行人』の最後に出ているその手紙の中に、こんなことが書いてあります。少し長くなりますから、かいつまんで記してみましょう。

「……宿屋についてからこんなことがありました。寝るには早過ぎるし、話にはもう飽きましたので、わたしは、床の間の脇から碁盤を持ち出してきて、兄さんと黒白を争おうとしました。兄さんはしばらく碁盤を眺めていましたが、やがて『まあ止そう』と言ってそれ以上いくらすすめてもいやだと拒わるのです。それで仕方なくわたしは一人で盤の上に石を並べていますと、やがて兄さんは不意に座を立って廊下へ出て行きました。ところが、少したつと直ぐ帰ってきて、突然『やろう』と言うやいなや、わたしの手から碁石をもぎとるのです。それでわれわれは黒白を争うことになったのですが、間もなく、手早く運んで行く碁面をしまいまで辛抱して眺めているのは苦痛だと言って、兄さんはやめてしまいました。

床に入る前になって、わたしは兄さんからその時の心理状態の説明を聞きました。兄さんは碁を打つのはもとより、何をするのも厭だったのだそうです。同時に、何かしなくてはいられなかったのだそうです。この矛盾が兄さんには苦痛なのでした。兄さんは二六時中何をしても、そこに安住することができないのだそうです。何をしても、こんなことをしてはいられないという気分に追いかけられるのだそうです。

『自分のしていることが、自分の目的になっていないほど苦しいことはない』と兄さんが言うので、『目的でなくても方便になればいいじゃないか』と答えますと、『それは結構である。ある目的があればこそ、方便が定められるのだから』と兄さんは言いました。兄さんが苦しむのは、兄さんが何をどうしても、それが目的にならないばかりでなく、方便にもならないと思うからです。ただ不安なのです。従って、じっとしていられないのです。兄さんは落ちついて寝ていられないから起きると言います。起きると、ただ起きていられないから歩くと言います。歩くとただ歩いていられないから走ると言います。すでに馳け出した以上、どこまで行っても止まれないと言います。止まれないばかりだけならいいが、刻一刻と速力を増して行かなければならないと言います。その極端を想像すると恐ろしいと言います。怖くて怖くて堪まらないと言います……」

わたしはこの一郎の姿の中に、なかなか自己が自己と和解することのできない、ただいまのわたし自身を見せつけられるような気がいたします。わたしもこの一郎のように、深いところで、自己の存在を肯定・受容しないで、宿なしの乞食のようにうろうろと落ちつきのない人間となっているように思えるからです。さて、このように〈自己受容〉のなさ

男と女

高木幹太

1　責任性と独自性

われわれのからだの中で、〈人間とは何か〉をきわめて特徴的に鮮かに示してくれる部分があります。それは手の〈指紋〉です。

だれでも知っているように、この指紋には二つのおもしろい性格があります。その一つは、〈終生不変性〉という性格です。つまり生まれたその時から死んでしまうまで、一生を通して変わらないのが指紋の第一の特徴なのであります。指紋にかぎって小学校のころには右に巻いていたが、大学に行くようになって左に巻くようになった、などということは絶対にありません。このことは、思うに人間というものが自己に対して責任を取らねばならぬ〈責任性存在〉であることを象徴するものだと思います。なぜかと言えば過去の自己と、現在の自己との間にどんなに時間の隔たりがあっても、変化することのない自己の同一性ということが、〈責任〉ということの意味であるからです。なにかの本で、新陳代謝のために人間は七年に一回ずつ、すっかり細胞の組織が変わってしまうということを読んだことがありますが、しかし、肉体の現象から言えば全然別人となっていても、やはりこのわたしは七年前と変化しないわたしとして、あくまでも〈責任性存在〉なのであります。

それからもう一つ、指紋には、〈万人不同性〉という性格があります。それは空間的にこの地球上に何億という人間がいても、ひとりとして同じ人間は存在しないということを意味します。このことは、思うに、人間というものが、ひとりひとり他のだれとも比べることのできない〈独自性存在〉であることを象徴するものだと思います。独自性ということは、その人間だけに付与されている限界があるということを自覚し、そこに誇りと使命を感ずることです。たとえば、わたしは自分の選んだのではない両親から、そのように特別に望んだわけではないのに男として生まれてきて、頭が悪いとか、肥満体とか心臓弁膜症とかいう妙な遺伝を与えられ、考えもしなかった人々と偶然に出会い、その人々に規定されながら、アメリカでなくこの日本に、しかも江戸時代でなく、この現代に生きています。なぜなのであるか、わたしにはそれが不思議な限界として感じられざるを得ません。しかもこのような限界はわたしの設定したものでないのですから、わたしを越えたある他者によってそれは置かれたという以外にありません。ヤスパースが言ったように「限界はある他者の存在することを表現しているのです」（『哲学』）。そして、この超越的他者による限定性（ベシュティムトハイト）の中から、わたしの使命（ベシュティムンク）が告げられていることを経験し、この使命を聞きとる（フェルネーメン）ことが、真の意味の考え深さ、理性（フェルヌンフト）と言われるのであります。指紋の持っている、万人不同性という性格は、このように人間が自己の存在

はわが住居なり）などと言います。（なお、このドイツ語はニーチェの前出の書の第三篇の「帰郷」の中に出てくることばで、正しくは「孤独よ、わが故郷なる孤独よ」と訳すべきです。これに続いて、Wie selig und zärtlich redet deine Stimme zu mir ! すなわち「われに対する汝の声のいかに祝福にみちて優しく語ることぞ」ということばがくるのであって、ほんとうは、孤独こそは自分の雄々しい創造の意欲の湧き出る懐しい故郷なのだという意味なのです。一郎のように、絶望的なことばとして解すべきではありません。）自己受容がなされない結果は、このように、他者受容がなされなくなるのであることを、われわれは以上の一郎の姿から知ることができるでしょう。

それでは、いったいどうすることによってわれわれは自己受容をなすことができるのでしょうか？

3　裸を恥じない男と女

しかし、その問題は次回に述べることにして、ここでは今回の主題である「男と女」ということを考えていきたいと思います。わたしは第一回、第二回で、それぞれ男性と女性の魅力ということを述べてきましたが、それは、男性はあくまでも男性として、女性があくまでも女性として、その独自性に深く目覚める必要があることを示唆したいがためでした。男性とか女性とかどちらかいっぽうだけが優れていて、他は無価値であるとか、あるいはあのボーボワールのように、その両者に根本的な区別を認めようとしない、というのでなく、われわれは徹底的に自己が男性であることを、あるいは女性であることを自覚的に肯定・受容し、そこに自己の使命を受けとり、むしろ進んで自己の性に誇りを持つことが必要であります。人間のあるべき根元的な姿はまさにそのようなものでありました。神が人間をアダムとエバとして創造され、彼らをエデンの園に住まわせられたときのことを創世記の記者が「人とその妻とは、ふたりとも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった」と記していますが（二・二五）、それは実に、男性が男性であり、女性が女性であることを、無邪気に大胆に肯定・受容していることを象徴しているものであると解することができます。そこに、自己の独自性に誇りを持つがゆえに他者の独自性に静かな尊敬を抱き、かくて互いに深い交わりを形成している根元的な人間の姿をわれわれは想像することが許されるでしょう。真実の交わりというものは、見透すことのできない独自な存在が互に自覚的に承認され、その上でその間に作られるものでありました。つまり両者の間に質的な区別が存在しつつ、しかも尊敬と信頼において結ばれること、これが交わりであるのですが、それはわれわれにとってきわめてむずかしい問題となっています。なぜかと言えば、自己が自己の独自性を放棄して、他者の中に吸収同化されることを願うAどれい的結合Vの仕方や、反対に、自己の独自性のみを主張することによって、無理に他者の独自性を放棄させ、かくて他者を自己の思うままに支配しようとするA暴君的結合Vの仕方などフロムのいわゆるシンビオチック・ユニオン（世俗的結合）が、われわれの交わりと称するものの中に多いからです。ユニオン（合一）とコミュニオン（交わり）との区別がなされねばならぬとよく言われるゆえんです。

われわれは男性として、あるいは女性としてその独自性を自覚し、そこに静かな責任と誇りを持ち、互いに尊敬と信頼とによって交わりつつ生きているのか、それとも、男性は女性の中に、女性は男性の中に互いにその独自性と責任性を忘却すべく、不安定な落ちつきのなさをもって、ひそかに、あるいは、あらわに、情熱的に互いに憧れて生きているのか、いったいどちらの生き方をしているのでしょうか。

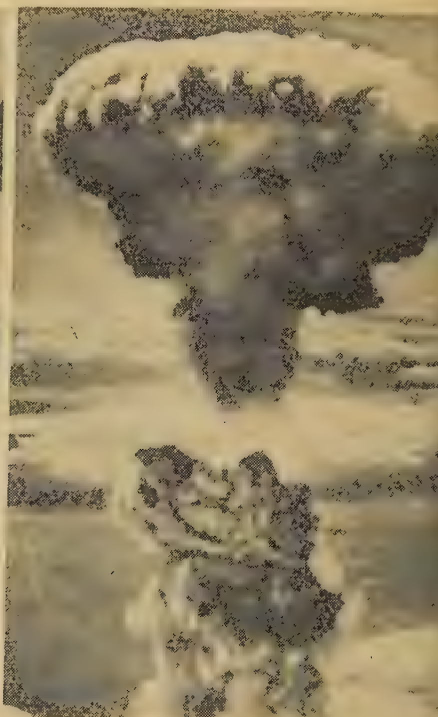
（次回は「続・男と女」）

れないところからいかなることが結果するでしょうか。それは、〈他者受容〉がなされなくなるということです。たとえば、他者の幸福をほんとうに喜べない人間が結果するのであります。わたしの場合など、同僚の頭のいい連中が留学などいたします。彼が「ハーバード大学へ行ってから、フランスのソルボンヌで勉強する」などと言いますと、表面は「おめでとう」などと答えて握手したりいたしておりますが、どうも腹の中がおだやかでなくなる。「畜生！」などと思うのであります。ニーチェの『ツアラツストはかく語りぬ』の始めに、ツアラツストラが生の充実を象徴する太陽に向かって、「こよなく大いなる幸福をも妬みなく眺め得る、汝静かなる目よ、われを祝福せよ！」と呼びかける個所がありますが、自己をほんとうに深く肯定・受容していない者は、他者の幸福を妬みのない静かな目で見ることができないのです。他者の存在の独自性を受け容れ、それに対して心からの尊敬をもって接するが、そのために自己の独自性に対する誇りはいささかも傷つけられることがないというふうには、なかなかいかないのであります。

〈他者受容〉ということはまた、自己と他者との間に真に信頼と交わりの成立していることを意味します。ですからその反対に自己受容、即他者受容がなされていない所には、自己の存在に対する否定と疑いがそのまま他者に反映し、他者を信頼することができなくなってしまいます。そのいい例はやはりあの一郎です。彼はその間に子供まである妻の直がどうしても信じられません。だれもいない所へ弟を呼び出して、「二郎、おれはお前を信用している。お前の潔白なことはすでにお前の言語が証明している。それだから打ち明けるが、実はお前に直の節操を試してもらいたいのだ」とまじめに頼み、びっくりしてしまった二郎が相手にしないと、「もしお前がおれの頼みを聞いてくれなければ、おれは生涯お前を疑ぐるよ」などと言ってしまうのであります。このような一郎の気持ちをよく表わしたのは、二郎の友だちの三沢にからむ次のような話です。三沢の父が知人の娘をある所に嫁がせたことがあるのですが、不幸にもその娘さんが複雑な理由のために夫の家を出ることになりました。三沢の父は仲人という義理あいからその娘さんを預ったのですが、あまり心配したためか、彼女は少し精神に異常を呈しました。もっともちょっと見ただけではそれがわからない程度のものではありました。ところがその娘さんが、三沢が外出するときっと玄関まで送ってきて、必ず、早く帰って来てちょうだいね、と言うのです。やがて、その娘さんは病院にはいって死ぬのですが、この話を二郎が兄にすると、すでにHさんから聞いていたと言って、一郎はそれをこんなふうに解説するのです。あの娘さんはせんの夫に対して言いたかったことを、頭が変になったために三沢に言うようになった、というのでなく、卒直に三沢が好きになったためだと自分は解釈する。人間はふつうの場合には世間の手前とか義理とかで、いくら言いたくても言えないことがたくさんあるが、精神病になった結果、あの娘さんははっきりその気持ちを言うことができたのだ。そうするとその娘の三沢に言ったことばは、われわれが口にするいい加減なあいさつよりもはるかに誠のこもった純粋なものだ、と。そしてそのあとで、「ああ、女も気狂いにして見なくちゃ、本体はとうていわからないのかな」と言って彼は苦しい溜息を洩すのです。一郎のように、自己を真実に肯定・受容できない場合、それを突き詰めると、このように気狂いにでもしなければ他者の本体は知り得ないのではないか、という疑惑に苦しむようになってしまいます。親切な同僚のHさんに対しても、「君の心と僕の心とは一体どこまで通じていて、どこから離れているのだろう」と疑い、ドイツ語で Einsamkeit, du meine Heimat Einsamkeit！(孤独なるものよ、汝

わたしは今も戸をたたく

—原爆で死んだ一少女の記録—



静かなおとずれ

うだるような暑さの一日が終って、涼しい夕風が立つひととき　たそがれが音もなく夜へ移行するほんの短い間、ふと途切れたような静けさがあたりにただよう　そんなひとときが、この町のどの人にもあったのだ
西空が、まぶしく、金色にきらめいて、豆腐屋の笛の音が、ついいましがた遠ざかったばかりの静かな一日の終り……だれもが、自分の帰って行く家庭を想う、平和なひととき……
ふと、窓下を、工場帰りの若者や女工たちが、声をそろえてうたいながら、サンダルの音もまちまちに通りすぎる

開けてちょうだい　たたくのはあたし
あっちの戸　こっちの戸　あたしはたたくの
こわがらないで　見えないあたしを
だれにも見えない死んだ女の子を

あたしは死んだの　あのヒロシマで
あのヒロシマで　十年前に
あのときも七つ　いまでも七つ
死んだ子はけっして大きくならないの

炎がのんだの　あたしの髪の毛を
あたしの両手を　あたしのひとみを
あたしのからだはひとつかみの灰
冷たい風にさらわれてった灰

レジャーブーム

外国語に弱いのは日本人の通例です。早い話がこの「現代のカルテ」編集子は診断書とかくよりしゃれていると思っているのでしょう。かの高木幹太氏も語源はいかになどとふんだんに、あちらのことばを駆使して、読者諸兄姉をうっとりさせていることは、先刻ご承知のところ。このレジャーブームにしたところで、弱みにつけこんだマスコミさんのいたずらに、ついうかうかと乗せられたというわけです。

「火のないところに煙は立たぬ」で、全般的に労働者の所得水準は上がっていますし、労働時間の短縮、週二日制の実施へと、だんだん労働条件がよくなりつつあることは事実です。しかしそれを、すぐさまレジャーブームだ！というにはむりがあると思います。

「手本は二宮金次郎」式に、勤勉貯蓄した明治生まれの人は「生活を苦しむ」ことは知っていても「楽しむ」ことは不得手だったようで、教会で親睦会をするという、そのことだけで眉をひそめた人たちのことなど、いまはウソのような話です。

ところで、労働している時間は、いわばしばられていて、自分の自由になりませんが、いざ仕事以外の時間だ、休みだとなると、自由になるだけ、どうして時間を過ごしていいかわからないという面が出てきます。仕方なくテレビをみる、パチンコをする、ゴロ寝をする、ということになります。労組でいえば、「賃上げには熱心だが、それをどう使うかには無関心」という結果を生みます。自分はなんら主体的に判断せずとも、代わりにテレビが考えてくれるということになります。「レジャーブーム」はそのすきに割りこんで、いわば生活の主人公におさまろうとするのです。レジャーの魔力とでもいうか、感覚的なものだけに、ダイヤルをまわすのは自分だ、スイッチを切るのは自分なのだと、はじめは言いきかせていても、ついずるずると最後まで、テレビを見てしまう。一ぱいの生ビールぐらいなら、活力をえていいのが、給料袋をはたいてぐでんぐでんになってしまう、という具合に、働いたあとの遊びのはずが、働くために遊ぶのか、遊ぶために働くのか、わけがわからなくなってしまうのです。しかもこの不均衡は、生産が上がれば、それだけ買ってもらわねばならず、そのためには広告もうんとしよう、賃金も多少は上げよう、ということで消費ブーム、レジャーブームは、どんどんあおられ作られてゆく傾向にあります。

しかも作られるレジャーブームに乗せられて、浮き浮きしている間に、政治暴力活動防止法や皇室ぶじょく罪などが、まかりとおろうというからくりを見きわめなければなりません。つまりレジャーブームは、ひとつには「生活を楽しくする」というプラスの面とともに、もう一面、自分を見失ってしまうような傾向、それが、政治的社会的な関心をそらしてゆくというマイナスの面を含んでいるのです。

東北の農村で「都会の人間はヒマで困っているらしい」と言ったという話を新聞で読みました。実際そうも言いたくなるでしょう。けれども、ゴールデン・ウィークすら休みもとれず、汗水流して働いているたくさんの人たちのことを思うとき、もういいかげんにしてくれと、言いたくなります。作られたブームに乗せられることなく、創造的なものを、みなの手で作り出してゆくような、家族の全部が、働く者すべてが、「生活を楽しむ」方向へと、力をあわせることこそいま必要なことだと思うのです。

（伊藤義清・曳舟教会牧師・「働く人」編集主任）

ようになる。

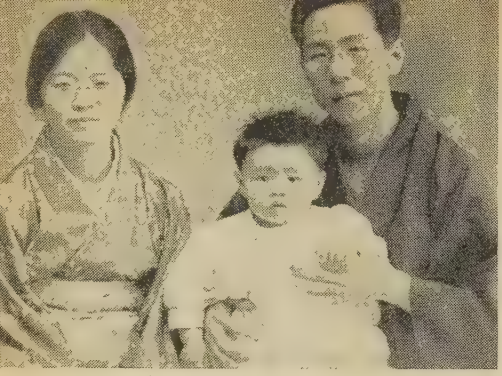
「うちね、庶務がとてもじょうずだって、視察にきた上司の人に、監督さんが報告されたのよ」

お下げの髪にきりりとしめた日の丸の鉢巻をときながら、帰宅してはそんなことも明るく母親につげる佑子さんだった。

とは言え、それは、女の子にとっては、肉体的にはかなりきびしい仕事だ。だから、まもなくこの軍需工場に働く学生の一部とともに、佑子さんが鉄道局審査課という事務系の仕事に移行されたことは、母親には少なからぬよろこびだったらしい。

『職場の人たちからも、稚いままに無邪気なままに温く交わっていただき、人なつっこい人として可愛がっていただいたということは、ほんとうにしあわせなことでした。……

「自分は長女なのに、ほかの人からはひとり



（両親とともに，2才の佑子さん）

っ子か末っ子にしか見られないのよ」などと折々に話していましたが、なにかにつけて学びとろうとしたり教えてもらおうとする気持ちは、上の人に甘える気持ちにもつながっていたようです。その反面、ダリヤが咲いた、ライラックが咲いた、とその折々の花を持って行って、職場を飾っていたこともありましたし、「みんなお湯だけを飲んでいるから」とお昼のためにお茶を持って行ったりしました。あまり世話をしすぎるので、こちらから「出しゃばらないように、おせっかいにならないように」と注意をしなければならないほどでした。ドッジボールを教えてもらって運動が好きになったり、わざわざ赤い手袋なども、編んでいただいたりしたこともありました。古い松江時代の友だちとあらためて手紙の往復をはじめ、「激しい時局の中で、しっかり生きぬきましょう」と励ましあったのもこのころでした。』

母親のわくりさんの思い出である。

激しい時局——まさしく、そんな状況を生きぬこうとする佑子さんには、少女時代の甘さもはなやかさもなかった。ただ、モンペ姿ながら、白いハンカチをいつも持っていといった小さな身だしなみが、清楚なおとめらしさを感じさせたし、これから花開こうとするゆたかな未来をふと匂わせるのだった。

「わあ、姉ちゃんたら、おしゃれだな、おしゃれだな」

小学四年と五年の下の弟さんが、たいせつにしている白いセーラーのネクタイや、ハンカチめがけて汗えかかる風景も、しかし、まもなく中断されねばならなかった。そのふたりの弟さん、更さんと招さんは、広島県内のあるいなかの村に疎開したからだ。

「これで佑子もほっとした……」

だが、自分は最後までがんばると口ぐせのように言っていた佑子さんは、さびしさを隠して、すぐ下の弟である揚さんと両親とともに明るく暮そうとつとめるのだった。昭和二〇年の六月だった。

「姉貴のやつ、めっきり字がうまくなったなァ……」

すぐ下の弟、揚さんも中学にはいって、学徒動員にかり出されていたが、警報下、夜遅く帰っては、燈下管制の暗い明りの下で、なにか一心にものを書いている姉佑子さんのひたむきな姿に、ふと何かを感ずるのだった。

そして、その月のうちに、佑子さんが動員されている市外字品の鉄道局審査課は、空襲を避けて市内流川の広島女学院内に移った。危いとみられた字品方面は焼け残り、わざわざ移転した流川が、爆心地のすぐ近くになろうとは、そのころだれが考えたろう——

母わくりさんの、最後の思い出を聞こう。

『八月六日の前夜は、習日の大破局を露知らず、母と娘のたのしい一夜になりました。それがまるで、ウソのようにしんとした思い出となってよみがえってきます。

それまでほとんど外出することのなかった

……

あ——あれは、トルコの愛国と熱血の革命詩人、ナジム・ヒクメットの詩だ。それに心にしみてくるようなメロディーをつけて、あの若者たちはうたっているのだ。

真夏の煮えるような労働に耐えて、一日働きぬいた若者たちが、〝うたごえ〟で習いおぼえたのだろうその歌を、いま、声を合わせてうたいながら、元気に家路をたどるのだ。油に汚れた作業服を脱ぎ、ボロシャツやおとめらしい白いブラウスに着換えた彼らや彼女たちの行く手には、西空にきらめくあの夕陽のように明るい未来が、美しく輝いているようだ。未来をひかえた若者たちの幸福な匂い——

だが、にぎやかに、たのしげに遠ざかって行った若者たちが、たそがれの空気のなかに残していった、かすかな感慨……それは、あれから一六年のいまとなって、まだなおりきらぬ傷のように、突然痛みながらよみがえってくる——

あたしは死んだの　あのヒロシマで
あのヒロシマで　十年前に
あのときも七つ　いまでも七つ
死んだ子はけっして大きくならないの

一六年たったいまも、死んだ女の子は、一六年前の年令のままで、すぎ去った記憶のなかをおとずれてくる

その子を知っている人は少ない。なぜなら、ふつうの少女にすぎなかったから。隣り近所の人、女学校の友だちよりほか、その子を知る人はいないから。そして、その身のまわりのかぎられた人びとも、ほとんど、あの日の青白い閃光に燃えつきてしまって、いまはひとりもいないから。

しかし、だれが知らなくても、その子はいまも戸をたたく——

開けてちょうだい　たたくのはあたし……

残された歩み

すばらしい秋日和だ。はりめぐらされた五色のテープが、はたはたとみのりの風にゆれて、生徒たちがとびはね喚声をあげるにぎやかさが、遠くまでひびいてゆく。朝からの運動会は、たのしく順調に進んで、ちょうど小学一年生の〝持てあまし競争〟がはじまったところだ。小さい体に、バケツやホーキなどの大きな台所用品を二、三種類かかえて走るかけっこである。バケツといっしょにみごとにひっくり返る男の子、ホーキが隣りの子にひっかかってストップしてしまう女の子、一年生らしく、テンヤワンヤのにぎやかさ。爆笑が校庭いっぱいにどよめく。

バケツやホーキや洗面器が、それでも次々にゴールインして、まわりに走る者がいなくなった短いコースを、まだ小さな足でヨチヨチ走っている女の子がある　文字通り、道具を持てあまして、ほおをふくらませながら、フーフー走っている女の子——だれもいなくて、広くなってしまったコースを、自分だけという気持ちがあるのか、早くビリの競走から解放されたいのか、緊張した顔で、それでもいっしょうけんめい走っている女の子。

「まあ、えらいわねえ、四竈さんじゃないの、あの子」

「あら、ほんと、佑子さんよ」

父兄や生徒たちのささやきがかわされるなかを、その女の子は、とうとう最後まで根気よく走りぬいてしまった。

四竈佑子（しかま・ゆうこ）さんは、体操が不得意、だが、それもほほえましいエピソードで、明るくたのしい小学生時代が送られたことは、どこの子とも同じだった。

そして、もうわたしたちの前には、そのような六年を終えて、広島女学院中等部に進んだ、若々しい少女の佑子さんがいる。白いネクタイにアイロンをかけたり、スカートの折目をつけたり、いつも身じまいをきれいに、晴れやかな顔で通学する佑子さんである。このころが、なんといってもいちばん楽しかったのでしょうと、佑子さんのおかあさんはあとで述懐するのだが……

しかし、時は昭和一九年、すべてのものが一様に、切迫した状況に追いこまれて行く戦時下の国民生活だった。セーラー服はいつかモンペ姿に着換えられ、佑子さんは学徒動員に組みこまれて、市内の軍需工場に出勤する

（爆心地――この河に数千の死体が浮かんだ）

し、それはウソだ。すべてが生命のいとなみを停止したかのように静かだった。人間も草木も、すべてが有史以前の廃墟に帰ったかのように、あたりは不気味に静かだった。

やがて、あちこちで黒煙とともに静かに火の手があがった。倒壊した廃墟は、じつに自然に燃え出した。そのころから、人々がむくむくと起きはじめた。焦げるように熱い道路を、異形の者たちがゾロゾロと列をなした。

全身がやけどでひきつり、両腕をだらりと前にさし出したまま、上げもできず下げもできずに歩いて行く半裸の男女、顔が二倍もふくれあがり、目はふくれ上がった肉と肉の間に埋もれて見えなくなった若い女、また、たえまなく流れる血でびっしょりと全身をぬらした人――うめき声も上げず、葬列のように静かに続くこの人たちの足もとには、できたての銅像のように、てらてらと黒灰色に焼けた無数の死体がころがっている。それは、多くが四肢をスルメのようにつっぱり、腹部を大きくふくらませているのだ。そんなある丸みをおびた女の死体の横には、焦げた棒クイのように小さな赤ん坊が、黒いかたまりとなって置かれている。

異形の群は、はてしなく廃墟のなかから生み出されて、市内各所を流れる川に向かって、のたうちながら行進する。原子雲が消え、立ちのぼる黒煙を通して、あぶり立てるように太陽が照りつける川原に、人々は続々とたどりつく。

「水、水がほしい……」

広い川原一面、人間ともつかない人々の群でいっぱいになる。岸辺まではって行き、水面に顔を寄せると、そのままがっくりとこときれる少年――

「やけどに水を飲むと死ぬぞォ」

どこからともなく、そんな叫びがあがる。だが、どの人も、すべて全身をムラなく焼かれているのだ。巨大な灰色の群――

一郎氏は、奇蹟的に上半身の擦過傷だけだった。そして、人々が市外へ市外へと逃げるなかを、ひとり市内鷹の橋の教会にたどりついたときは、会堂、牧師館は倒壊し、すでに火に包まれていた。

〈家内は……それに、佑子はどうしたか、揚も無事だろうか……〉

妻とわが子を求めて、地獄のような市中をさまよう一郎氏は、翌日正午、頭部に負傷した夫人わくりさんと、さらに夕方、同じく頭部に深い傷を負った長男揚さんと出会った。

しかし、長女佑子さんの消息が知れない。

燃える火の照り返しで、街も川原も真赤な夜がき、また煮えるような快晴の朝がきた。川原の熱砂の上に横たわる死体はいよいよ多くなり、腐臭がただよった。どこで生きていたのか、ハエが寄ってきて、皮膚のない死体の腐肉をなめまわした。

黒いうわさ

三日たち、四日すぎた。

何一〇万という死体が、身元もわからぬまま数ヵ所にまとめられて焼かれはじめた。川原の熱い白砂に横たわる老若男女、子供にいたるまで、死体には白いウジがうごめいた。

五日め、母わくりさんの一念が、ついに佑子さんを発見した。死んではいなかった。

「忌中」と書かれた佑子さんの友だちの家へわくりさんがたずね、「ごめんください」と二度ばかり声をかけると、「あッ、おかあちゃ

（12才のとき，母と弟さんたちと）

母は、佑子をつれて、あの子のすきな映画を見に行きました。母と出かけるということがどんなにうれしかったことでありましょう。並んで歩くときには肩かけをしました。「なんですね、生意気に肩かけなんかをおかあさんにして」と怒ったふりをして言うと、「だって、おかあちゃんは佑子より小さくてちょうどいいんだもの」と言って、母を苦笑させました。館内では、例によって親切な佑子は、そばにきたひとりの若い兵隊さんに、扇子の風を静かに送っていました。そのためだったのでしょう、その兵隊さんは、当時としてはめずらしいアメ玉の袋を出してすすめてくれました。そのときは、はずかしがっていた佑子も、帰り道では「更ちゃんや招ちゃんへの荷物のなかにもいれてあげましょうね」と言いながら、「ね、ね、もう一つね」と、そろりそろり口にはおばるのでした。建物疎開のため広々となっていましたが、静かな夜の広島の街をみることも、そして、ふたりで話し合いながら歩いたことも、これが最後でした。」

青草が燃える！

八月六日月曜朝、快晴、焼けるような暑さの一日のはじまりだった。

夜あけ、発令されていた空襲警報が解除になり、七時すぎには警戒警報も解かれて、人人は、いつものように職場や学校に急いでいた。主婦は、朝食のあと片づけや洗いものをしていた。

B29が一機、青く晴れ上がった市外上空に銀色の機体をきらめかせながら浮かんだ。エンジンを止め、爆音を消すと、そのまますべるように市内上空に侵入した——

「あ、あの飛行機からなにか落ちるよ」

ひとりの主婦が、洗濯の途中、ふと空を見て言った。銀色の機体よりさらに小さく、なにか静かに降りてくる。落下傘のように、じつに静かに降りてくる——

高度六〇〇〇メートル、午前八時一五分

突然、真青な閃光が広島全市をおおった。

そのとき、広島教会牧師四竈一郎氏は、爆心地からほぼ二キロ半へだたる郊外に近い丘の中腹にいた。そこは、逓信講習所の二階建校舎だった。毎月曜午前八時からの精神講話を依託されて、一郎氏はいつものように出かけてきていた。そして、階下職員室の、市内の大半が眺望できる窓際で、氏はその閃光を見た。瞬間、地上すれすれいっぱいにおおった油の燃えるような赤い火の海を見た、と思ったとき、天地をゆるがすような大音響を聞いて、氏は倒壊した校舎の下になっていた。職員室の窓下で、上半身裸のままで草むしりをしていた小使いは、背中が一面、ペロリと皮がむけてしまっていた。

市内を歩いていたある青年は、真上からさあッと青い閃光をあびた。煮え立った鉛が、とろとろと全身にからみついたような衝撃的な熱気を感じたと思った瞬間、着ていた国民服が燃えちぎれながら下に落ちた。そして、ちりちりとちぢれた全身の皮膚が、ボロのようにまくれてたれ下がった。あっというまのできごとだった。そして、青年がふと気がつくと、足もとの青草が、ボウボウ白い炎を放って燃えていた。青草が燃える……紙のように、青草が燃える……ばっくりと全身の皮膚をはぎ取られた青年は、一面の毛細管からにじみ出てくる血と、油のような体液のしたたりを感じながら、虚脱したようにそれを見つめていた。

市内の光景は一変していた。すべてが地面に倒れ伏し、電信柱は、立ったままで黒く炭化していた。そして、しんとして音もなかった。新聞その他の記事は、「一瞬のうちに阿鼻叫喚の巷と化した」とのちに書いた。しか

没後数日——農家の主婦（後列右）とともに遺骨をかこんで……

「苦しいわ、これでも、ずいぶんがまんしてるのよ」

床の上で反転する佑子さんの体は、四〇度の熱で赤く燃え、頭部の裂傷は化膿して、黄色い膿をリバノール液で拭きとるだけが勢いっぱいだった。隣村から呼ばれた医師も、座敷に上がる早々、佑子さんの痛ぐきが紫色に変色しているのを見て、注射一本しただけで気の毒そうに帰って行った。

九月一日、頭髪が抜けはじめ、体のあちこちに紫色の斑点が出た。一郎氏は子守歌をうたい、赤ん坊や少女時代のたのしかった思い出を静かに聞かせるのだった。

「佑子がもし神さまのところへ召されてしまって、おとうちゃんと神さまのために働くことができなかったら、佑子の分も働いてね」

そうぽつりと言って、佑子さんは一郎氏を涙ぐませるのだった。あるいは、ふと不安そうな目をして、佑子さんはたずねるのだった。

「佑子は自分のためばかりお祈りをして、広島のほかのたくさんのお気の毒な人たちのためにお祈りしなくても、神さまがゆるしてくださるでしょうか……」

また、母のわくりさんに対しては、つぶやくようにこう言った。

「おかあちゃんのお手伝いをよくしないで、佑子は親不幸でした……おかあちゃん、佑子はよく口答えしてすみませんでした」

九月二日、家族そろって佑子さんの床をかこみ、家庭礼拝を守り、佑子さん愛唱の讃美歌をうたった。

午後、S牧師が来訪、佑子さんの信仰告白式をしてくれた。生と死の絶対の谷間にあって、いま佑子さんは、はっきりとイエス・キリストを信ずる心を言いあらわすのだった。

《わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信ずる者は、たとい、死んでも生きる》（ヨハネによる福音書一一章二四節）

いまは、佑子さんの顔に、静かな微笑がのぼっていた。そして、ほほえみのうちに、こんなふうに言うのだった。

「佑子は神さまのところへ先に行って、みんなのために場所をとっててあげます」

四日、キリストが、最後の晩餐のとき行なったように、家族は佑子さんを囲んで、麦粉で焼いたパンと、トマト汁の代用ブドウ酒で最後の聖餐式をした。キリストの名によって分けられるそのトマト汁が、六日間なにもはいらない佑子さんののどを、スプーンで二さじ、静かにうるおして通った。

「神さま、佑子は苦しい病気になっていますが、もし聖旨ならば苦しみを少なくしてください。そして佑子が元気になるか、召されるのか、どっちかにしてください。アーメン」

それは、苦痛のなかにも、もはや苦痛をこえた佑子さんの口を通して出た祈りだった。

静かな夜がきた。わくりさんに看病されていた佑子さんが突然言った。

「佑子ーッ、佑子ーッと呼ぶ大きな声が聞こえるのよ」

「それは、だれの声なの？」

一郎氏とわくりさんがかわるがわるたずねても、ただ目を大きく見開いて上のほうを見ている佑子さんだった。

（どこに叫ぶ？　死んだ者は帰らない）

ん」、そう言って泣きながらとび出してきた女の子、それが頭にぐるぐると繃帯を巻いた佑子さんだった。

「はじめの呼び声では、どうしてもおかあちゃんとは信じられないで、二度目の呼び声で目をあけたら、玄関におかあちゃんが……」

泣きじゃくる佑子さんは、ひん死の重傷と高熱で、生死の間をさ迷ったこの五日間、消息不明の両親と揚さんの安否を気づかいながら、高まる不安と絶望に必死にたたかってきたのだった。それなのに、今は、自分の傷も痛みも忘れたかのように、「おとうちゃんは？　揚ちゃんは？」と、もどかしそうに父と弟を案ずる佑子さんだった。

「揚ちゃんは、わたしといっしょにあんたをさがしに、すぐそこまできているよ」

涙ぐむわくりさんのことばに、よろめきながら外へ迎えに出ようとした佑子さんに、馳けつけた揚さんも、すがりついて泣き出すのだった。

佑子さんが、動員先でいっしょだった友人の家に、重傷の身を引きずって逃れてきたのも、「傷は深いとはいえ、まだいのちある自分が倒れたら、疎開しているふたりの弟はどうなるか」という、すでに両親と揚さんの死を覚悟した、姉としての一念だった。多量の出血のため、目がくらんではよろめくたび、「ふたりの弟のために母代わりにならなければ」との覚悟を、何度もかみしめてはがんばったという。

佑子さんの傷は、頭蓋骨までざっくりとえぐる三日月型の深い裂傷に、左腕にきざまれた長い切傷と右ほおの切傷だった。しかし、ともあれ生きていたのだ。廃墟に顔を合わす四人のほおはいつまでもぬれた。

八月一〇日、四人は、すでに佑子さんと揚さんの弟の、更さん招さんのふたりが疎開している双三郡和田村に避難した。広島市から二時間半ほどのそこには、山もあり田もあった。灰色ばかりを見続けた、五日間のあとでは、それらのみどりは、目にしみるように美しかった。田中を流れる小川には、ハエという小魚さえ元気に泳いでいた。

傷のためには薬、栄養のためには食料、しかし、そのどれにもこと欠く貧しいくらしだった。だが、ある農家の未亡人の好意で借り受けた別棟の養蚕室で、親子六人、傷と疲労をいたわり合う毎日は、この家に久しぶりにもどってきた平和だった。暑さの去った夕方など、六人で合唱する讃美歌の数々も、なにかめずらしかった。そして、そのような団らんの背後には、一度、死に近い経験をした佑子さんの、生きながらえたゆえにかえってあつく燃える肉身への愛が、美しい心づかいとなって輝いていた。

しかし——一週間もたたないうちだった。市内の焼跡整理に出て行った近郷の消防団員が、村へ帰ると、二、三日してバタバタ死んでいくというふしぎなことが起こった。

「ピカに会った者は、注射も薬もきかないでかならず死ぬそうや……」

そんなささやきが、人々の口から口へ流れた。

もしやという暗い思いを抱きながらも、明るく教会再建の話などにふける一郎氏やわくりさんだったが……二〇日をすぎると、村に避難している被災者が、次々と死んだ。頭髪が、毛根もつけないで束になって抜け、全身に赤・青・紫などの斑点を生み、歯ぐきその他からの出血は、すべて赤くはなく、どろどろと腐っており、高熱のまま絶命する、共通した原爆症——。戦争は数日前に終っていたのだった。

佑子を呼ぶ声

八月三〇日、西日の照りつけるむし暑い午後四時ごろだった。前夜から妙なけだるさを感じていた佑子さんの体を、突然高熱が襲った。原爆症のもたらす疲労感と脱力感は、寝ても起きてもいられぬほど深い。

本を読みましょう

——小説・入門・随筆など——

「わたしは興味深く読みました。あなたもお読みになりませんか」

「わたしは、流暢さにひっぱられて読み終りました。でもはてなともう一度ゆっくり読んでみようと思います。あなたもおっくうがらずに読んでみてください」

「わたしは多く教えられました。ますます読書の魅力にひかれました。あなたにもきっとよい導きになります」

「わたしはこの本できちんとした勉強について考えさせられました。あなたも学ぶことができます」

いまおすすめする四冊の本をこんなふうに申し上げられると思うのです。この四冊の組合せは内容のためではなく、たぶん全部が新しく売り出されたものだからでしょう。

椎名麟三さんの小説『長い谷間』は（講談社・三四〇円）朝日新聞（六月二三日読書欄）に紹介されました。「世界の終末というテーマは文学には交通止め、つまりタブーになっているものの一つで、この交通止めへの挑戦である」と著者のことばがありました。「救われない人間のものうい気分は出ているが「私」の「世界の終末」という恐怖がどういうところから生まれたかの説明がなく、読むものがそれにひっかかって、実感がとぼしい」と批評されていました。「この地球にもやがて終末がやって来るという考え」にとりつかれておそろしくて不眠症になっている「私」。その「私」は二六才のスタンドバーのバーテンです。「私」をめぐる生活は救いを求めても救いのない「長い谷間」である、という筋です。この救われない「私」に「救われているクリスチャン」植田敬子という四十すぎの未亡人である「問題の女性」が対照的に描かれています。

椎名さんはいわゆる「牧師」やいわゆる「クリスチャン」に小説では溜飲をさげておられる。「なぜうちの先生はこの本を「読みましょう」と言われるのかとわたしの教会のご老人には叱られそうです。本誌に目下連載中の「夜警番の日記」のほうに期待をもっています。先月推されている「私の人生手帖」はすなおにすすめられます。

『救済の論理』（教文館・一六〇円）北森先生の旧著が新装で出されました。「新鮮な形の入門書」とありますが、北森流の流暢な論理に知らないうちにひっぱられてしまいます。第一部「神の愛」「神の痛み」「神の痛みに基礎づけられた愛」が救済の「前提」「現実」「成就」として理論づけられています。入門書とはいっても大学生会のテキストにいかがでしょう。第二部はキリスト教講座ふう「福音の性格」

『真実を追って——女教師のノート』（教団女性シリーズ・一六〇円）著者の恵泉女学園短大文科教授大塚野百合さんはいまの若い「教会婦人」たちの中の一等女性ではないでしょうか。「生活の中で感じている問題に新らしいひかりと、答えをあたえてくれた書物との出会い」を書いたとあります。ひとりのすぐれたクリスチャン女性の生活と思想の発展が「よき書物」によって導かれたことの見本のようです。この本こそ「本を読みましょう」という本です。「問題の書」についてもききたいと思いました。

『教師の初歩』（キーナート著・コンコーディア社版一五〇円）熱心に勉強する教師に親切な本です。練習問題や研究問題がついていて教科書ふうです。「教会学校教育シリーズ」の四巻です。第三章に教師の成長の機会について「読書と研究」のすすめがあります。よい本を、じょうずに読みたいものです。

（大倉幾代・弓町本郷教会牧師）

（幸福なるかな　平和　ならしむる者）

「それは、神さまがお呼びになる声なんだよ」

一郎氏が静かに言って、佑子さんの体をひざの上に抱き上げた。

「佑子ちゃん、神さまのお顔が見えるか、しっかりと神さまのお顔を見ているんだよ。イエスさまがお迎えにいらっしゃるから」

父の胸に頭をすりつけて、佑子さんは、うん、うん、とばかりうなずく。

「イエスさまのお顔が見えるか、イエスさまにお迎えしていただくんですよ」

佑子さんは、じっと目をすえて上のほうを見つめている。……そして、静かな臨終がきた。

戦争は終っても、なお戦争のため死んで行く、昭和二十年九月四日午後一時五七分、享年一七才だった。

この生は消えず

これは、どこまでも事実である。たいせつなことは、ここにも生きる歴史があるということだ。人間であるかぎり、どの人にも歴史がある。そして、それは、どんな力も消すことはできないし、葬ることもできないということだ。なればこそ、人間の歴史はどこまでも尊い。

当時一四才の中学生だった弟揚さんは、いまは二九才。姉が生きていれば、いまはどこかの家庭の主婦になってるでしょうが……と遠く目を細めて語る。だが、「姉を思うことは、その死を超えゆく者たらざるをえない」と言う揚さんは、二三年信仰告白をし、広島大理学部を出たのち、神学校へ行き、進んで福音の伝道者となった。その下のふたりの弟さん、更さん招さんも、りっぱなキリスト者として成人した。いずれも共通しているのは佑子さんの死に直しての信仰態度が強い無言の感化をおよぼしているということだ。

「両親はじめ、自分たちのその後の歩みをふり返ってみても、姉は、ひとりひとりの生きかたの捨て石になってくれたと思いますね……」

いまは牧師として生きる揚さんは、感慨深げにそう言う。父の一郎氏もそうだ。氏は、広島教会牧師のかたわら、被爆者救援の会にあって積極的に奉仕している。この六月にはチェコのプラーグで開かれたキリスト者平和会議に、氏は広島平和奉仕会代表として渡欧した。揚さんは、また言うのだ。

「父のそういう動きは、すべて、あのできごとの実感にあるので、切実なんです」

戸をたたくのはあたしあたし
みなさん署名をどうぞしてちょうだい
炎が子どもを焼かないように
あまいあめ玉をしゃぶれるように

ヒクメットのこの詩を、一郎氏も心のなかで聞いているのだろうか。

原水爆禁止世界大会が、まためぐってきた。八月は、今後いつまでもめぐってこよう。

「いまはもう、ただ自分の胸だけにおさめまして……」

悲しみは変わらないのか、母のわくりさんがぽつりと言って、青く晴れ上がった広島の空に目をやった。

市内牛田山のキリスト教墓地にある、佑子さんの墓石に、きょうも夏の日が静かにふりそそぐ——

この歴史を消すことはできない、人間をほろぼすことはできない……≪彼は死んだが、信仰によってなお語っている≫（新約聖書ヘブル人への手紙一一章四節）

きざまれた墓碑銘は、キリストのことばがただ二行

幸福（さいわい）なるかな
　平和
ならしむる者

た。やがて続くはずのない餓えたおおかみのような生活につかれ、旅の生活にも行きづまり、また家に金をむさぼりに帰って来ましたが、心の中に虚無の風が吹きすさび、寂しさをまぎらす酒に酔いしれていました。

生活も壁にぶつかり自己の愚かしさにも気がつき、そのころから何度も自覚し、まじめになろうと、もがき苦しみましたが、結局だめで、人をうらみ、自分は心の寂しさに泣きました。

こんな心理にあるころ、近所のN薬局のご夫婦が、傷心にもめげず、静かに暮しておられるのが目に映り、キリスト教会に気づきました。さっそく教会のI牧師を尋ねて行き、神があるならば自分の心が神といった暴言をはきましたが、最後までわたしの話を聞いてくださったI牧師は、帰るとき、「またおいで」とやさしくひと言言われました。人間人格の品性に格段の相違を知り、恥ずかしく、またくやしく思いました。

こうして三一年九月、好奇心とともにまじめになろうと求道生活にはいりました。その間一ヵ月ぐらい先生宅にとまり込み、キリスト中心の家庭生活の良さも見て、徐々に落着くわたしを見て、母も求道をはじめました。

三ヵ月目の一二月二日の夜、無理に求めて夢中で洗礼を受けました。そのときの母の祈りにびっくりいたしました、母もキリストを信ずる者となっていたのです。家庭内は信仰においてま二つに分かれました。父が母をさんざん責めましたが、負けずにがんばりました。家計は日々困窮してきますが、どうすることもできません。以前の事故に対し運転資格取消処分を、身から出た錆として受け、母と相談の上、三二年二月教会の同信の友に送られ、生活のため、今度こそはと自覚し聖書を持って出かせぎに出発しました。仕事も電工、鉄工、ペンキ屋と働きましたが、教会生活のような交わりもなく、聖書も読めず、下宿、飯場ではどうにもならず、自覚も薄れ、神を知りつつ罪を重ねて、その苦しさのため逆に聖書をのろい神から去ろうとつとめました。

しかし、心の底になにかささやきが聞こえてくるのをどうすることもできぬまま、三三年一一月、父が最後の金をしぼって掘っている鉱山に行き、親不孝の償いをしようと考え地の底で死にもの狂いで働きましたが、なにも出ないのです。心はますます重苦しくなるばかり、ダイナマイトに火を点じるとき、銅、鉄、鉛なんでも良いから出てくれ、と祈ってもなにも出ない、神に愛のかけらもあるものか、死だ、死だ、絶望だ、暗い穴の中でこの世は死の船だと叫び泣きました。念願の事業も失敗し、三四年四月、母だけで細々守っていた家に帰ると、その家も連日債権者にあけ渡しを迫られ、身の置き場所もなく、心の重荷に耐え切れず世をのろい続けました。教会や信者までも批判し、近隣教会もそういった意味であら探しに歩いていたころ、偶然、H教会の夏季修養会で、東京のS牧師の説教を聞き、新約聖書ピリピ書三章四節以下のパウロのことばにたたきつけられました。「律法による自分の義ではなく、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づく神からの義を受けて、キリストのうちに自分を見いだすためである」。

神よ不信仰でした、全く自己中心の愚か者はわたしでした、ルカ福音書一五章に書かれた放蕩息子のようにざんげいたしました。

こうして長年住みなれた家も追われましたが、現在の場所に移り、心気一転再び教会にかえり、心にかわきを覚え祈りのうちに過ごしているうちに、一一月一三日朝、歌った記憶のない讃美歌「二百七十番」とともに、信じて生きるさいわいを理くつでなくわからせていただき、心が喜びに燃え広がるようでした。でも貧乏はつらいです。けれどラジオもない家庭に、金で買えないキリストの声が聞こえますから希望がわきます。よろけつまずきつつもささえられて、立ちあがる力をキリストは与えてくださいますから感謝です。

ほんとうに愛する者を訓練される主のみむねを味わいつつ、世にある一信徒として一日をきざんでいます。

（山口県・下松愛隣教会員）

読者の証し

七転八倒の暗い道から

矢野　進

母と妹とわたしは農協の倉庫トタン屋根の一隅で、小さな酢店を営み妹を高校に行かしています。財産といえば古い三輪車一台、聖日と雨降りの日以外は、母もともにほこりにまみれて日毎の糧を求めて働いています。出発前天を仰ぎ母は必ず祈る、なんと祈るのか知りませんが、そしらぬ顔で発車、車を運転しつつうなずくのです、「神は愛なり」と。人生の安全運転は主イエスとともにあるときのみ。事実主に祈り求めるならば、聖書の力ある真理のみことばで示したもう。「たとい我れ死の陰の谷を歩むとも、わざわいを恐れじ」（旧約聖書詩篇第二三篇）

十年一昔、昭和二五年春、高校卒業と同時に、現在も営んでいる食酢製造業を父の跡継として手伝うことになりました。家は当時は山口県下でも業界の上位にあって、何不自由なく暮していました。自動車の運転資格も与えられ、車も買い、商売もうまいぐあいに発展して、同窓の友もうらやみ、町内の人もまじめな青年といってほめていました。一年は夢中で働き、二年、三年と横着もつのりはじめたところ、父に女性関係のあるのを知り心中怒り悩みました。酒の味も知り、友だちと飲みにも行くようになっていたやさきです。

二八年六月、突然、交通事故をおこしました。道路脇に静止していた馬が、用心してエンジンを止め通過する至近距離で、突然あばれ、ブレーキを踏む間もなく衝突して、後日屠殺しましたが、事故は事故ですから、警察当局に報告いたしましたら、とんだお笑い草で、無理に実地検証を願いましたが、白黒判定が出ないのです。馬方の家庭に同情し、見舞として全額保証いたしましたら、それを待っていたかのように、法外な運転停止二ヵ月の行政処分、納得できないので連日当局に尋ね、処置の説明を求めてもあいまいで、結局金を出したから罰を受けたのだといった返事を聞き、感情が一時に破裂するような気持ちでした。父に告げると権力と法の前には負けるが勝ちと言って相手にしません。

真実がほんとうにほしかった、極度の法の不信から自分なりの人生哲学めいたものをつくり、酒の酔いに力を借り、復讐しようと誓い、ただ酔うために酒を求めネオンの下をさ迷いはじめ、さっそく臨時雇いの運転手も助手台にのせて、昼間は無免許運転、しかも無謀なスピード違反で、警官にわざと見せつけの行動です。ある夜、ほろ酔いで「免許証かえせ」と当局に行き、若い警官をなぶることばを投げ、おこらして大乱闘になり、ブタ箱に投げ込まれ、以後急転直下暗黒の世界へ転落です。その中で一種の偽悪ぶる狂った生活がおもしろく、警官も町の不良も敬遠するほど狂気がつのりました。父はわが子の姿を見て叱責し、母も泣いて真人間になってくれとたのむけれど、ますます逆方向に転落、それに並行して家運も急降下、父は昔日の夢よもう一度と、一獲千金をねらい、鉱山に手を出し、競艇に大穴を求め、家は空虚そのもの、わたしの白かった免許証も、酒による無謀操縦で心とともに黒くなり、あるときはわざと予告して町の十字路で横転事故をおこしたりいたしました。母は新興宗教になにを求めてか、狂気のようにむさぼりつき、因縁よ因果よ去れと夢中です。家庭は冷たく、遊ぶに金なしでおもしろくなくなり、三〇年三月家出して、北は北海道、南は九州と流浪、その間にワイヤーに右腕をちぎられるような事故にもあいましたが、奇跡的に助かり、不死身とばかり、自己中心の城をつみあげていきまし

よって違い、一概に言うことはむずかしいですね。

しかし一般的に言って、初心の人の場合、青年会に対してなじみが薄いのですから、こちらで先方がもう十分に同化したと考えて、何気なくしゃべったことが、思わぬショックを与えることがよくあります。心理学でいうと、青年会にはいり切る、ということは、人が自己を青年会に同一視するということなのですが、それが古い会員と新しい会員との間にある程度のズレがあり、古い会員である委員たちは、細心の心くばりが必要ですね。話し合いはたいへんけっこうですが、とかくすると、「話し合い」が一つの固定した形式になってしまうことがあり、「話させ合い」になってしまっていることがよくあります。こうなると、「話し合い」の本来の目的が失われて逆の結果をきたしてしまいます。「話し合い」はさきほどの「同一視」が強められ達成される機会なので、初心の人の意見や考えなどとくに気をつけて、しゃべってもらうようにしたいものです。同一視が達成されたしるしはいろいろありますが、簡単なことでは、新会員が青年会を「わたしたち」と一人称複数で言いはじめたとき、その新来者は青年会をわがものと感じはじめたことを示しています。

その他、青年会における座席のとり方にも注意をはらいましょう。彼はいつも隅か、皆のかげの席を取りたがりませんか？ その他集会に、いつも数分遅れて来る傾向がなかったでしょうか？ すべてこういうことは彼の心の中にある抵抗を現わしているのです。そのようなときは、なるべく早く、会長であるあなたが、個人的に話しかけ、よい語り合いの機会を作ってください。牧師にも報告し、教会について正しい考えを持つように、種々の機会をとらえて、教育していただくとよいと思います。しかし百の説明、百の弁解よりも、青年会における救し合いの交わりがどんなに有効でしょうか。こんどの場合、彼が、会長であるあなたにそのようなことを言ったとすれば、それはたいへん喜ぶべきことなのですから、弁解などせず、よくその気持ちを聞き、ともに考えるという態度を持たれたらよいと思います。

次はヨブの解釈をめぐる議論ですが、どうも性格的な問題があるように思われます。ヨブ記の精神は、いわゆる苦難の問題で、絶対的な信仰と神の支配への服従が語られております。それがもし「自分もまたヨブのように病気を与えられるかもしれない」という不安だけをひきおこすのは、神学的にみて健全なとり方ではないし、さらに、性格のもつれがそこに強く出ているように考えられます。そういうときは、教理的な問題で議論し合ってもなかなか効果が生み出されず、神の一面だけが強く受けとられ、他の面が正しく受けとられないのです。この場合は議論よりも個人的に話しかけて、その悩みをきいてあげたほうがよさそうです。もしそれが相当根の深いものでしたら牧師に報告し、適当な措置をとることが望ましいですね。

教会は人間の集まりなので、いつでも生の面に配慮をしていかないと、教会の真の形成にならないと思います。そういう配慮を牧会的配慮と言いますが、これは牧師だけの仕事ではなく、教会員すべてがそれぞれの分に応じて担ってゆくべきわざです。コリント第一の手紙の第八章にあるような、パウロの配慮をお互いに常に学んでゆきたいものです。

（青山学院大学講師・牧会心理学専攻）

人生相談室

若い教会員の悩み

（回答者）気仙三一

【問】わたしは教会の青年会で会長をつとめております。信仰も深くはないし、会員をリードする資格のないことはわたし自身いちばんよく知っているのですが、なにぶん小さな教会で、わたしのようなものでも、青年たちの集まりでは先輩格なので、昨年とうとう選挙されてしまいました。いっしょうけんめいやらねばと思っているのですが、なかなかむずかしいものですね。実はいま二つの問題があるのですがきいていただきたいのです。

一つは、ある若い兄弟のことで、洗礼をうけてから一時はとても熱心に諸集会に出、青年会の活動にも積極的だったのですが、最近急に不活発となり、ほとんど出席をしません。あまりよく口をきくタイプではないので話し合いの経験も深くないのですが、先日会ってきいたところ、ある集まりで、会員たちが親しまぎれに、一種の放言（とくにある年輩者への批判）がなされ、それをきいてから急に教会に幻滅感をいだいてしまったということです。話し合いの機会をもっと作り、お互いに理解し合えればと思っていますが、どうしたらよいのか責任を感じています。

他は求道者の人で、先日ヨブ記を読み合ったとき、神がなぜサタンがヨブを不幸に陥しいれるのを許可したのか、と言い、わたしは、それは試練なのだと申しましたが、彼は、もしそうなら、神は信頼できない、信仰ということは恐ろしいことだと申します。わたしの神の試練という説明は彼を満足させませんでした。やはり彼は、そのことが気になるらしく、いつもそのことから議論が発展しないのです。病気になるのを非常に恐れているように感じます。

【答】教会の集まり、とくに青年会は感受性の鋭敏な青年男女が集まりますから、運営にはなかなかの苦心がいることでしょう。それに、信仰生活の長い人と初心の人が同時に会員なのですから、調和してやってゆくためには委員はたいへん気をつかいます。ある教会で、青年会があまりお互いに仲よくなると、グループ意識が濃厚になり、求道者などかえって近寄りにくい気にさせられるという話をききました。その反面、そんな強いお互いの結びつきをみて、かえってそれに魅力を感じてはいってゆくという人もあり、人の性格に

河村 わたしは、戦前、大連にいたときに、受洗しました。当時は、まだ、大東亜戦争にはなっていませんでしたけど、二〇才になれば、徴兵で兵隊にとられる、戦争にもひっぱりだされるかもしれない、そういうせっぱつまった感じで生きていました。そのころなんです、受洗は。そのころは、中国人と戦っていました。敵といえば敵ですが、わたしは、満洲っ子で、満洲に骨をうずめるつもりでいましたし、おなじ人間どうしのあいだの敵視ということに、ことに矛盾を感じました。

信仰によって生きる

曽我 はじめは、信仰といえるかどうか、フワッとしたものだったのですが、ひとにそむかれ、裏ぎられて、ただキリストしかたよるかたはない、という真剣な思いにさせられたとき、信仰はきびしいものだと知りました。

石島 その、ひとに裏ぎられたというのは、ひとことでいえば、失恋ですか。

曽我 ええ。失恋で人生を知る。はじめての経験でしたから、痛みも深かったのです。それからは、ひとにひかれるような気持ちになっても、縁談があっても、自分の選ぶのはどっちか、ということになると、キリストのほうへ行くんです。どうしても、最初の体験にもどってしまう。やっぱり生きる道はキリストだけだ、と。きびしくしつけられてしまったんですね。

石島 どういうことに出あっても、そのたびに失恋というあの体験の場所にかえる？

曽我 そうです。わたしとしては、それがいちばん幸いでした。特殊な経験かもしれませんから、ほかのかたのことを、それではかりはしませんが……。

岡口 いまの学校へはいるときには、ずいぶん考えました。この道をえらんだのは、やはり、信仰をもって生きるのに、これがふさわしい、と思ったもので……。

河村 キリストのためといっても、いまの世のなかでは、生きるということが、なかなかむずかしいので……。わたしは終戦後、満洲から引きあげてきて、佐世保に上陸したのですが、そこの引揚者収容所にいて、これからの生きていく道を考えたとき、自分がキリスト者になっていたということが大きな力でしたね。それで子供たちのために何かしたいと思い、上京してからも、いろいろ考えました。しかし食べていかなければなりませんし……。とにかく、キリストにあって生きるということは、たいへんですね。わたし、子供に教えるのに、モデルとして、シュヴァイツァーのことを話してきかせるんですが、これは非常に特殊な例で……。

仕事

石島 そこなんだな、問題は。シュヴァイツァーのような人たちに感激するけど、さて自分の現実の生活はどうなるか。

河村 わたしは、自分の職業について、コンプレックスをいだいているように思います。どのような道にすすんでも、それはキリストのためなんだ、という力を、教会がなえてくれるといいと思います。

曽我 わたしは、だれかえらい人がりっぱなことをしているのを見て、そのマネをするのが、主の栄えをあらわすこととは、思いません。わたしは、都の衛生局にいて、薬を許可する仕事のほうにいるんですが、ひとのマネじゃなくて、わたしはわたしのしかたでやりたいと思います。そうでないと、イタにつきません。職場では、わたしがキリスト者であること、みんな知ってます。朝、出勤すると、祈って、そういう雰囲気

《聖句をめぐる座談会(8)》

生きるも主のため

（司会）石島三郎

【出席者】

河村義一（39）会社員
曽我トシ（49）公務員
出井義純（28）会社員
岡口朗子（20）学生

【聖句】

「…わたしたちのうち、だれひとり自分のために生きる者はなく、だれひとり自分のために死ぬ者はない。わたしたちは、生きるのも主のために生き、死ぬのも主のために死ぬ。だから、生きるにしても死ぬにしても、わたしたちは主のものなのである。」

（ローマ人への手紙一四章七、八節）

入信のころ

曽我　わたし、ずいぶん前のことになりますが、ミッション・スクールに行ってたころに、よくわからないで、なにか雰囲気みたいなもので、洗礼をうけてしまいました。自覚的になったのは、学校をおえて、実社会にでてからで、そこで、人の心なんて変わりやすいものだということを知らされ、ただキリスト以外にないということを、つよく身にしみて思うようになりました。そのとき、はじめて、信仰って、こういうものだと知らされました。

出井　ぼく、いなかの教会で受洗したんですが、やはり、なんとなく、といったところでした。そのころは、とくに、いなかでは、教会がまあ文化の中心なんですね。高校時代に、それにあこがれて、教会へ行きました。外国の宣教師なんかもきますしね。それで、なんとなく受洗しちゃったというのが、ほんとのところです。それで、上京してからも、あっちの教会、こっちの教会と、フラフラしていて……。

石島　まるで浮浪者だね。（笑）

出井　いまの教会にも、妙なぐあいで定着しちゃって……。

石島　妙なぐあいって？（笑）

出井　散歩してたとき、一ど行ったことのあるY教会のH先生に会ったら、「やァ出井くん」って声かけられて、東京にでてきて孤独だったんで、名をおぼえられていたのがとてもうれしかったんです。それで、そこへつづけて出るようになった。そんなわけで、いまだに、「キリストのために」ということがよくわからないんです。

岡口　わたしが洗礼をうけたのは、中学生のときでしたから、純粋でした。

石島　いまは純粋でない？（笑）

岡口　いいえ、単純だったんです。温室そだちでしたから、疑問なんてありませんでした。わたし、いま、こっちの看護婦養成の大学にはいっているんですが、それは、考えてみれば、導きだったと思います。

のです。だから、看護婦がストするなんて、まちがっていると思います。

石島　でもね、使命だ、天職だ、だから低賃銀で働け、って考えを、使用者がわや、一般の人たちがもつのは、まちがっていますよ。

河村　むかしは、天職なんだから賃銀なんかどうでも、と考えたでしょうけど、いまはそうじゃないですね。いい仕事をするということと、いい待遇をするということと、これはべつに考えるべきことですね。

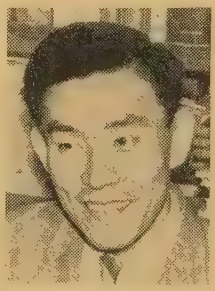
石島　よく、食べるために働くなんて、つまらぬことだ、と言いますけど、ぼくはそう思わない。食べるために働くことはりっぱなことで、働かないで食べようとするのこそまちがっている。働いて女房・子供をやしなう、りっぱな義務の遂行でしょう。

曽我　家族のある人は、そうかもしれませんけど、わたしは、ひとりですから、毎朝、なにか使命を感じないでは、出勤できません。やはり、職場の意義などを考えませんと……。

人間関係

出井　ぼくなんか、職業そのものでは、そういうこと、考えられないですね。むしろ、職場内の人間関係がよくいくような働きをすることに、意味があると思います。

河村　でも、やはり、仕事そのものに、天職のようなもの感じたいですね。それは、外面のことでなく自分が、はっきり、そこでいいと思っているか、自分なりにそこで神の栄えをあらわすことになっているか、ということですが……。



曽我　主のために生きるという、とくべつな生きかたもあるかと思いますが、やはり、隣人との関係になってくるんじゃないでしょうか。わたし、前には、職場でなくてならない人になりたいと思っていたんですが、男の人とちがって女の場合には、そういうふうにならなくても、その場によい空気をつくり出せるような、そういう在りかたをすれば、それでいいと、考えるようになってきました。

河村　なくてならない人間というのは、だんだんなくなるんじゃないでしょうか。技術の進歩で、だれがやっても、おなじような結果がでてくる。だから、もう、ことさら天職とは思えなくなって、そうなると、やはり、人間関係だけが問題になってくるのかもしれませんね。

曽我　わたしとしては、みんなの働きよいように、おかあさんの役をしようと、考えを切りかえたのですが……。

主のもの

石島　「主のために」ということばのあとに、生きるも死ぬも「主のもの」とある。生きるにしても、死ぬにしても、もう、主のものなんです。どっちにしても、主のものにされている。だから、あれこれとくよくよしないで、この大安心をもって、いっしょうけんめいやればいいんじゃないですか。

出井　それにしても、へためにVという意識は、ほしいですね。

曽我　さきほど、機械のようになるのから逃れるために、信仰に行く、と申しましたがこれは逃避でしょうか。

石島　逃避じゃない。そういうシンを持たなくちゃ。主のものである生きかた。

曽我　けっきょくは、だれのためにするにしても、それは主のためにされる。……ですから、交わりってことが、たいせつになりますね。主のために、というよりも、人を愛していきたい、という気持ちです。

（次回は「信仰によらぬことは罪」）

をつくるようにつとめます。

石島　お仕事の上で、信仰との矛盾を感じませんか。

曽我　仕事の性質上、仕事そのものには、矛盾がありません。しかし、とてもいそがしいときになると、信仰のことなんか関係なくなっちゃうんですね。これでは、まるで機械みたいで、乾燥した人間になっちゃうと思って、これからぬけだす道はないかと考え、それで、つとめさきがG教会の近くなので、そこの正午礼拝に出ることにしました。せわしいなかなので、そうとう勇気がいるのですが、機械にならないために、思いきって……。仕事中心でやるよりも、信仰中心でやるほうが、かえって、仕事にも助けになるんですね。臨時やといの人ですが、手となり足となる人も与えられ……。

石島　それは、そうでしょうね。心理的に考えても、ただいそがしくアクセクするより、心が静かに落ちついていたほうが、かえって能率があがる。

職業は天職か

出井　河村さんが、さっき、どんな職業でも天職なんだという、教会の力づけがほしいって言われましたが、わたしも、自分の職業を天職と考えるのは、どうも、ちょっと……。電子工学の仕事で、平和利用ならテレビとかラジオとかのほうですが、悪用すれば武器になり得る。そんなことを考えると、かならずしも天職とは……。こういうところに追いつめられていると、キリスト者として、どう考えていったらいいか。そういうとこまで、教会が配慮してくれているかというと、そうじゃない。

石島　ぼくの教会で、産婦人科のお医者さんがいて、よく堕胎などたのみにこられて、キリスト者として悩む、いっそ内科かなんかならいいんだけど、と話しておられた。ぼくは、内科は内科で、いまの社会機構のなかでは、病人がふえなきゃ自分のアゴが干あがる、ああいいおトクイさんが死んじゃった、（笑）というようなイヤな気持ちになやまされるんで、みんな大同小異じゃないかと、言ったんですがね。

河村　わたしのとこは、海運業で、物をはこんでこなければ国は盛んにならない。でも一面では、会社はもうけ第一。そこのところが、自分の生きかたの問題として、矛盾がでてきます。

出井　資本主義体制のなかでは、そういう矛盾は絶えないですね。

河村　天職と言わないまでも、自分の仕事にはげめる力がほしいですね。

石島　宗教改革者なんかの考えによれば、職業は天職なんだな。しかし、この資本主義の圧力の下では、なかなか、そうかんたんに言えない。

河村　そう言われてしまっては……。いまでも聖書の真理は真理のはずですから……。

岡口　わたし、この学校えらんだときは、決心してきたんですけど、一年たって、実習なんかもして、たいへんだってことがわかってきました。やめたいって人も出てくるほどですが、学校のなかにキリスト者医科連盟の分会があって、そこで話しあったりして、またはじめの決心にかえります。ネパールへ行く看護婦の人が、いっしょうけんめい原地語をならってるのなんか見ると、はげまされます。

出井　いまの社会では、曽我さんや岡口さんのような仕事は、少なくて、直接になにか使命をはたすというような職業は、なかなかないですね。サラリーのためが主になっていて……。（笑）

岡口　看護婦は、使命を感じてなっているも

わけになりましょう。

しかしわたしは一つ一つ品評をするかわりに、キリスト教では、「ここに神がある」「これが神だ！」と何をもち出すのか、それを言って見ろ、と皆さんがおっしゃるなら、「イエス・キリストが神だ」と言い切ります。

イエス・キリストというのは、イエスが姓で、キリストが名ではありません。「イエスはキリスト（救主）である」ということを、要約して、イエス・キリストといっているのです。ですからこれは、クリスチャンの信仰の告白を、いちばんかんたんな形にしてとなえているわけです。「わたしの救主は、ほかにだれもいません。わたしは十字架につけられ、復活して、いまも生きているイエスを、わたしの救主（キリスト）と信じています」ということを、「イエス・キリスト」と言っているわけですから、このように信じていない人にとっては、「イエス・キリスト」とは言えないわけです。信じない人にとっては、「イエス・うそつき」とか、「イエス・冒瀆者」とか「イエス・ただの人間」とか、言わねばならぬはずでしょう。

「イエス・キリスト」とは二千年の長い歴史をかけて、キリスト信徒が、血を流しながら、生命を賭して証明し、叫びつづけてきた告白であります。そしてわたしもまた、この世のことはよくわかりませんが、イエスがキリストであることだけは、ハッキリわかっていて、このためには生命をかけて、告白をつづけてゆきたいと思っています。

イエスを見れば神を見る

なぜイエスを神だと言うのか。ヨセフ、マリヤより生まれた人間ではないか。人間を崇拝するために神格化して、神にデッチあげたのではないか。天地を支配し、なんでも知り（全知）、なんでもできる（全能）、またどんなものでも捨てないで愛する（全愛）はずの神が、どうして小さな人間と、一つになれるか？

こういう質問が山ほどみなさんから出てくると思います。わたしもそれについて長く疑いをもっていました。それを理論的に話すよりも、わたしの体験から話したほうがわかりやすいと思いますから、ごしんぼうを願います。

新約聖書のヨハネによる福音書一四章の九節のところに、

「わたしを見た者は父を見たのである」

というイエスのことばに出会います。父とは神のことを指しているので「自分を見た者は神を見たと同様だ」というわけです。それから、同じく一〇章三〇節には「わたしと父とは一つである」すなわち「神とイエスとは本質上一つである」とのことばに出会います。

びっくりするではありませんか。自分を見た者は神を見たと同様だ！とは、あたりまえの人間が言えることばではありません。少なくとも、道徳的にまじめな人間なら、言えないことばです。自分の心の中のはずかしさを知っているからです。これが言えるのは、ほんとうの神が人間になった場合か、あるいは狂人の根もないことばか、そのいずれかであろうと思います。

「生まれて一代の木鐸（タク）となり死して百世の儀表となる、聖人にあらずんば誰かこれをよくせん、釈迦、孔子、ソクラテス、キリスト、世呼んでこれを世界四聖となす……」

これは中学時代の読本にあった高山樗牛の文章で、わたしはま違って覚えているかしりませんが、キリストは世界の四聖に数えられる人であると思っていました。ところが樗牛の言うのとは違って、聖書を読んでみますと、四聖どころか、キリストみずから「わたしは神である」と主張しているので、全く驚いてしまったのです。

孔子も釈迦もソクラテスも、みな自分の徳の至らざること、煩悩のなやみ、知の足らざることについて、それぞれ苦心しているのにキリストは自分を神として主張している。しかし、四聖と言われた聖人が、うそをつくはずはない。うそか、ほんとうか、これはよく考えねばならん、とわたしは思ったのでした。

むかし東京の松沢病院に、葦原将軍といわれたひとりの狂人が入院していました。将軍気取りでいましたが、その行ないはこれに伴

〈キリスト教のいろは〉〈第八回〉

ここに神がいる

島村亀鶴

1　宗教をはかる尺度

せんだって日本の大使になって来られたライシャワーさんのおとうさんは、宣教師として長い間、日本におられ、盲話学校を建てたり、いろいろの社会事業にもつくされたかたでした。

わたしは明治学院でギリシャ語や哲学史を教わったが、ライシャワー博士は仏教の学者として知られた人で、『日本の仏教』と題する大冊を著しています。わたしたち六、七名の神学部の生徒は、博士から日本仏教の講義をききましたが、まことに明快、いまでもそのノートを見ると日本の各宗教がよくわかります。ある日の講義に「日蓮はいつの時代の人か、その根本の主張は？」と黒板に字を書いていた顔を、わたしのほうに向けました。

わたしは鎌倉時代と言おうとしたが、西暦何年か、ちょっとわからないで考えていると、「自分の国の宗教家の生まれたのを知らんのか」と早口に英語で言って、持っていたチョークをわたしの頭に投げつけました。わたしはびっくりしました。同時に博士の真理に対する熱心さに深く感じました。博士は日蓮宗の学者姉崎嘲風博士と、論戦を交えたほどの人であったから、日本の神学生が日蓮のことを知らぬのを歯がゆく思ったことでしょう。

ライシャワー博士は、各宗教を比較するときのものさしをもっていました。

一、その宗教が何を神としているか（神観の問題）

二、その宗教はどうして人を救うのか（救済観の問題）

三、その宗教を信ずればどういうご利益があるか（祝福観の問題）

四、その宗教では死んでからのち、未来をどう考えているか（終末観の問題）

この四つの尺度をもって、各宗教をしらべて、それを批判して甲乙優劣をつけてゆく方法をとったのです。だれにでもわかりやすい方法で、みなさんが宗教を自分のものにしようとするとき、この方法によるとま違いが少なくてよいのではあるまいかと思います。

2　イエスはキリスト

神はあるかと問うと、ある、と答える。それならなにが神だ？　と問うと、「これが神だ」といってさし出す。

昔のバビロンの人は、日や月が神だ、と指さし、ギリシャの人はビーナスの像をもって来、印度の人は牛をもって来るかもしれません。日本では「天つ神」（天体や風雨、山川の霊を神化したもの）と「国つ神」（祖先や英雄を神化したもの）とを、これが神だと言うのでしょう。国学者の平田篤胤は「神と言はゞみな等しくや思ふらん、鳥なるもあり、虫なるもあり」と言いましたが、これが神だと言ってもち出されたものには、それこそ天上のもの、地上のもの、地下のもの、種々雑多なものがあるでしょう。

民族にそれぞれの神があり、また各宗教にそれぞれの神が考えられているとすると、どうしても、神々の品評会をしなければならぬ

人を生きかえらしたとか、遠隔の地にいて見えない病人をいやしたとか、言うような奇蹟ばかりを申すのではありません。日常生活の中でのちょっとした行為の中に、われわれのできないことを、あたりまえのように行なっているところ、そこに目をとめて読んでください。

さきにあげましたヨハネの福音書の八章四六節のところにイエスは、反対者らに向かって、

「あなたがたのうち、だれがわたしに罪があると責めうるのか」

と言っています。ある学者が、このことばは、イエスが世界に向かって道徳的な挑戦をしたことばだ、と言いました。実にだいたんなことばです。

無罪者としての意識！　これは現代人のもち得ない意識です。罪によろめき、罪に倒されてる現代人とかけはなれた意識です。罪に無感覚になっている者なら、自分は罪がないと言いましょうが、神の律法を守りぬこうと血みどろに努力している人たちの前で、こういうことばは言えるものでありません。

シンプソンという学者が『基督の事実』という書物の中に「イエスはみずから罪がない人であったばかりでなく、人の罪を救う救主である」と言っています。ただ自分は病人でない、健康者だというだけでなく、病人の医者であるというと同様であります。

罪のないのみでなく、自分は救主だと言って、イエスは多くの病人を治し、罪人を救う業をしているのです。

そしてそれは昔、二千年前にそうあったのみでなく、二千年の間、毎日、毎月、毎年ひっきりなしに、多くの罪人を救っています。これが基督が復活している事実によってですが、今日世界中に五億も六億ものキリスト信者が生きており、聖書がいつでも世界のベストセラーとして売れ行きを高めているのをみましても、間接にイエスが神であり、救主であることの証拠になろうと思います。

6　愛を命ずる愛の権化

「愛することの苦しみと、愛されない悩みと」これが現代人の苦悩であると、いわれています。わたしたちは「わたしを愛してください」と低姿勢をとり、あわれみを乞うようなかたちで、他人にふれてゆきます。

たとえ父母といえども「わたしを愛さねばならない」と強権的に出てきた場合は、大いに反抗します。勝手にしやがれ！　とそっぽを向いてしまいます。国家が祖国愛を要請します。人をそのために徴用します。しかし心から愛に応ずるのではありません。

ところがイエスは実に高飛車に、わたしたちの愛を要求してきます。マタイによる福音書一〇章三七に、

「わたしよりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしくない」

と言っています。自分に対して絶対の愛を捧げることを、すべての人に要求しています。

ひとりの人にだって絶対的な愛の要求はできません。リビングストンは結婚のとき、花嫁に「あなたはわたしより以上にキリストを愛してください」と言ったそうですが、神以外に自分に絶対愛の要求のできる者は、他にあるまいと思います。

それをすべての人に対して、絶対愛の要求をしているのですから、実にイエスのこのことばは驚嘆するのほかありません。

無責任や、強権的でなく、しかも相手の心にどうしてもこれに喜んで応答せねばならぬ愛が起こるとすれば、この要求をする者が、相手のひとりひとりを、心の底から愛していなければなりません。そればかりでなく必ずこの愛に応えるとの確信がなければなりません。

すべての人の罪のために、その生命をすて十字架の上に血を流してまで、これを愛しつづけるイエスにして、はじめて言えることばです。

ここにわれらを愛する神があるのです。このイエスこそいまも生ける神であるのです。

（次回は「キリストをどう知るか」）

ないませんでした。前橋にいましたとき、ある狂人の病院に婦人会の人たちがまいりました。病室であみものかなにかしていた品のよい人がいました。婦人会の人たちは静かに廊下を通って会釈してゆきますと、その婦人がこちらをみて、

「気違いを見物するとは、こりゃどうじゃ」

と言ったので、婦人会の人たちは、あわてて逃げて来たそうです。狂人は言うことと、その行動が一致しておりません。

ですから、狂人がいくら自分は神だと言っても、その行動をみれば、違うことがわかります。

4　生活の裏づけのある真理

ところがさらにわたしの、たまげた（魂消えた）のは、ヨハネ一四章一一節になると、

「わたしが父におり、父がわたしにおられることを信じなさい。もしそれが信じられないならば、わざそのものによって信じなさい」

ということばにぶつかったからです。

「自分の言ったことばだけで、信ずるわけにいかぬというなら、自分のやった毎日の行為を見てくれ、それによってわたしが神と一つだと言うことがわかるだろうと」言っているのです。

自分の生活を見ろ！　そうすれば問答無用だ！　というわけです。まことに簡単明瞭です。

わたしたちは、直接にイエスにぶつかるにしかず、この人を見る！　ことが近道です。

天文一八年フランシス・ザビエルが日本にキリスト教を伝えたのが、わが国に基督教の渡来した始まりと言われています。

ザビエルは印度まで来ました、支那へ伝道するつもりで来ました。ちょうどそのころ日本の水夫で弥次郎とかいう青年が、漂流してきていると聞いて、ザビエルは弥次郎に面会してみました。

ところがこの青年は、なかなか賢い、また礼儀が正しい、その上に進取の気象に富んでいる、こういうふうにザビエルが見てとったのです。

そこで彼は「実は自分は支那へ伝道に行こうと思ってフランスを出てきたが、きみにあって、日本に伝道してみたくなった。そこできみの国に伝道する場合は、どういうことを心得ておらねばならぬのか、一つ聞かしてもらいたいが」と相談すると、弥次郎が、

「先生がわたしの国に道をひろめるとすれば、まず第一に道理に合わぬことをお話したのでは、わたしの国の人は信じませぬ。わたしの国の者は、道理を重んずるのでございます。それから、先生がいかに道理にかなったよいことを申されましても、先生の日ごろの生活がこれに伴ないませぬと、とてもわたしの国の者は、先生の申されることにはついてはまいりませぬ」

と、こういうように答えましたので、ザビエルはいよいよ感心して、日本伝道を決意したそうであります。

生活の裏づけのある真理、これが今日欠けていますが、二千年前にイエス・キリストはこの点をはっきりと、わたしたちに申されています。

キリストの生活の面から見まして、どうしても「これが神だ」と納得がゆかねば、信ずるわけにはゆきません。

5　もし神でなければ……

イエスがどういう生活をしたかを知るのには、聖書の四福音書を見ればわかります。ここにイエスの生活記録が出ていますから、それによって、なにを言い、なにをしたかがわかります。

ただこの生活記録には、不思議なことに、イエスの写真がのっていません。記事としても背の高さがどう、丸顔か長い顔か、音声はどうか、という点は書いてありません。

そういう枝葉のことは書いてないが、イエスが神である、救主であるという点になると日常生活の小さなことがらを書いてあるところでも、はっきりとわかります。

神でないと言えない、また、行なえないことばかりが書かれていますから、よく読んでみてください。神でなければ行なえないというのは一言をもって海の波を静めたとか、死

紛争はたえずおこっている。

日本の原水爆禁止運動は、もう原水爆はごめんだ、広島、長崎の二の舞をわれわれもしたくないし、世界中のどこのだれにも二度と経験させてはならないという思いからスタートした。原水爆禁止を実現するためにはどうしたらいいか、平和を維持し、戦争をおこさせないためにはどうしたらいいか、それを考え、それに役だつ活動に努めながら、今年は第七回の世界大会をもとうとしている。広汎な層の人々をかかえ、たがいに矛盾もあるいろいろの考えかたをまじえながら、しかし、とにかく原水爆禁止と平和を願う一点でつながることによって、この運動はめざましい成果をあげ、世界世論の形成に大きな役割をはたし、現実に効果ある活動をつづけてきた。だが、残念なことに、昨年あたりから、原水爆禁止運動や平和運動に分裂化の動きが出てきた。もっとも基本的な人類共同の課題にたちむかうのに、足並みをそろえられないのは、なによりも共同の目的にとって不幸である。原水爆禁止や平和のための運動こそ、運動の統一と団結がなによりの力である。どんなに正当な理由も、運動を分裂させることを正当化することはできないだろう。すべてが運動内部の問題として処理される覚悟と用意が、ここではぜひとも必要である。しかも、不幸にもこの分裂の動きは、内外のキリスト者や仏教徒のあいだにも部分的ではあるが認められるようになった。

「世界宗教者平和会議」と名づけられる会議は、このような情勢のなかで特別の意味をもつものとして計画された。ほかでもない、軍備全廃・原水爆禁止・核非武装という当面の課題を実現するために、おなじ願いをもつ宗教者が、一宗・一派・一国・一体制などにとらわれない広い場所で、この共同の願いをはばむ問題点がどこにあり、その実現のためには宗教者としてなにをなしうるかを、率直に話しあい、有効な活動に備えようというわけである。人類共同の目的となるもののために、それぞれの信仰、信条、国籍、見解の相違をこえて、西からも東からも集まって知恵と力をあわせることを、まず宗教者が実現し、この姿勢をより広い層の平和運動に浸透させることができたなら、それは平和のために大きな益となるにちがいない。異なる見解、異なる立場の対立が激化する形勢のなかで、共同の目的のための運動の団結と統一をたもつのに、宗教者は運動全体のなかで特別のはたらきをなす場所をもっているかもしれない。原水爆禁止と平和を求める運動が、党派色によってゆがめられ分裂させられることから、わたしたちはまず運動そのものを守らなければならないだろう。

世界宗教者会議は、この七月二五日から二八日まで外国代表五〇名、国内代表二〇〇名によって、京都でおこなわれる。外国代表は往復旅費が自弁であるために、アジア諸国からの代表が主となるのはやむをえないが、ヨーロッパその他の地域からも、少なくとも一国から一名の代表者がえられるよう努力がなされている。ヨーロッパでは六月にチェコスロバキアの首都プラハで、キリスト者の世界平和会議がおこなわれ、日本からも四名の代表が参加したが、今回の会議ではこのキリスト者会議の成果もとり入れられ、生かされることになるだろう。外国代表のうちとくに注目されるのは、戦後はじめて中国キリスト教界から二人の代表を迎えることである。また、ソビエトからはバプテスト教会と福音ルーテル教会から代表が参加することになっており、東と西の宗教者が、この会議での率直な語り合いで共通の道を求めることは大きな意味をもつだろう。

よき意図がよき結果で終るようこの会議に期待したい。

（東洋大学文学部助教授）

世界宗教者平和会議のこと

——八月六日、八月九日を前にして——

飯島宗享

やがて八月六日、八月九日がやってくる。忘れがたいあの広島、長崎の原爆の日です。先ごろ広島大学教授の調査として新聞に報道されていたところでは、今も年々、広島原爆病院だけで五〇人の原爆病死者が出ているという。これらはほとんどが原爆投下後の何日かのうちに被爆地に立ち入ったために禍を受けた、いわゆる第二次放射能による患者たちだそうだ。現在、原爆病院その他に入院しているたくさんの患者たちがいるが、自宅で養生したり若干の仕事をしたりしながら医療を受けている人の数はもっと多い。原子爆弾被爆者の手帳を交付されている人数は、一九五九年三月の統計で二一万二千四百九十人となっている。しかし全国の被爆者数は、政府の推定でも二七万人余とされている。手帳の交付を受け、被爆者であることが知られると、結婚や就職に支障をきたすというので、手帳交付を申請しない被爆者が多い結果である。近年になって、これまでになんの異常もなかった人々に突然病変がおこる例がふえてきた。このことが被爆者たちにあたえる不安の大きさは、はかりしれないものがあろう。

広島、長崎に原爆がおとされてから一六年たった現在、被爆の波紋はなおそのひろがりをやめず、被爆者たちの肉体と生活をむしばみつづけ、不安をかきたてている。広島に一発、長崎に一発、たったそれだけの原爆でこの結果なのだ。一六年前にくらべると、原爆は水爆を加え、その破壊力は格段に大きくなって、米ソ英仏の諸国が現に保有している原水爆の量をもってしても、全人類を破滅させておつりがくるほどだといわれる。そして、思いのままに原水爆を運ぶミサイルにも不自由しない。ひとたび戦争がおこれば、世界のいたるところに、広島、長崎の惨禍が現出するだろう。戦争はもはや勝敗がナンセンスになるような全滅戦争を意味するだろう。そして、そこで投下される原水爆の放射能は、その戦争に関与しない諸国の国民にも無差別に襲いかかるだろう。

武器がここまで発達しては、もう戦争はありえない、戦争はあらせてはならないと、わたしたちの常識はそう教える。原水爆というとてつもない兇悪な兵器が、人類の運命をひとつに結びつけたのだ。かつては戦争に訴えてでも守らねばならぬなにかがあるということばが意味のあることばでありえたし、戦争に勝つことによってそれを守りえた事実もあった。しかし戦争が人類全滅を意味する核戦争である現在では、戦争から人類が守られることが先決である。バートランド・ラッセル卿は核兵器をペストになぞらえて、この疫病の前では西の陣営に属する者も、東の陣営に属する者も手を携えて、その撲滅に努力してしかるべきだと力説している。核兵器とともに戦争が、そして戦争のためのいっさいの軍備が、いまやペストなみに人類共同の努力で封じこめられるべきときにきている。国連でも軍備全廃をめざしての軍縮が、全会一致で決議され軍縮委員会がスタートした。地球上の放射能を、これ以上ふやしては危険だという認識が核実験停止会議を始めさせた。大勢はこの方向に向いている。けれども話し合いは難航をつづけ、いまのところまだなにひとつ実行する段階には達していない。しかも諸諸方々に戦争を誘発するような緊張、危険、

ターを打ち上げるのだが、ターターは日本ではつくれない。つまりアメリカの戦争の下請仕事を受けもつだけの軍艦に莫大な税金を消費するワケである。「あきづき」「てるづき」「いすず」「もがみ」などの駆逐艦が完工しつつあって、二三隻の駆潜艇とともに最新式の対潜誘導魚雷を装備されている。「日本海を平和の海に」との裏日本の大運動が新潟市で今春催され、ソ連からも市長らが出席した。その明るい面と対比して考えてみたいものである。だが、四つある護衛艦隊の旗艦はみな駆逐艦で潜水艦相手である。別に航空集団があって、司令部を鹿児島県鹿屋（かのや）市に置き、徳島・館山の航空群と、練習艦隊司令官指揮下の呉・横須賀の各練習隊をもっている。

航空自衛隊は石川県小松の第六航空団と北海道千歳の第二航空団と宮崎県新田原に松島から移った第五航空団とが常時、緊急武装迎撃態勢をとることになった。それらはミサイル武装をしつつあるし、国産ミサイル（空対空のロケットのマイティ・マウス）がプリンス自動車会社（旧富士精密工業のこと、戦時中の中島飛行機会社の一部で、荻窪や三鷹などにある）に発注になっている。また、サイドワインダー改良型のミサイルが今年度は十発試作されて、新島で試射すべく目下盛んに工業化が急がれており、抗議団がこの島をつぎつぎに訪れて、島民のインジーやウンバー（老男女）を助けて闘争をつづけているのである。なぜ抗議闘争をするのか。それは、ミサイルが核弾頭をつけた小型原爆に、いつのまにか入れ代わり、そうした核ミサイルに、この新島の試射がつらなっていることを人びとは知っているからである。

防衛二法が攻撃二法に改悪されたといえる代表的な点は、戦術原爆を装備できる戦闘機F104二百機の生産に乗り出したことである。生産費だけでも合計六九七億円で、別に維持費がウンとかかる。その上、滑走路が三千―三千五百メートル必要となるので、千歳・松島・小牧・小松・新田原の滑走路も千メートル近く拡張せねばならず、美保基地や百里基地の拡張や新設が重大問題である。なぜなら、立川市砂川の場合のような強い人民の抵抗が、これら原爆戦闘機のための基地拡張には、きっと加わるからである。その原爆もアメリカ製であって日本ではできない品物だ。つまり二百機の戦闘機もアメリカ空軍の下請的存在でしかない。しかもこのF104は空対空ミサイルのほかに対地攻撃用バルカン砲を装備し、昼間も夜間も対爆撃機、対戦闘機、対地上の各種の攻撃をなし得るのだ。

さらにミサイル部隊三隊を昭和四〇年までに防衛庁は造ろうとしており、アメリカから導入されるミサイル発射基は、ハーキュリーズという核弾頭装着可能のミサイルに使用できるものなのである。

要するに日本全土がアメリカ軍の基地だというワケだ。吉田内閣の日米行政協定がそういうたてまえをきめた上に、新安保条約でいよいよその協定が裏づけされてきつつあるのだ。

最後に、この法律改正の結果、兵数（定員）が一万五千人増加し、統合幕僚会議が強化されて、制服職業軍人が実権を握り、同会議議長が陸海空三軍の出動の長官命令を立案する（従来は三つの幕僚長三人が立案）ことになった。その結果、防衛庁長官も総理も国民も知らぬあいだに、軍事行動や作戦が、軍部とアメリカ統合参謀本部とによってはこばれかねない危険なことになった。

「こうして『戦力なき軍隊』といっていた自衛隊は、もはや戦前の『戦力』とはくらべものにならない『高度の戦力』をそなえる軍隊になってきたのである。」かつての原爆被害国が原爆加害国に変わりつつある。だが、ガッカリすることはない。――軍備競争は軍需工業という中間収奪者にとっては本来笑いがとまらぬもうけ仕事なのだが、彼らも社会主義国を前衛とする世界的平和勢力の前につい去ろうとしているから。くわしくは「軍備全廃時代」（新名丈夫著、理想社）をぜひ読まれたい。

（荻窪北教会牧師）

防衛法から攻撃法へ

松尾喜代治

「防衛庁設置法の一部を改正する法律」と「自衛隊法の一部を改正する法律」とがいわゆる防衛二法で、一昨年来、国会で四たびも流産のうきめにあってきたのが、こんどは国会を通過して六月一二日付で公布されてしまった。四月中ごろまでは「防衛二法案を葬れ」というスローガンが国会内外でさけばれとおしたのに、あとから出てきた「政防法反対」の声に消されたかたちになって、政防法案が、野球でいえば一塁に出たのでワイワイいっているうちに、防衛二法案は本塁をおとしいれてしまったというワケで、えらいことになったものである。

これまで六管区と四混成団で成り立っていた陸上自衛隊が十三師団に編成し直され、札幌市外豊平に第十一師団が、群馬県榛東村に第十二師団が、広島県海田市に第十三師団が増設され、全師団がアメリカ流の陸軍編成になった。称してペントミック師団という。ペントとは五のこと、ミックとはアトミックつまり核のことで、五単位編成の核兵器装備師団の略である。恐るべき原子戦争がたてまえである。戦車、歩兵、工兵、砲兵という名称が名のりでてきた。文字どおり軍隊である。自衛隊に関するかぎり、憲法第九条の「陸海空軍その他の戦力はこれを保持しない」という条文は廃棄されてしまったことは、次にだんだんとのべるとおりである。

まず、海外派兵のため札幌近くの千歳市の第七師団が、すでにことし二月末、機械化部隊としての編成を完了し、新設の前記札幌市外琴平の第十一師団に警備担当地域を肩がわりし、どこにでも出動できる態勢をとっていることが、われわれを驚かせる。この師団は、海外派兵が決定されれば、まっさきに出動するのであって、装甲車連隊一、自動車連隊一、砲兵連隊一、戦車・工兵・通信大隊各一、偵察隊・航空隊・武器隊・衛生隊・補給隊からなっている。この機動化された師団がアメリカ軍とともに、アジアの民族解放勢力の抑圧に悪用される危険が増大してきたのだ。

この国外向けの師団のほかに、十三個師団全部に各一の治安出動専門部隊が新設され、ヘリコプターや催涙ガスなどの弾圧器材が増強されることになった。知事の要請のありしだい、直接治安行動にのりだすのである。つまり、国民の大衆運動弾圧を専門とする部隊が新設されたのである。右翼暴力団どころの話ではない。

海上自衛隊でも練習隊群といっていたのを練習艦隊と改め、実質的にも、海上護衛・港湾防衛という受け身の作戦から、積極的な対潜水艦「掃討」作戦への「前進」をめざし、日米共同作戦で、ソ連の潜水艦を日本海に封じこめて掃討するという攻撃的任務をうけもたされたのである。

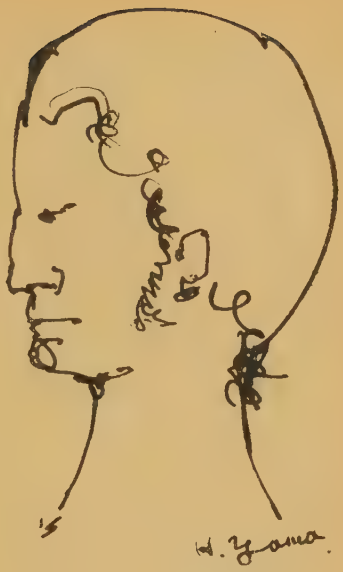
昨年度の予算から建造費が計上されはじめた大型駆逐艦が、本年末から三年がかりでできあがるが、音速の二・七倍の速度、射程十八キロのターターというミサイルを四二発積む軍艦であって、ミサイル一式と艦体との総経費が七二億円以上かかる。そのうちターターそのものと部分品代二二億円はアメリカが出すということだ。艦から空をねらってター

放蕩ということ　放蕩とは、まず自分の欲望の充足のためにしか、他人や物を使用しないということです。そういう人や物の使い方は、けっきょく、「何もかも浪費してしまう」こと以外のなにものでもありません。放蕩と浪費とはきってもきれない密接な関係にあります。さっき現金に換えたその現金を湯水のごとく欲望充足のために使うということです。放蕩ということにおいてくらい、人が自己中心な生きかたを発揮することはありません。彼は、金さえあれば世の中は自分の思い通りになる、と考えます。放蕩息子は案外金ばなれがいいのです。彼は決してケチケチいたしません。

しかし、そのようにして、金を湯水のごとくに使って、欲望を充足しながら、けっきょくは、彼は「放蕩に身を持ちくずし」ているのです。この身を持ちくずすということが、放蕩のいちばん大切な問題ではないでしょうか。金がつづいているかぎり、人は放蕩息子を大事にします。すると放蕩息子は世の中で俺くらい偉い人間はないのだ、という妙な錯覚に陥ります。人が自分を大事にしてくれるのは、けっして、彼を人格として認めてくれているからではなく、要するに、彼が持っている現金のゆえなのですが、人間が自己中心になりますと、それがあたかも、自分の人間的な価値が認められてるのだというふうに錯覚されてくるのです。そうして、何もかも浪費してしまって、「財産を使い果した」とき、そのときから放蕩息子の孤独がはじまります。

ふと気がついてみたら、もはやだれもが自分を相手にしてくれないみじめな孤立状態にある自己を見出すのです。ひとりぼっちである自分を見出すくらい、人にとってみじめな気持ちに陥るときはないのです。しかも、父のもとをはなれて遠い所に来てしまっている異邦人として、もはや、彼はどこにも居場所がない自分を感じるのです。

放蕩息子の危機　どこにも居場所がないということは、人の生にとって危機であります。そのことをやはり今度の新しい英国の聖書は、he began to feel the pinch と訳していますが、じつに適切な訳といえましょう。放蕩息子ははじめて、そこで、「危機を感じはじめる」のです。危機とは、その場合、全き孤立化のなかで自己を見出すということです。おまけにききんなどがあって、放蕩息子は、「食べることにも窮しはじめ」ます。その向こうに待っているのは飢え以外のなにものでもありません。空腹をかかえて、その地方の住民のところに身を寄せても、もはや、その人は、彼を畑にやって、豚を飼わせる程度にしか、彼の存在を認めてはくれません。かつて、世の中のすべての人が、自分をチヤホヤしてくれていたのに、いまは奴隷のようにしか使ってくれないのですから、放蕩息子の運のつきというべきです。それでもまだ豚を飼わせてくれる間はいいので、やがて、豚の食べるいなご豆さえだれもくれなくなるのです。豚以下の存在になってしまうのです。人が人として生きられない、豚以下の存在としてしか生きられないとき、人はまったく自己に絶望するのです。そのことは何を意味していますか。人が完全に人間性を喪失するということです。人と人との間で生きるという、人の存在の根本様式を完全に失うということです。放蕩性の行きつく所は、必ず、そのような全き孤独です。もはやだれからも相手にされない、そして人としてすらとりあつかってもらえない、そういうみじめさこそ、放蕩息子のなれの果てだったのです。



生きる意味について・第八章

放蕩息子の運命

佐古純一郎

放蕩息子　「父よ、あなたの財産のうちで わたしがいただく分をください」、放蕩息子が父に要求したことは、まずこのことでした。それは自己主張ということです。そして、また自己の所有権の主張ということです。人にはそういう権利が許されているのですから、それは当然の要求であるともいえましょう。だからこそ、父は彼の分けまえを彼の自由にゆだねたのです。「それから幾日もたたないうちに、弟は自分のものを全部とりまとめて遠い所へ行った」というのです。今度出版された新しい英国の聖書はここのところをじつにうまく訳しています。**turned the whole of his share into cash** と訳しているのですが、「自分の分けまえを現金に換えた」というわけで、これはじつに現代的な訳だと思います。そしてつぎに **left home for a distant country** というわけです。自分の家を出て、遠い所に行ったのです。人は自分の家を棄てて遠い所に行くと、ろくなことをしないのです。父のもとをはなれて遠い所に行ってしまう、ということが、人間のごうまんさということです。つまり父のもとにある交わりから脱落して、自分だけでやってみせるということですが、そのことを自律的人間と呼ぶのでしょう。放蕩息子とは要するに自律的人間ということです。しかも、もともとは父からもらった分けまえなのですが、自分自身がつくり出した所有物であるかのように錯覚するところから、自律的人間の浪費ということがはじまります。放蕩ということはいったい人間のどのような生きかたのことなのでしょうか。

まうのです。どこにも居場所を持たない故郷喪失者、それが放蕩息子の悲しい運命でありました。

故郷喪失　よく考えてみますと、現代人は故郷喪失者になってしまっているのではないでしょうか。「家郷の喪失ということが世界の運命となりつつある」とマルチン・ハイデッガーがいっていますが、小林秀雄氏が『故郷を失った文学』という評論のなかでそのことをつぎのように述べています。

故郷のない精神というものに気がつきだすと、事々にその現われが見つかる。極端な場合を考えると特に妙である。歩くのが好きだからよく山へ行く。深い所へ危険な所へと行きたがる。これなんかずいぶんおかしい、とこのごろ合点し始めた。自然の美しさに感動しに行くのは健全なことだと当人は考えているが、実はそれは日常観念的な焦燥の一種の現われにすぎないのではないかと思えばまさしくそう思われてくる。どうも自然を愛するなどという現実的な穏やかな筋合いのものではないらしい。自然美に対する私の感動に一体どんな確たる現実的な根拠があるか、いよいよ疑わしい。注意してみると、山の美しさに酔うことと抽象的な観念の美しさに酔うことと実によく似ている。故郷を失った精神の両面をながめるような思いである。そう思うと近ごろの登山の流行などには容易に信用が置けない。年々病人の数がふえる、そんな気がする。

故郷喪失者の心情を不安と呼んでいいのです。孤独者として異郷にさすらう放蕩息子は、どこにも居場所のない故郷喪失者としてのみじめな姿を自分のうちに見出さざるをえませんでした。しかも食うにパンなく、あとにくるものはのたれ死に以外のなにものでもありません。たしかに彼はピンチを感じたに相違ないのです。わたくしたちが少し気をつけてみますと、文学などの世界に、どこにも居場所のない人間が、このごろずいぶんと出てくるのです。ついさいきん読んだ小説にもこんなのがありました。彼は自分の妻のほかに女を持っていて、妻と女との間をいったりきたりして情事にふけっているのですが、そういう彼がこんなことをつぶやくのです。「俺のなかに下町と、海辺の町をつかいわけている二人の男が棲んでおり、その二人の男をみつめている一人の男が棲んでいる。生活の糧を得る仕事はなにひとつせず、二人の女の前で自分に都合のよい嘘を並べたてながら二つの町を往復している男。いつからこうなったのか、そして現にこうして生きていながら、どこにも定着場所がないとは、これはどういうことなのだろう」、そこにわたくしたちは、現代の放蕩息子の姿をまざまざと見出すことができるでありましょう。

どこにもない居場所　放蕩息子の運命の尽きるところは、どこにも居場所がないということですが、現代に生きているわたくしたちは、じっさい、どこにも居場所がないという苦しみを味わっているのではないでしょうか。まず家庭はどうでしょうか home が少しも at home に感じられないのです。ですから、多くの若者たちはどんどん家出をして東京へ東京へと草木もなびくように出てまいります。しかし、もちろん、彼らは東京のどこにも居場所がありま

人間関係のはかなさ　しかしこの問題はもう少し違った角度からも考えてみなければなりません。かつて放蕩息子が現金を湯水のように浪費していた日、人は彼をチヤホヤしなかったでしょうか。そうです、わたしたちは、その人が何らかの意味で、ねうちのある間は、その人を大事にするのです。そのことは、放蕩息子が自己中心な、欲望の充足しかもとめない人間であったのと、まったく同じように、放蕩息子を大事にした人々もまたけっきょく自分の欲のために彼を利用したにすぎないのです。お互いに相手が利用価値がある間だけしか、人と人は関係しえないのかもしれません。そこに人間関係のはかなさがあります。放蕩息子が現金を使いはたして、もはや何の利用価値もない存在になったのをみとどけると、その日から、みむきもしないというわけです。

放蕩息子の危機は、もちろん、彼自身がまねいた運命ですが、しかし、彼をそこまで追いやったのは、つれない人の世のならわしなのかもしれません。人と人とは、けっきょく利用価値においてしかつながり合えないのでしょうか。だとすれば、人間関係ほどみじめなものはないではありませんか。人と人との間に生きることが、生の根本形式だといってみても、それでは、カール・バルトのいう共同人間 mit-mensch ということも成り立ちようがありますまい。そこに人間存在としてのわたくしたちが考えてみなければならないもっとも深刻な問題があるのです。親子だ、夫婦だ、職場の同僚だといってみたって、相手の利用価値が零にひとしくなったとき、なお、徹底的に相手にかかわりを持つことができるでしょうか。単なる義理だけで、愛するかのようなそぶりをしてみせるにすぎないので、ほんとうは、はやくどこかに消えて行ってほしいと心の中では願うのではありませんか。義理とはなんですか、世間態ということにほかならないのです。

人間性の喪失　放蕩息子の危機とは、けっきょく完全な人間性の喪失ということです。カール・バルトのいわゆる共同人間性という人の存在の根本形式が彼のうちで完全にこわれてしまったことです。そういう徹底的に孤立化された生きかたのなかでこそ、人は生の意味を見失うのです。人が生きる意味を完全に見失うということが人生の危機ということではありませんか。放蕩息子はなぜそういうことになったのでしょうか。もういちど静かに彼の選んだ人生行路のあとをたどってみましょう。

かつての日、彼は父のもとで、兄や召し使いたちと、交わりの喜びのなかで毎日を送っていたのです。そのとき、たしかに彼は、人間性のなかで生きていました。しかし、彼は自分を主張し、自分の所有権を主張し、そうして、もともとは父からのたまものであったはずの財産を、自分の所有として自分の支配のもとにゆだねたのです。そのような自己中心の生きかたを徹底化そうとしたとき、放蕩息子はどうしても、みずから、父のもとにあった交わりから脱落して、遠い所に出かけてしまったのです。そこに放蕩息子の異邦人としてのさすらいがはじまります。異邦人とはなんでしょうか。それは他処者であり、つねに孤独な旅にある者です。彼は遠い所をさすらっているうちに、いつしか、故郷喪失者になってしまいます。現金を懐にしているかぎり、他処者も大事にされますが、もはや文無しになってしまった他処者をだれが相手にしてくれるでしょうか。かくて、放蕩息子は身のおきどころのない完全な孤独者になってし

もいいのです。ほんとうに自分が居るべき場所で生きないかぎり、生きることには意味がありません。これは、わたくしの人生観の根本原理です。

悔改め　本心に立ちかえった放蕩息子はいいます。「父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もうあなたのむすこと呼ばれる資格はありません」、それは悔改めということです。なにを悔改めるのですか。わたくしは自分に与えられているものを自分の所有であると判断し、権利を主張し、しかも、それをただ自分の欲望充足の手段としてしか使わなかったのです。わたくしはただ自分のことしか考えていなかったのです。しかも、父のもとでの交わりを自らすてて、遠い所に出かけていって、自分の力でやっていけると考えてきたのです。そのかぎりわたくしは父に背を向けて歩いていたのです。遠い所に行くということは、背を向けて歩むということではありませんか。悔改めとは廻れ右ということです。あまり遠くにきてしまったので、廻れ右して顔を向けてみても、もはや、自分がすてて来た父の家すらそれがどこにあるのか見当もつきません。しかしとにかく廻れ右して、背を向けないで顔を向けて歩むその歩みは、一歩一歩が、父のもとに帰っていく歩みとなるでしょう。悔改めとは、ただ、感情の問題であるのではなく、行為の問題です。わたくしの生きかたの問題です。

わたくしたちのしきたりでは、「今日から心をいれかえまして、真人間になります」とわびを入れるわけですが、「心を入れかえる」だけではしようがないので、「心を入れかえまして」などというやさきに、「ついまがさしたものですから」というようなことになりかねません。ごくさいきん訳出された『放蕩息子』という本のなかでシュニーヴィントはつぎのように書いています。

悔改めは神への復帰（回心）である。「メタノイアー」にあたるギリシャ語は、ヘブル語の翻訳で、ルターは旧約聖書では「回心」（Bekehrung）という語をそれにあてている。しかし、私たちは、復帰という表現をえらぶ。なぜかというと「回心」ということばは、「悔改め」という語とおなじく、もはや聖書的な響きを完全にあらわしてはいないからである。回心というとき、私たちは、まず第一に、外にあらわれた生活形態の変化を考える、特定のあらわれた罪の克服、特定の生活習慣の変革を考える。ところが、聖書のことばは第一に、神にたいする私たちの関係を明らかにしている。神から離れている人間が、神にかえること、神に背をむけている人間が、神にむかうことである。この転換は、人間の意志、感情、思考、行動全体にわたっている。しかも、この転換自体が人間の実存の完全な復帰、完全に新しい存在と生活なのである。

悔改めとは、わたくしたちにとっては、全実存的なことがらなのです。それは本心に立ちかえった人が、孤立的人間から連帯的人間へと、自己本来の姿に復帰しようとするいとなみのすべてをいうのです。ここらで、わたくしたちもそろそろ本心に立ちかえるべきではないでしょうか。

（次回のテーマは『新しい実存』）

せんから、裏町の深夜喫茶でとぐろをまくということになるわけですが、そのためには金が要ります。そこで悪の道に走るか、行き場所がなくなれば、右翼の団体などに逃げ込むということになるのです。居場所がないということくらい、人の生活にとって危険なことはないのです。

それでは職場はどうでしょうか。職場がこれまた自分の居場所になってくれないのです。それは仕方なしに毎日行く場所であり、ひとときも早くきりあげたい場所なのです。早く五時にならないかなと、時計とにらめっこするような職場での仕事に、職業の使命感というようなものが感じられようはずはありません。そのうさ晴らしが、レジャー・ブームというような形になってあらわれてくるのだとも考えられましょう。自分の家庭も、自分の職場も、ほんとうに居場所になってくれないということですと、わたくしたちはいったいどこでいこいの場を与えられるのでしょうか。

倉橋由美子さんの小説に『どこにもない居場所』というのがありましたが、たしかに現代人はどこにも居場所を持ち得ない人間になっていきつつあるのかもしれません。エデンの園で主なる神が人に呼びかけたもうたのは、「あなたはどこにいるのか？」（創世記三ノ九）ということでした。遠い所に出かけてしまって、しかもその異邦でどこにも居場所のない人になってしまった放蕩息子を、「あなたはどこにいるのか？」と探している声があるのではありませんか。「あなたはどこにいるのか？」これは、故郷を喪失している現代人ひとりひとりに痛切な問いであるといえましょう。

本心に立ちかえって

どこにも居場所がなく、食べるものがなにひとつ得られない、飢えと渇きのどん底で、危機を感じたとき、放蕩息子は「本心に立ちかえった」と聖書は記しています。もとの訳では、「我にかえった」と訳してあったかと思いますが、わたくしたちが本心に立ちかえるということの意味を今日ほど切実に思ってみなければならない時はないのです。ほんとうの自己にかえるということなのですが、放蕩息子にとってほんとうの自己とはどのような姿における自己のことだったでしょうか。それは、あの、父のもとにいて、兄や召使いたちと交わりの生活にその日その日を送っていた自己なのです。本心に立ちかえってみれば、彼には、たしかに自分が棄ててしまったあの日々の交わりがなつかしいのです。それは放蕩息子にとっては過ぎし日の追憶であるかもしれませんが、しかし、本心に立ちかえってみれば、今日にでも帰っていくことのできる現在の生活なのです。なんだか照れくさい、いまさらこんなぶざまな姿でおめおめとかえっていくことはできない、申しわけが立たない、本心に立ちかえってみれば放蕩息子もまた父の子なのです。

わたくしはお説教をするつもりではありません。放蕩息子の運命の尽きたる地点において、どこにも居場所のないみじめさということを考えながら、そこに、現代に生きるわたくしたちの問題があることをいいたかったのです。そうして、どこにも居場所がないということは、いいかえるなら、人が真に居るべき場所にいない、ということなのです。わたくしたちは、ほんとうに自分の居場所にいるとき、生きることは喜びであり、意味があるのではありませんか。わたくしはそのことを考えたかったのです。生きる意味についてのわたくしの考察の中心命題はそのことにあるのだとはっきり申して

る家は、このあたりでも暮し向きのいい、品格とでもいったものの
ある家なのだ。

橋は小さかったが、頑丈な鉄桁に支えられていた。私は、子供の
ように帰りたくなりながら橋の欄干に凭れて、用もないその運河を
眺めた。上げ潮らしくその黒い運河はよどみを見せ、捨てられた夏
蜜柑の皮が、ここでは惜しいほどの新鮮な黄金色を光らせながらゆ
たっていた。もちろん私は、そんな夏蜜柑の皮なんか眺めていても
仕方がなかったのだった。私は、その必要もないのにあたりの気配
を眺めまわした。ひっそりとした一劃だった。その橋の上も、とき
どき自転車が通るくらいで、一台のトラックも通らなかったのであ
る。

「神さま、わたしはいまいい事をしようとしているのでしょうか、
それともわるいことをしようとしているのでしょうか」と私は心に
呟いていた。

その私の頭のなかには明らかに、彼女の子供にとっては、彼女の
それより暮し向きがいい方が幸福なのだというはなはだ俗っぽい常
識のあったことを白状しなければならない。しかもこの常識は、九
十にもなるのに子供のようにここから逃げかえろうとする私を正当
化したのである。行って見たが、思ったより立派な家だったので、
むしろ子供さんたちは、あの家で暮した方がいいのではないかと思
って、たずねずにそのまま帰って来ました、という順子への答えさ
え心の中に用意されていたのである。

私は、引返して、その家の格子戸をあけた。どんな常識も、神に
対する弁解にはならなかったし、自分のしていることの善悪は、結
局は、神にしかわからないことだったからだ。だが、あけた格子戸
は、いかにも手入れが行きとどいているというふうに軽々とあき、
その上、戸にとりつけてあるらしいベルまでが凛々しく鳴った。私
は、何となくぎょっとしながら、思わずひるんだ声を出していた。

「今日は……今日は……」

しかし家のなかはひっそりしずまりかえっていた。玄関の式台の
向うに私へ立ち塞がるようにしまっている真白な障子が、一枚のコ
ンクリートの壁に見え、かえって私に自分自身のむなしさを感じさ
せたほどだった。人、一人救うということは大変なことなのよ、と
病院でいった洋子の言葉が、私の心を斬りつけるように横切った。
私は、自分でも情ない声だなと思われる声をふたたび張りあげた。

「今日は！　今日は！」

がらりと障子があいた。三つぐらいの女の子が、柱と障子に手を
かけたまま、全身を押し出すようにしていった。

「だあれ？」

頭をおかっぱにして、清潔そうなワンピースを着ているその幼女
は、私の答えを待ちながら、好奇心のあふれた眼でじろじろ私を眺
めていた。順子の下の女の子にちがいなかった。だが私は、どうし
てか吃りながら意味のない言葉を喋っていたのである。

「あのね、あの、ここ横川さんの家ですね」

するこ幼女は、大きな声で叫んだ。

「おばあちゃん！」

だが、彼女は、もう身をひるがえして、奥の方へ姿を消して行っ
た。やせすぎていたな、という印象が私に残った。彼女の過去の貧
しい生活の名残りかも知れなかった。だが、ふたたび奥の方で彼女
の叫ぶ声が聞えた。

夜警番の日記(8)

椎名麟三

8　二つの真実

私は、五十にもなりながら世事にうとい面がある。一つには、この世のなかにはいろんな複雑な事情がからまりすぎているので、ちょっとした人間関係の不審さえも、きっと何か事情があるのだろうと見逃がしてしまうせいもある。だから順子から、彼女の死んだ夫の両親の姓が笠城ではなく、横川だと聞いたときも、それほどふかくたずねなかったのだ。そしてたしかにその家は、江東の橋のたもとにあった。

しかし私は、その家の「横川亀吉」という表札までたしかめていながら、その前を通り過ぎて橋の上まで歩いて行ってしまっていたのだ。表札を見たいまになって笠城ではなく横川だという姓のちがいがひどく不審になって来だだけでなく、順子の話から想像していた家とは、まるでちがっていたからだ。むろんその想像は、徹頭徹尾私の責任である。しかしそれにしてもその家は立派な二階家なのだ。通りに面している入口の格子戸は、きっと毎朝洗い立てられてでもいるように埃らしいものも見当らなかった。橋の上から見る家の裏側にも、どこもきちんと片付いている感じで、二階の物干台にひるがえっている洗濯物も、猥雑な干し方ではなかったのである。私は、しばらく橋の上に立っていた。態勢を立て直さなければならなかったからだ。いままでの順子の話やその夫の死から想像して来た夫の両親というのは、少なくとも下町の貧乏に追いつめられている町工場の職人という感じだったからだ。しかし私のいま眺めてい

笠城は満洲で戦死して、ノモンハン事件のあったときですよ、そのとき忠雄は、五つ、満でいえば四つのときでした。それから五年ばかり後家で通して来たんですが、今度の戦争がはじまるし、栃木にいる母も心配してくれて、いまの横川のところへ再婚して来たんです。横川は、わたしとは、年が一つ下ですが、丁度連れ合いをなくしていたので、みんなも良縁だといってすすめてくれて……、ほんとにその通りで、横川はほんとによくやってくれますよ。横川も、十八年に応召したんですが、運送店につとめていたときに覚えた自動車の運転が役に立って、部隊長さんからも、とくにかわいがられて、いまもその部隊長さんのお抱えの運転手をやっているんですよ。名前をいえば、びっくりなさるでしょうが」と彼女の顔は誇らしげにかがやいた、「その部隊長さんは、いまはあの景気のいい津山電機の社長さんなんですよ。横川は、そのお抱え運転手というだけでなく、ときには秘書のやるような秘密な仕事まで任せていただいているんですよ」

「津山電機の！」と私はおどろいて見せた。

もちろん驚く必要はなかった。私は、別にその社長とは何の因縁もなかったからだ。それでなくても、彼女のいおうとする暮し向きの裕福さは、もう十分すぎるほどわかった気がしていた。しかし彼女は、そんな私に頓着なくつけ加えたのであった。

「来月のボーナスは、六ヵ月分にきまりました。それに主人の場合は、社長さん個人からも特別手当が出るんです。それを加えますと、普通の会社の大学出の若い方の一年分の給料ぐらいになるんですよ」

私は、横川の妻の不審そうな眼が私の手のあたりにそそがれているのを見て、あわてて手の動きをとめた。私は、寒さでも感じたように手の甲をかわるがわるこすりあわせていたのだ。我ながら情ないと思い、それを恥じた。私の給料は、手取りで一万一千円前後であり、ボーナスだって、四十日分以上もらったことがなかった。たが、いまのような話を聞かされると、私のみじめさを思い知らされでもしたような生理的な現象を起すらしいのである。つまり、私の手の甲に寒さにでもあったような末梢血管の萎縮現象をもたらすのだ。しかも私の本心に反してである。おそらくその私は、顔を赤らめてさえいたにちがいなかった。私は、その自分にでも抵抗するようにいった。

「わたしの給料とくらべれば、わたしの場合は日給計算ですが、きっと五十年分ぐらいの額でしょうな」

今度は彼女のうろたえる番だった。彼女は急いでいった。

「そんな、いくらあなたの給料が少なくても、五十年などとは、そんな」

それから彼女は、ふいにだまった。私は、何となくほっと吐息をつきながらもやっと自分の用向きを切り出した。

「実は、順子さんが、お預けしてある子供を引きとりたいといってるんですが」

すると横川の妻の態度は、ふたたび急変した。

「あの女が、そんなことをあなたに頼んで来たんですか？」

「ええ」と私は、急にかわった彼女の権幕に恐れをなしながらも答えた、「是非にということなんですが」

「あの女にいってやって下さい！」と彼女は怒りをはっきり顔にあらわしながらいった、「子供は、荷物のように気ままにあっちへ

「おばあちゃん！」

何かたしなめる中年女の声がした。どうやら幼女は、中年女がなかにいる便所の戸でもあけた様子だった。やがて不機嫌そうな顔のまま出て来た女は、私と同年輩ぐらいの、つまり五十ぐらいの女だったのだ。絣模様の着物に帯をきちんとしめていた。私は、あわてて頭を下げた。彼女は幼女のあけたままの障子の向うに片膝をついていった。

「何のご用ですか？」

その声には剣をふくんでいたので、私は、押し売りとでもまちがえられているのを感じた。また、そのときの私の恰好は、まちがえられても仕方のない着古しのジャンパー姿だったからだ。私は、名刺をもたない。といって会社から支給されている身分証明書を出すわけにも行かなかった。で、私は、まわりくどく、笠城順子の夫の死んだ当夜のK工場の夜警番だったことから、その責任を感じて順子の家をたずねて行ったことなどを、まるで復習でもするように暗誦した。だが、彼女は、そこまでやっと話して来た私をぴしゃりと遮るようにいったのである。

「あの死んだ忠男は、この横川とは何の関係もございません」

「いえ」と私は、私の喋り方が何か誤解をあたえた気がして急いでいった、「ただ、私は今日、順子さんから頼まれて、順子さんのお子さんたちのことでおうかがいしたんです」

「あの女にだって、何の関係もないんですよ、この家とは」と彼女はきっぱりいった。

それは全くとりつく島がないという感じだった。こういう場合の交渉の仕方というものがあるにちがいなかったが、私のできたことは、ぼんやり立ちつくしているというだけだったのである。帰れ、という一言だけでも待っているようにだ。そのとき、先刻の幼女がとび出して来ると、勢いのあまり、彼女の肩へどんとぶつかって、それからその肩へ無作法な恰好で凭れた。彼女はその幼女へ叱るようにいった。

「外へ行って遊んで来なさい」

幼女は、突放されたようにはなれると、ふたたび奥へ向って、バタバタ走って行った。だが私は、その五十女の言葉に、彼女のかくされた苦しみでもにじみ出ているようなひびきを聞きのがしてはいなかったのである。私は、会社の人から苦労人よばわりをされることがあるが、それは私の苦労性を軽蔑するために使われることが多い。しかし私自身は、人の苦しみや絶望には、自分にどうできるわけでもないのに、特に敏感なところがある。どうできるわけもないのだから、無用な敏感さというべきものであろうが、しかし話し合える相手にめぐり合ったという気のすることだけは事実だった。だから私は、横川の妻の何を差しているか自分でもわからないのに、奥へかけ込む幼女を見送りながら、彼女へ漠然とこういっていたのであった。

「大変ですねえ」

すると彼女は、鼻白んだように答えた。

「ええ」

それから彼女は、ふいに立上って奥へ入ったかと思うと坐蒲団をもって来て式台へおき、私に腰を下すようにすすめるのだった。その彼女の態度は、先刻までのそれとはすっかりちがっていた。

「忠男は、前の主人の笠城との間にできた子なんですよ。でも、

たくらんでいるんですよ」

「復讐？」

「あの女が自殺そこねたということは、人づてに聞いていますよ。だが、死ねなかったとなれば、今度は、わたしたちへ祟ってくることを考えついたんですよ。忠男は、そりゃ、わたしの一人息子です。でも、義理というもんがあります。つまりわたしたちが、とにかく金に困らずにやって行っているのに自分たちに何の援助もしてくれなかったということが、憎くてたまらなくなって来たにきまってますよ。そんなこと、わたしには、手に取るようにわかります。もちろん子供を返せといわれれば、わたしは喜んで返しますよ。わたしには一人息子の忠男の子であってもですよ。ほんとにあんな手におえない子を育てるより、貰い子でもして育てた方が、もっとせいせいしますよ。だが、返してごらんなさい。あの女は手許に一日だってあの子供たちをおいておきませんよ。人にくれてやるか、わるくすると殺しかねませんよ。とにかくあの女は、人間じゃないんですからね」

「しかしあの人は、少しずつですけど、たしかにかわって来ているんですよ」

「信じませんね」と彼女はにべもなくいった、「お天道さんが西から上るということが信じられても、あの女がかわるということがあるもんですか」

その点については私は、横川の妻には不同意だった。たとえ悪へかわるにしろ、人間はどんな人間でもかわり得るからこそ、素晴らしい存在なのだと私には思われていたからであった。で、私は、だめを押すようにいった。

「それでは、子供さんを返す意志はおありになると順子さんにつたえてもかまいませんのですね」

すると横川の妻は、ちょっとひるんだ顔になっていった。

「でも、決定的なことは、主人が出張から帰って来てからでないと……、主人と相談しなければ申し上げられません」

「いつお帰りになるんですか？」

だが、彼女はどうしてか期日については答えずにこういっただけだった。

「社長のお供をして、昨日から横浜へ行っているんですよ」

私は、主人の帰って来る期日については、それ以上追究せず、ふたたび訪ねることのできる余地を残して、横川の家を辞した。だが挨拶をして軽やかな格子戸をベルの音とともにあけて出たとき、靴の下に何かやわらかいものを踏みつけたような感じがした。だが、私は、それほどふかく気にとめなかった。格子戸をしめるとき、まだ玄関にすわっている彼女へ、できるだけ愛想よく頭を下げていたからである。だが格子戸をしめて、いざ歩き出そうとした私は、文字通りとび上っていたのだ。私の右の靴の下から、腸を露出したまだ赤裸のねずみの子の死骸があらわれたからだ。しかしその私は、ふたたび跳ね上っていた。というのは、まだ眼の見えない同じ赤はだかの子が四、五匹も自分の行先がわからずに、私の足のあたりにうろうろしていたからである。ねずみの子におどろくなんて、全く大人気ない話だが、ちょこなんと四本の脚をちぢめながら、その腹からうす桃色の腸を露出させて死んでいるそれだけは、自分のせいであるだけに気味がわるかった。するとどこにいたのか、先刻の三つの幼女があらわれて来て、にこりともせず、ボール箱へそれらの

やったりこっちへやったりするようなもんじゃないといってやって下さい。大体、あの女は、気ままもんだというだけでなく、人間じゃありませんよ。忠雄は、あの女にだまされて一緒になったんですよ。全く忠雄が、あんなことを仕出かしたのもあの女のせいなんですからね。全くあのときは、横川に恥かしくて顔向けができませんでした。でも、主人はいい人ですから、たとえお前の実の子でも、この横川の家と何の関係もないんだし、またお前のせいでもないんだから、そんなことにくよくよする必要はないといってなぐさめてくれたんです。その上、ときによったら、自分たちに子がないんだからお前の孫を子供として育ててやってもいいじゃないかとまでいってくれたんです。ほんとに主人は、神様みたいないい人ですよ。わたしも、だから考えに考えた揚句、とにかく様子でも見に行って見ようと思ってでかけたんです。一昨年、一度、横川にはそんな義理もないのに、一万という金を借りに来たので、わたしからことわりました。それ以来年賀状一本もよこさないので、あの事件ののっていた新聞の住所をたよりにでかけたんですが、新聞に書いてある番地がちがっていて、あちこち二時間もうろうろしましたよ。そしてやっとそのアパートへ行ったら、部屋のなかってひどいもんで、その上わたしにお茶一杯も出さないんですよ。出せなかったのかも知れませんが、出せないなら出せないと詫びるのが礼儀じゃありませんか。そしてもし生活に困ってるなら、横川には子がないしするから、孫を引きとって一緒にいたいとわたしがいったら、あの女、どういったと思いますか？　別にそれほどほしいといった覚えはないのに、そんなにほしいのなら、もって行ってくれ！　といったんですよ。いいですか、まるで品物かなんかのように、もっていってくれ、といったんですよ。そんな言葉、たとえ自分の子であっても、人間のいえる言葉じゃありませんよ。それでわたしもつい荒い言葉になりましたけど、やはり血というもんでしょうか、こんな女のところへ孫はおいて行けないという気になって二人ともつれて帰って来たんですよ。さすがに帰りは、気が重くなりました。主人は、その二人の子供を見たらびっくりするだろうと思いましてね。ひどい恰好だったんですよ。それに言葉つきも乱暴だし、都電の電車のなかで、上の女の子がかがんでいると思ったら、なんと電車のなかでおしっこしてるんですよ。つれて帰っても、今後、どうなるだろうとほんとに気が重くなってしまいました。でも、主人は、環境さえよくなれば、子供もかわるといってくれて、上の子は、すぐ幼稚園へ入れたんですが、下の子は、どう教育したらいいか迷っているところなんですよ。それなのに、今度はかえせといってるんですか！　あの女は！」

私は、実際のところ、何が真実やらわからなくなっていた。順子を通じて想像していた順子の死んだ夫の両親は、私にとってもっと没義道な人々だと思い込んでいたからだ。だが、横川の妻の話は、筋道が通りすぎるほど通りすぎていた。私は、決してわるいとはいわないが、少なくとも順子の要求は不合理だと思われた。ただ、その私にとっての救いは、その要求は不合理であるとしても、彼女のなかに目覚めはじめたと思われる母性愛に、希望を見出すかも知れないということだった。ただ、私がそれをもぞもぞ口にすると、横川の妻は、入歯らしい白い歯を見せて嘲笑した。

「あの女に、母性愛だって？　そんなもん、かけらもあるもんですか！　あの女は、わたしたちに迷惑をかけておきながら、復讐を

さまざまの年令・職業

——ふえた教会員・婦人・自家営業——

六月末までに送ってくださった愛読者カード三五〇通について、ご報告します。

I、愛読者

㈠年令　二〇代が、圧倒的に多く四八%、つぎは、三〇代の二一%、あとは、一〇代の一一%、四〇代八%、五〇代五%、六〇代三%です。最低年令は、一三才、最高年令は八二才。各年令層にわたって、読者のあることがわかります。

㈡性別　男性六七%、女性三三%で、去年より婦人が五%増。

㈢職業　実に多くの職種のかたがいらっしゃいます。一ばん多いのは会社員の二六%、次が、学生の一三%（大学生が三分の二以上）で、この順位は昨年と同じ。三番目が、今年は、自家営業の一〇%、官吏の一〇%。自家営業では、商業が半数以上、以下工、農、漁の順。つぎが、昨年三位の教師八%、続いて、療養中六%、牧師五%、主婦五%、あと医師、店員、看護婦、職人、技術者などです。

㈣住所　東京の二一%、近畿の一三%、関東の一二%、九州の一一%、中国の一〇%が多く、全国各府県からカードが来ています。府県別では、東京のほか福岡、北海道、静岡、兵庫、大阪の順。沖縄およびアメリカにも読者があります。

㈤教会員　教会員のかたが、去年よりふえて、六六%、（去年五九%）、無教会四%のほか約三〇%は、求道者または、教会と関係のないかたのようです。

㈥教派　求道者をふくめ、教会に関係しているかたは全体の七七%ですが、その教派別を見ると日本基督教団が四三%、ルーテル系九%、バプテスト系七%、無教会、聖公会四%、あと改革派、フリー・メソジスト、ナザレン、ホーリネス、アライアンス、カトリックなどです。

㈦政党支持　社会党が五五%、民社党が七%、共産党が二%、その他の革新系支持が七%で、全体の革新系支持が七一%、保守系は、自民六%、保守系二%で、全体が八%。その他の浮動層が二一%です。

以上のデーターから、愛読者がじつにさまざまの年令、職業、地域、教派、政治思想にわかれていることがわかります。強いて特徴をあげれば、若い人、女性、地方読者、求道者、革新支持の多いことなどでしょう。

全国くまなく、教派を越え、あらゆる年令、職業のかたに愛読されていることは大きな喜びです。

II、編集についてのご意見

㈠教えられるのは、「生きる意味について」「伝道説教」「キリスト教のいろは」など。

㈡感動させられるのは、「信仰に生きる」「わが信仰の生涯」「証し」など。

㈢おもしろく読めるのは、「夜警番の日記」「聖句をめぐる座談会」など。

㈣希望する記事は、「キリスト者の生き方」「聖書の研究」「信仰生活の記録」「文学」が一〇%以上、その他「キリスト教の理論」「社会の動き」「外国のキリスト教」「家庭」など。

これからの編集に参考になる貴重なご意見をうけたまわれました。それを生かして、ますます良い雑誌にしたいと思います。

購入の方法では、一般書店でお買いになるかたの増大、牧師からすすめられたかたの多いことがめだちました。

（編集部）

ねずみの子を死んだそれとともに無雑作に拾い込むと、橋のところへ行って、事もなげに運河のなかへ投げ込んだのである。私も、思わず数歩、橋へ近寄って、なげ込まれたボール箱を見た。だが、ねずみの子は、投げられたとき、水面へ散ったらしく、空になったボール箱だけが、沈みもせずに、ゆっくり橋の下の方へ動いていた。幼女は、その私を振り返ると、ちょっと間のわるそうな微笑をうかべた。私に、ねずみを踏み殺させようとする計画だったことは、その微笑で、たちまち私にも理解された。だが、その計画は、まだ三つのしかも幼女のするようないたずらではない。私は、まだあのねずみの子の血のついているにちがいない右の靴の底に気味わるさを感じながら、思わずその彼女へいった。

「どうして、わたしにあんなむごいいたずらをするんだい？」

だが、幼女は、逃げもせずこう答えたのだった。

「わたしをなぐってもいいわよ」

私は、彼女があまり幼女らしくもなく泰然としているので、拳をかためて息をはきかけた。その私に、全く怒りを感じていなかったとはいえなかったのだ。だが、彼女は、拳に息を吐きかけている私を見ても、やはり逃げもせず泰然としていったのである。

「わたし、泣くわよ」

私は、仕方なく廻れ右をして帰りはじめた。むろん私に彼女をなぐるつもりなんかみじんもなかった。しかし、彼女がなぐられて泣いたとしたら、その泣き声は、このひっそりした一劃にひびきわたるような大きな泣き声にちがいないことだけは想像されたのであった。

（つづく）

自然に吸入できる

肺

結核直接治療機

岩井式油脂吸入機

米国特許U・S二八七一、八五五号
日本特許二二八、九八三～五号

岩井式油脂吸入機は結核菌の殺菌剤、発育阻止剤ゴマカプリン酸を一耗の一万分の一の極微粒子として肺胞まで到達させ、直接結核菌に作用せしめることによって肺結核を治療する新治療機！

研究所にお出で下されば岩井式吸入機にて浸潤、空洞が数ヵ月毎に萎縮消失し治癒した治療例が数多く保管してありますから、何時でも希望者の無料閲覧相談に応じます。

文献希望者には療養の心得を無料贈呈

横浜市神奈川区旭ケ丘六〇ノ十二
電話(49)〔一五二四
〔三四二一

岩井式油脂吸入機株式会社
岩井油脂物療研究所
所長医学博士　田沼息正
発明者　岩井良平

道順＝東横線反町下車松本消防署坂上、横浜駅西口よりバス31にて栗田谷下車

大塚野百合著

真実を追って

女教師のノート

著者は、恵泉在学当時河井道により人間の尊厳を教えられると共に、ペスタロッチにより教師としての自覚と使命を深められた。

私たちはどうしたら、失っている自分を回復し、隣人と交わることができるか、どうすれば人間の悲劇を正しく感じとり、その苦しみと責任を負い合えるのか。この問題意識に立って、自分の歩み、又書物との出会いを述べたものである。

〈内容〉教師であること、教壇に立って、教育について、日本人であること、女であること、キリスト者であること、責任をおう人間。

新書一七二頁　価一六〇円　〒三〇円

浅野順一・石島三郎・佐古純一郎共著

死と生をめぐって

誰もが経験することでありながら、語るに最もむずかしい死と生の問題について、何のケレン味もなく、淡々と、真実心から、キリスト者としての死生観を語った滋味つきないエッセイとキリストの死と復活を語る説教を収めた。

新書一五八頁　価一四〇円　〒二〇円

松木治三郎著

人間

その運命と愛をめぐって

人間が「生きる」上にどうにも逃がれられない切実な問題であり、その故に著者が自分の実存の場でたえず直観しつづけて来た幸福を「人間」「運命」「神」「愛」「この世に生きる」にわけて、自由に、捉われず語った本書は、やさしさの中に深さと厚味を兼ね備えた人生論として好評である。

新書二三二頁　価二〇〇円　〒四〇円

石島三郎編著

山上の説教

講解と座談会

イエスの山上の説教ほど、古来多くの人に愛されながら、又多くの人により、誤って解釈されてきたものはない。本書は、これの正しい理解のため、第一部を講解（石島三郎執筆）第二部を座談会（石島三郎司会、月刊「キリスト」連載）として、一般向きに編集されたものであり、個人としても、又各グループのテキストとしても好適である。

新書約二〇〇頁　予価二〇〇円

近刊

聖書の世界

信徒みんなで読み合う聖書研究誌

A5判　価五〇円　〒六円

八月号内容

特集・今月の聖書研究「世にある教会」

第一ペテロ一一―一二

(1)試練の中で　宮本信之助

(2)教会の試練　高倉徹

(3)初代教会と現代日本の教会　小笠原政敏

(4)**座談会**　仏教の地盤の中で（北陸にて）

対談「明日のことを思いわずらうな」　都留仙次・松本美実

連載　ヨブ記研究（浅野）　使徒行伝（竹森）

7月号修養会テキスト号（70円）残部僅少

お近くの書店に御注文下さい

日本基督教団出版部
東京都中央区銀座4の2　振替東京188329

編集後記

◇集中豪雨のため、被災なさったかたもいらっしゃるかと思います。毎年かならず、このような天災に見まわれると、この天災が、じつは人災であることを知らされます。人災を防ぎきれない、今の政治のありかたに、激しいいきどおりを感じます。キリスト教は、いつも被災者に「暖い救援の手」をさしのべ、喜ばれていますが、災害が起ってから「手をさしのべる」のでなく、災害が起こらぬよう「手をうつ」ことが、必要なのではないでしょうか。現代のキリスト者は、慈善だとか、救援だとかをするとともに、もっと根本的な社会悪の原因とたたかわなければならないのではないでしょうか。

◇戦争の惨禍の、悪魔的なことを思うとき、その思いは、ますます強くなります。戦争のおこるのをだまって見ていた、むかしの教会の姿が、くやまれます。今、わたしたちは、さまざまの戦争をおこす力に直面しています。この悪の力と、ひとつひとつ対決して、戦争をふせぐ努力をしなければならない——そのことはキリスト者が、「キリストは、世界の主であり、平和の主である」と信じているかぎり、どうしても、しなくてはならないことではないでしょうか。今月の「特集・戦争」をお読みくださって、お考えをお聞かせくださるようお願いします。

◇七月二五日より開かれる「世界宗教者平和会議」、八月六日から開かれる原水爆禁止世界大会は、戦争をおこすまいという世界の声が集まる機会です。ことに、今年は、共産圏から、はじめて、キリスト者の代表が来日します。東京では八月五日、夕六時半から神田駿河台の東京YWCA講堂で、米中ソキリスト者講演会が開かれます。世界に平和をもたらすために、「平和の主イエス・キリスト」を、つねに、のべつたえたいものです。

◇愛読者カード集計の結果は、七五頁をごらんください。全国各地にこの雑誌の愛読者のあることを知らされ、心強く思います。とくに伝道のために、この雑誌をもちいてくださっているかたがたに、心から感謝を申しあげたいと思います。伝道のためでなくては、この雑誌を出す意味がないのです。

9月号・予告

ジャングルのなかで聖書を説く
（特別寄稿）
アルバート・シュバイツァー

〈信仰に生きる〉
沖縄に教会を建てるまで
——文盲だった婦人が教会を形成——

〈わが信仰の生涯〉
「日本のシュバイツァー」
（台湾盛地伝道の父）**井上伊之助**

〈伝道説教〉
（立教大学教授）**菅　円吉**

〈巻頭随想〉
高瀬恒徳、原　良三、泉　園子

〈読者の証し〉
小児マヒの子の母として
川口　芳子

〈現代のカルテ〉
セブンティーン・モダン・シャズ
国字国語問題・リバイバルブーム

〈社会を見る目〉
韓国クーデターの背景

〈聖句をめぐる座談会〉
信仰によらぬことは罪
（ロマ一四・二三）

〈恋愛論4〉
続・男と女　高木　幹太

〈キリスト教のいろは〉
キリストをどう知るか　島村　亀鶴

〈生きる意味について〉
新しい実存　佐古純一郎

〈小説〉
夜警番の日記　椎名　麟三

月刊キリスト

昭和三六年七月二五日　印刷
昭和三六年八月一日　発行

編集人　高戸　要
発行人　浜崎次郎
発行所　日本基督教協議会
文書事業部
東京都中央区銀座四ノ二
振替口座・東京一一六七九
電話(561)六一三一・八四四六

発売所　教文館
東京都中央区銀座四ノ二

毎日新聞社販売店
東京都中央区有楽町一ノ二

印刷所　株式会社恒陽社印刷所

直接、ご購読になりたいかたは、発行所まで、お申しこみください。

一部　六〇円（〒六円）
半年　三六〇円（〒共）
一年　七〇〇円（〒共）
三弗（海外）

KIRISUTO The Christian Home Journal.
Vol. 13. No. 8 August 1961
Japan Commission on Christian Literature Tokyo

昭和二十四年二月三日第三種郵便物認可
昭和三十六年八月一日発行（毎月一回一日発行）

月刊 キリスト
八月号
定価 六〇円
NCC文書事業部

セレン・シリコン整流器
スポット溶接機・プラスチック塗料

Origin オリジン電気株式會社

社長 後藤安太郎

東京都豊島区高田南町1－195
(982) 1161(代)

楽しい
くらしの
ショッピング
＊

にほんばし 白木屋
しぶや 東横

IBM 2879
製版・印刷・恒陽社